中野市田上寺の前遺跡発掘調査報告書

田上

1986.3

長野県中野市教育委員会

中野市田上寺の前遺跡発掘調査報告書

田　上

1986.3

長野県中野市教育委員会

序

田上寺の前遺跡は、倭小学校を中心に弥生（後期）から古代に及ぶ複合遺跡です。

このたび、市の農村総合整備モデル事業の浄水場建設工事に伴い、遺跡を記録保存するため、緊急発掘調査したものです。

調査は、日本考古学協会員・中野市文化財保護審議会長金井汲次先生を団長に、調査主任檀原長則氏・調査員池田実男氏にお願いするとともに、地域の大勢の方々の御協力を得て実施しました。

今回の調査によって、弥生後期の竪穴住居址や同時代の土壙墓3基などが発見されたほか、縄文中期から弥生後期にかけての土器片が、数多く発掘されました。発掘により発見された遺跡・遺物は、この地域の生活・文化をはじめ、周辺遺跡の関係などを解明する、貴重な資料を得ることが出来ました。

田上区をはじめ調査に御協力をいただきました大勢の方々、報告書作成に御苦労いただきました、調査団の皆様に感謝と御礼を申し上げます。

昭和61年3月

中野市教育委員会
教育長　嶋田春三

例　　言

1. 本書は、長野県中野市大字田上宮の前865－3番地他2筆に建設予定の農村総合整備モデル事業・倭北部営農飲雑用水施設整備事業による浄水場建設に伴う緊急発掘調査報告書である。
2. 事前の分布調査は、昭和59年9月29日に実施し、発掘調査は、昭和60年4月18日～6月4日まで行った。この際、地主 小林茂雄氏を始め田上区の方々の多大な御援助をいただいた。
3. 整理作業は、昭和61年3月1日～30日まで、金井、檀原、池田、徳竹、栗原、山崎が行った。
4. 本書の実測図等は、金井、檀原、池田、徳竹が行い、トレースは、栗原、山崎が行った。遺構遺物の写真撮影は主に徳竹が分担した。
5. 本書の執筆者は、節の文末に記し編集は檀原が担当した。
6. 遺構図は$\frac{1}{10}$（水糸方眼配線）　$\frac{1}{20}$（平板測量）等の実測図を$\frac{1}{3}$に縮図した。
遺物実測図等は、$\frac{1}{4}$から小形品は$\frac{1}{2}$或いは現寸大を用いた。土器実測図のスクリーントーンは、赤色塗彩を示す。
7. 調査によって得られた諸資料は、中野市歴史民俗資料館に保管している。

目　　次

序
例　　言
挿図目次
表 目 次
図版目次

第Ⅰ章　遺跡の位置と環境
1. 位置及び自然と歴史環境 ---------- 1
2. 遺跡の範囲と周辺の遺跡・既出遺物 ---------- 3
第Ⅱ章　発掘調査
1. 発掘調査までの経過 ---------- 11
2. 調査団の構成 ---------- 11
3. 調査経過 ---------- 13
4. 土層堆積状況 ---------- 14
第Ⅲ章　遺構及び遺物
1. 縄文時代
土　器 ---------- 16
2. 弥生時代
(A) Y住居址 ---------- 22
(B) A地点の調査　A1・2号集石土壙 ---------- 25
(C) G3地点集石土壙墓 ---------- 31
(D) H4～H6地点の調査 ---------- 33
3. 古代～近世の遺物 ---------- 35
第Ⅳ章　総　　括
1. 弥生時代の遺跡・遺物について ---------- 39
2. むすび ---------- 50

挿 図 目 次

第 1 図　田上堰・鳴沢山分水口 ---------- 2
第 2 図　周辺遺跡分布図 ---------- 4
第 3 図　田上出土の尖頭器 ---------- 8
第 4 図　田上遺跡の既出遺物 ---------- 10
第 5 図　遺跡位置図 ---------- 12
第 6 図　グリット設定図 ---------- 13
第 7 図　土層堆積図 ---------- 15
第 8 図　縄文土器拓影図 ---------- 17
第 9 図　Y住居址実測図 ---------- 23
第10図　Y住居址遺物位置図 ---------- 24
第11図　A地点遺構全体図 ---------- 26
第12図　A１号集石土壙上層実測図 ---------- 27
第13図　A１号集石土壙下層実測図 ---------- 28
第14図　A２号集石土壙上層実測図 ---------- 29
第15図　A２号集石土壙下層実測図 ---------- 30
第16図　G３地点上層実測図 ---------- 31
第17図　G３地点下層実測図 ---------- 32
第18図　H４～H６地点実測図 ---------- 33
第19図　石器実測図 ---------- 34
第20図　古代～近世の遺物実測・拓影図 ---------- 37
第21図　弥生中期後葉土器実測・拓影図 ---------- 41
第22図　弥生後期土器実測・拓影図 ---------- 44

表　目　次

第 1 表　周辺遺跡表 ---------- 6
第 2 表　Y住居址出土遺物表 ---------- 24
第 3 表　古代～近世の遺物表 ---------- 36

第 4 表　Ｈ４～Ｈ６地点遺物表 ---------- 51
第 5 表　田上遺跡の既出遺物表 ---------- 52
第 6 表　縄文時代土器観察表 ---------- 53
第 7 表　〃 ---------- 54
第 8 表　弥生時代土器観察表 ---------- 55
第 9 表　〃 ---------- 56
第10表　〃 ---------- 57
第11表　石器観察表 ---------- 58

図　　版

図版 1　1. 遺跡遠景　2. Ｙ住居址全景 ---------- 61
図版 2　1. Ｙ住居址　2. 炉址　3. 柱穴と甕 ---------- 62
図版 3　1. Ｈ４～Ｈ６地点全景　2. 壷出土状態　3. 高坏出土状態 --- 63
図版 4　1～3　Ｈ４～Ｈ６地点遺物出土状態 ---------- 64
図版 5　1～3　Ｇ地点遺構・遺物検出状況 ---------- 65
図版 6　1～3　Ａ地点遺構 ---------- 66
図版 7　1～5　弥生式土器 ---------- 67
図版 8　1～5　〃 ---------- 68
図版 9　1～4　〃 ---------- 69
図版10　1～4　〃 ---------- 70
図版11　1～4　〃 ---------- 71
図版12　1. 祈願祭　2. 調査団　3. 現地説明会 ---------- 72

第Ⅰ章　遺跡の位置と環境

1　位置及び自然と歴史環境

高社山（1352 m）は中高地方の中央に聳え「高井富士」といわれるほど美しい山容と峯のけだかさをもっている。四季による色彩の変化に富んだその姿は、遠く善光寺平のはしからも望見され親しまれている。

さてこのような郷土の名山である高社山は、富士山型のコニーデ式火山で、本郡の集落を二分割する位置にあり、南部は岳南、北部を岳北と呼び、それぞれ延徳・木島の二平野を展開している。

外形は比較的単調にみられるこの山も、地質的に調査した場合は、極めて複雑な火山群をなしており、3個の火山と2個の寄生火山が集合した高社山火山群をかたち作っている。

火山群の活動は北方の虚空蔵山からはじまり、次に柳沢の滝の沢火山をひきおこし、三番目に噴出したものが主峯の高社山である。そして、最後に高社山の弱所をもとめて活動したのが三ツ子・飯盛山の寄生火山である。なお、一般に通ずる上部岩石は、普通輝石と紫蘇輝石を含む複輝石安山岩で、軽く、水の浸透性が強い。

田上区は、高社山の西部に屹立する「滝の沢山」の北峯、笠原嶽（田上山・1070.6 m）の西部山麓に散在する部落で、戸数130、人口550余を持っている。北方には旧火山の虚空蔵山（777.2 m）の尾根が屏風のように伸びて田上駅まで続いて北風を防ぎ、かつ風化した安山岩と火山灰が粘土化したローム層を挾んで水の浸透性を防ぎ、笠原嶽の山肌をえぐる大沢の大久保・観音堂・大洞・水の尾の中で、この水の尾から滾々と地下水が湧き出て部落を流れ、飲用・灌漑に利用されている。

部落の中央に「たんぼ」と俗によばれる平担耕地があるが往古は沼であったと推定される。

西方を洋々と北流する千曲川は、魚類・貝類等の食料資源が豊富に獲れたのみでなく、太古より度々の洪水による河島の地形をつくりだし肥沃な農耕地となっている。

積雪も岳北地方より少なく西向きの傾斜地のため、西日を受けて雪も比較的消え易く風当りも柔らかな温暖な地域で住みよい環境である。寺の前地籍は田上部落の西端に近く中野市農協倭支所より約200 m北方で、長野電鉄線に近く、大門・飯綱前・宮ノ前地籍に挾まれた狭小な地域で、その西部千曲川面に川端地籍が広がり、県道が通過している。

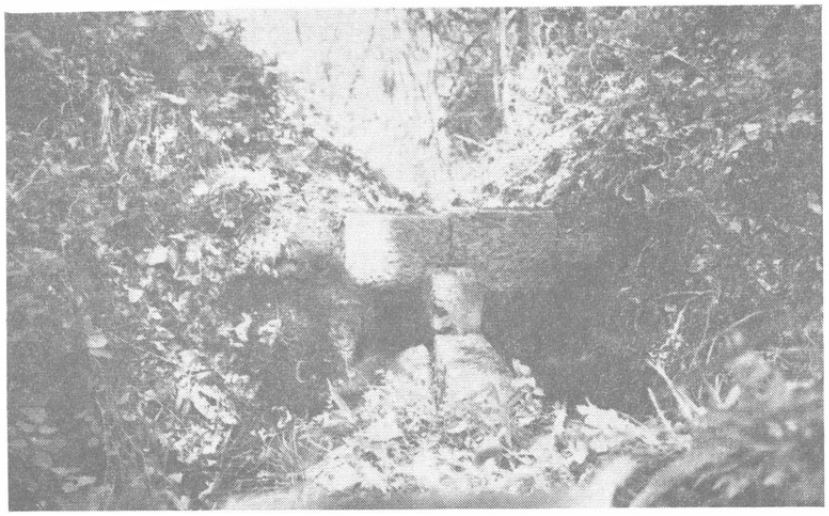
田上の初出文献資料は、現在のところ、笠原信親証文目録（斉民要術裏文書）に記された「信親所帯願行状」で、

「伊豆太郎、田上村信俊一期之後、可分譲千信親・信直等由裁之に、寛元四年十月十八日」これによって笠原牧内の田上村には寛元4（1246）年に笠原氏が存在していたことが判る。

近世になって、森忠政検地378石4斗、福島正則検地200石4斗2升となり、 寛永9（1632）年の検地では、 303石4斗2升9合となり、同16年に飯山の松平領となり、元禄時代には、 486石1斗7升5合と急速に開発されてゆく。享保元文年間は、総戸数60～70戸で、文化文政頃に78戸に増加した。（山岸謙治氏所蔵　五人組帳）また、田上・岩井村と対岸の蓮村との千曲川の島地論争もこの村の特色だろう。年々の洪水による川欠、地形の変化が、論争の元で、享保元年の裁許状で、田上・岩井村の勝訴となっている。

また、須賀川の倉下川より分水して13.9㎞高社山北麓を通じて岩井堰或いは田上堰が 寛文年間、青木庄八によって開設された。これは鳴沢山で、両村に分水されていたが、現在は、千曲川の揚水を使用して、通水していない。また田上村は、広大な山林を所持し、夜間瀬山の里方 入会35ケ村に加入しておらず、岩井村と入会論争を行っている。

中小屋越えの道は、岳北地方と往昔より重要な交通路と考えられる。　　（市村健八）



第1図　田上堰・鳴沢山分水口

2　遺跡の範囲と周辺の遺跡と既出遺物

遺跡の範囲と周辺の遺跡

従来、中野市田上に所在する遺跡は、「寺の前遺跡」と「日向遺跡」に分離されていたが昭和60年度行われた、詳細分布調査で、検討の結果、「田上遺跡群」として位置づけ、田上の集落全般から、豊国神社上までの25万㎡の広範な遺跡と確認され、旧石器時代から、縄文・弥生・古墳・古代・中世・近世・現代までの一大複合遺跡として認定され、今回の少面積の発掘でも立証されたのである。

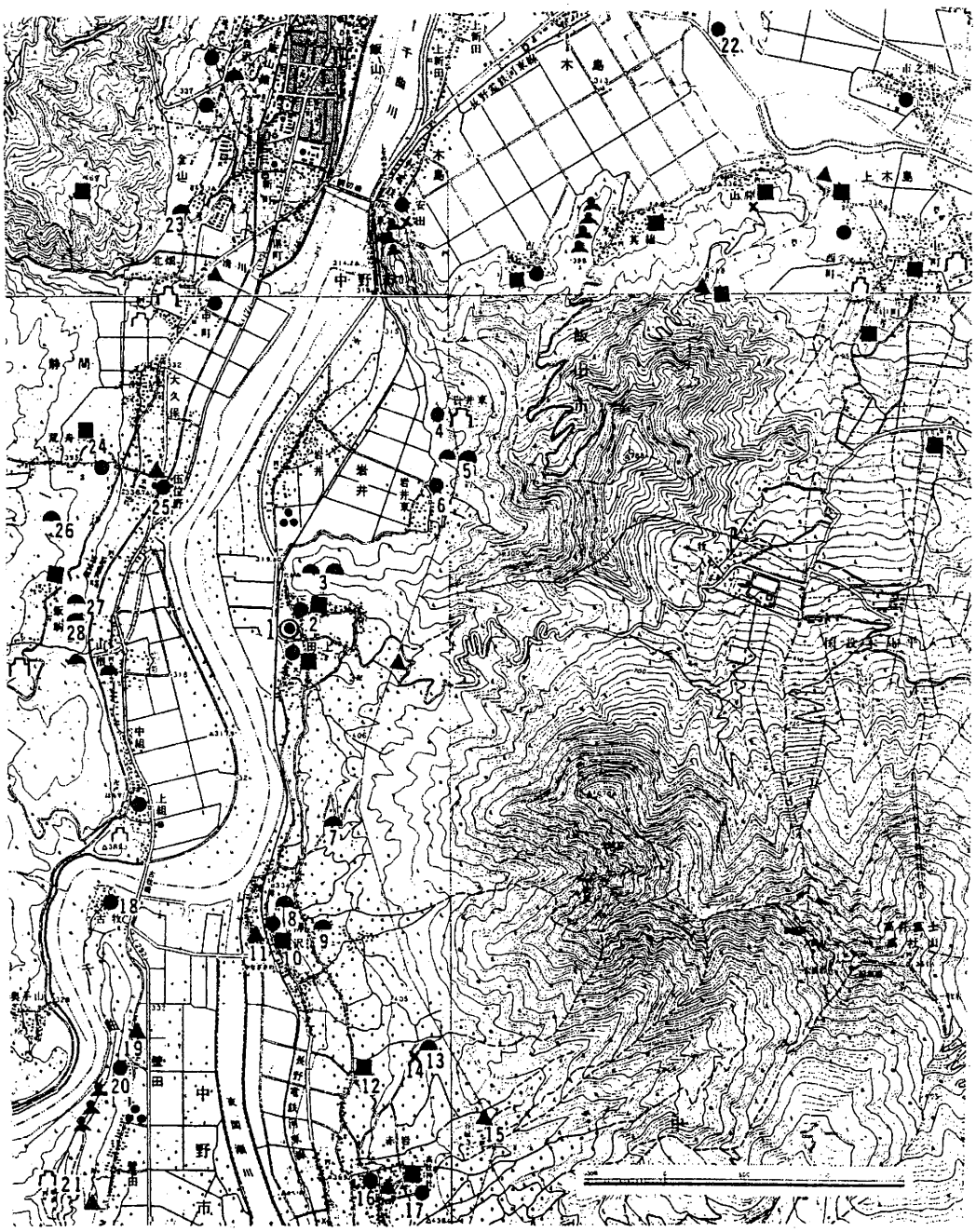
田上の遺跡が初めて紹介されたのは、大正11年発刊の下高井郡誌からで、昭和5年1月の「県史蹟名勝天然記念物調査報告」第11集に、岩崎長思氏が「田上の石臼群」の調査報告を記述され、その保存に、留意されておられるが、畦畔、石垣、道路等に所在するため、遺構との関係が、不明確な点が指摘されていたが、今回の調査で2点の同種遺物が確認された意義も大きいと思われる。なお道路に所在した「集合石臼」は倭小学校に移転保存されている。

こゝで高社山西麓の弥生時代以降の遺跡を概観してみると、南より赤岩神宮寺下遺跡で箱清水期の小形甕・太形蛤刃石斧・扁平片刃石斧・有孔石剣などが出土しているから、中期に属する遺構も存在すると思われる。また昭和33年に同所で土師編年、鬼高期に属する住居址が検出され、好資料の該期の土器が伴出している。(1) 前掲書第5集に同じく岩崎長思氏によって報告された、七つ鉢遺跡がある。田上遺跡との類例で注目されるが、伴出遺構、遺物が、現在まで明確でないのが惜しまれる。夜間瀬川と千曲川の合流地点の上に所在する柳沢の遺跡も広範囲に、栗林式～箱清水式の土器片が散布し、有孔磨製石鏃・太形蛤刃石斧・扁平片刃石斧・管状土錘・管玉・勾玉が採集されているが、現在まで学術発掘は行われていない。

岩井の低湿地をひかえた、岩井東や、月岡の台地からも箱清水期の土器片がみられるが、詳細は不明確である。千曲川下流の右岸では、木島平村の三牧原・宮の島の2遺跡が知られているが、箱清水式に属する遺跡としては、瑞穂地区が北限と考えられている。(2)

中野市安源寺遺跡や、栗林遺跡とともに学術発掘された、飯山市静間・伍位野に所在する田草川尻遺跡は、田上の対岸に所在する。昭和47年、52年に2回に亘って緊急発掘調査が飯山市教委によって行われ（担当高橋桂氏）縄文前期から土師後期までの遺構が確認され、特に箱清水期に属する、4基の住居址と伴出の土器資料から、編年案が提示されている。(3) また、笹沢浩氏（歴史手帖 1986）によって「飯山形」と呼ばれる甕形口縁の形態は、中野市の安源寺・間山などの遺跡から千曲川下流域の特色ある形式として把握されており、田上遺跡との関連が注目される遺跡である。

左岸下流の弥生式遺跡は、長峯丘陵をはさんだ、常盤平・外様平の周辺に多く散在し、東長峯遺跡（飯山市寿東長峯）、柳町遺跡（豊田、柳町）、須多峯遺跡（方形周溝墓）などが著名である。そして箱清水式の北限は上境までとされている。(4)



×旧石器　■縄文　●弥生　▲土師　古墳　凸城館跡　旗塚　古銭

第２図　周辺遺跡分布図（数字は第１表の遺跡名）

中野市以北の弥生式の遺跡は、日本的にみても、豪雪地帯に所在し、共通する文化を包含する。弥生中期の善光寺平南部の近年の発掘成果をみるとき、後期の箱清水期に到って、ようやく、両者が比肩すべき位置に到ったと認識される。

稲作による集落共同体は、富の差によって階級社会を生み、権力者が出現し古墳が築造される。その造営の規模や副葬品で、被葬者の性格が、推定できるが、高社山西麓の古墳は、赤岩古墳（中野市赤岩、北くぼ、後期・円墳・勾玉・銀環・小玉・直刀・鉄鏃・鍔出土）、小丸山古墳（柳沢中久保、中期・円墳・堅穴式石室？　管玉・小玉・切子玉）、八幡塚古墳（柳沢八幡塚、後期・横穴式石室）塚穴古墳（柳沢、塚穴）ほとんど破壊された古墳が点在し、田上遺跡の北方、日向山の山頂の１号古墳は、円墳で直径25 *m*、高さ 3.8 *m* の規模で葺石もみられ、後世烽火台に利用された痕跡もみられるが、ほぼ完存している。下方には、２号・３号古墳が所在し、２号古墳は、組合せ石棺状の遺構（長さ 2.5 ×幅 0.6 *m*）が露出し、３号は、破壊されている。これらは、石室の形態より、6世紀第二４半紀頃の築造と推定される。また岩井東の北方の尾根上にも２基の古墳が並列しているが、時期は不詳である。

さて先述の如く、弥生時代後期にほゞ同じ生産力を持つに至った、飯山・中野地方は、始源期の古墳の築造が善光寺平南部地方と、ほゞ同一時期に始まると推定され、その注目すべき古墳が、田上の対岸の勘介山古墳（静間勘介山・前方後円墳・長さ 35 *m*）で、内部主体が明らかでないが、現在当地方の最古の古墳の一つと考えられている。また長峯丘陵南端の有尾古墳（飯山割林・前方後円墳？（帆立貝型）長さ 22 *m*）は、培墳を伴っており、勘介山古墳に後続する、飯山・木島平地方の小首長墓と考えられている。また勘介山古墳の南方には、五里久保古墳群（秋津・蓮・五里久保）が所在し、五里久保１号墳は、直径25 *m* の円墳で葺石もみられ、完存し、８号古墳まで段丘上に点在し、田上や高社山は指呼の眺望である。

以上は飯山市側の主な古墳を列挙してみた。

文　献

(1) 金井汲次・桐原健「長野県中野市赤岩神宮寺下遺跡調査概報」『信濃』Ⅲ 10－8　1958

(2) 高橋桂他『三枚原遺跡』　1977

(3) 大田文雄「北信濃の弥生後期編年について」『信濃』Ⅲ 32－4　1980

(4) 飯山市教委「遺跡分布調査報告Ⅰ」　1982

第1表　周辺遺跡表（長野県史より）

番号	遺跡名	所在地	立地	遺構・遺物	文献	備考（所蔵者）
1	田上寺の前遺跡	田上・寺の前	山麓	(縄)堀ノ内式、石鏃、打石斧、石皿、磨石 (弥)後期土器、太形蛤刃石斧、扁平片刃石斧 (平)土師器、須恵器、灰釉陶器		倭小学校
2	田上日向遺跡	〃　宮の前		(縄)中期土器 (弥)後期土器 (平)土師器、須恵器		倭小学校 望月　敦
3	日向山1号古墳	〃　日向山	山頂	(古)円（径25.0　高3.8）、葺石		
	〃　2号〃	〃　〃	〃	(古)円（径7.7　高0.8）、組合石棺（長2.5　幅0.6　高0.4）		
	〃　3号〃	〃　〃	〃	(古)円（径12.0　高2.0）		
4	月岡遺跡	岩井月岡	台地	(弥)後期土器 (平)土師器 (中)岩井氏館跡		
5	岩井東1号古墳	〃 下林	山頂	(古)円（径15.0　高3.5）		
	〃　2号〃	〃　〃	〃	(古)円（径11.0　高1.7）		
6	〃　遺跡	〃 岩井東	山麓	(弥)		
7	小丸山古墳	柳沢中久保	〃	(古)円 管玉、小玉、切子玉		
8	八幡塚古墳	〃 八幡塚	〃	(古)円、横 (中)経石		
9	柳沢塚穴古墳	〃 塚穴	〃	(古)円		
10	柳沢宮の前古墳	〃 宮の前	〃	(縄)中期土器、石鏃、磨石斧、石錐、石匙 (弥)管玉		
11	柳沢屋敷添遺跡	〃 屋敷添	〃	(縄)勝坂式、加曽利E式、石鏃、打石斧、磨石斧、石匙、磨石 (弥)百瀬式、箱清水式、石鏃、磨石鏃、太形蛤刃石斧、扁平片刃石斧、磨石、石槌、細形管玉、管状土錘、硬玉製勾玉、滑石製紡錘車		大原　勇
12	七ツ鉢	赤岩	〃	(縄)石鏃、磨石斧、砥石、石臼、環石		市史跡
13	赤岩古墳	〃 北くぼ	〃	(古)円 勾玉2、銀環2、小玉2、直刀2、鉄鏃10、鍔1		
14	御林遺跡	〃 北久保	〃	(先)ナイフ形石器		江口良男
15	神宮寺遺跡	〃 神宮寺	〃	(古)勾玉 (平)土師器、須恵器		
16	神宮寺下遺跡		〃	(弥)後期土器、太形蛤刃石斧、扁平片刃石斧、有孔石剣 (古)竪穴住居1 鬼高式 （昭33年発掘）		高杜神社

番号	遺跡名	所在地	立地	遺構・遺物	文献	備考(所蔵者)
17	馬場西遺跡	赤岩馬場西	山麓	(弥)有孔石剣		
18	古牧遺跡	古牧・西台	段丘	(弥)後期土器		
19	壁田宮下遺跡	壁田宮下	丘陵麓	(奈)竪穴住居1 真間式 (平)集石墓 土師器、須恵器、灰釉陶器 (中)集石墓 内耳土器、人骨片 (昭46年発掘)		中野市教委
20	壁田遺跡	〃	〃	(縄)磨石斧 (弥)中・後期土器、太形蛤刃石斧、管玉		
21	壁田城跡	城山	山頂	(中)郭、空掘、旗塚 大甕		

木島平村

22	宮之島遺跡	上木島・宮之島	扇端	(弥)栗林式、箱清水式		木島平中部小学校

飯山市

23	法伝寺1号古墳 〃 2号 〃	静間 金山 松尾		(古)円(径26.0 高4.0) (古)円(径18.0 高2.7) 鉄剣		一説に帆立貝式前方後円墳
24	山ノ神A遺跡	静間・法花寺	扇端	(縄)集石遺構 後期土器、佐野Ⅰ・Ⅱ式、晩期魚形、線刻画土器片、石鏃、磨石斧、石錐、石匙、石剣、石錘、耳栓 (昭47年発掘)		飯山市教委
	山ノ神B遺跡	静間・宮下	丘頂	(縄)石組遺構 山形・楕円押型文土器、石鏃、石槍、凹石、石皿、石錐、石錘、石棒 (昭47年発掘)		飯山市教委
25	田草川尻遺跡	静間下五位野	扇端	(縄)前・中期土器、石鏃、打石斧、石匙、凹石 (弥)竪穴住居 栗林式、箱清水式 (古)竪穴住居、祭祀址 五領式、和泉式、鬼高式、須恵器、滑石製勾玉、鉄鏃、鞴羽口 (奈)須恵器 (平)土師器、須恵器、刀子		飯山市教委
26	勘介山古墳	静間下五位野	山頂	(古)前方後方(長35.0 後方径20.0～22.0 同高3.0 前方幅12.5 同高3.0)		
27	五里久保1号古墳	静間五里久保	段丘	(古)円(径25 高25)		

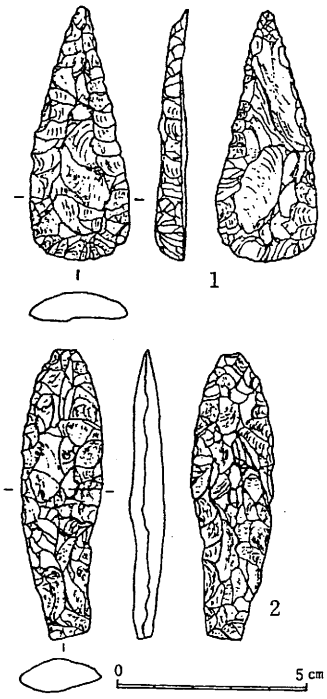
田上出土の既出遺物

尖頭器（1）（第3図1）　常田勇氏蔵

飯綱前1126の水田（現在りんご園）から出土したもので良質の頁岩製で、木葉形を呈し、横断面はカマボコ形で、片面（裏面）は、剥離面を浅く加工し、表面は押圧剥離の深型調整が、片面を覆っている。これも伴出遺物が不明確だが、小坂遺跡（栄村）などが属する東山系の後期旧石器文化に該当し、ほゞ同時期（約1.6万年前）の所産と思われる。

尖頭器（2）（第3図2）　三井秀次氏蔵

宮の前1024の水田より昭和55年春、発見されたもので、両面調整で、押圧剥離面が、両面を覆っている。頁岩製で、石質からも中部地方から東北地方の文化系に属することが判る。有肩の槍先形の尖頭器に属し、調整により、（1）より後出的と考えられ南信の神子柴石器文化と同一期と考えられる。かつて杉原荘介氏（明大教授）は、先土器時代後期は、片面調整尖頭器文化（武井Ⅱ石器時代）→両面調整尖頭器文化（上の平石器文化）→晩期は、烏帽子形石核による細石器文化（矢出川石器文化）→船形石核による細石文化及び有茎尖頭器文化に変遷したとされた。[1] このように旧石器文化に属する資料は今後も大切に保存されるよう希望し、高社山麓の該期文化の究明に意をそゝぎたく思われる。



第3図　田上出土の尖頭器

斧形刃部磨製石斧（第4図5）　倭小学校蔵

日向地籍（地点未確認）より山田直正氏が発見されて寄贈されたもので、蛇紋岩製で、円刃に局部磨製され、断面、弱凸強平両刃（佐原1977）の類に属する。また図示の裏面の刃部磨製部の片側に稜がみられる。出土状態が不明のため、資料的に劣り、同定に難点があるが本県の神子柴形石斧（神子柴遺跡・上伊那郡南箕輪村神子柴）の断面三角形または、カマボコ形の片刃で短冊形と呈するものより先行すると考えられ、杉久保AⅡ群文化（野尻湖杉久保A遺跡）や茂呂系文化の茶臼山遺跡（諏訪市）に同じ刃部磨製石斧が伴出し、形態的には後者に類似している。これは、後期旧石器文化に属し、千曲川水系古代文化研究所の森嶋稔氏の編年によれば、2.2万年前の姶良テフラの直後の年代が与えられている。[2] また小田静夫C.T・キーリー氏の武蔵野台地の編年、第16 亜文化期（3～2万年前、基部と先端をわずかに加工したナイフ形石器・削器・斧形石器<局部磨製も含む>礫器など）に属すると思われる。

打製石斧（第4図7・8）　7丸山宗治郎氏蔵・8倭小学校蔵

両者とも安山岩質の打製石斧で、7は丸山氏の屋敷畑より、昭和58年に発見されたもので

撥形の両刃の形態で、刃部が磨耗し、土掘具と考えられ、縄文時代の所産と考えられる。

磨製石斧（第４図９・10）　柳沢山田幸三氏蔵

９は岩木場の路上で昭和50年頃、表採されたもので、10は昭和51年頃、薬師木場で炭窯を築いた際、地下30*cm*の所から発見されたもので、両者とも蛇紋岩製で、よく研磨されている。９は、石斧両面との間にやゝ稜のある乳棒状の形で、刃部は蛤刃で、この形態の石斧は縄文前期中葉の黒浜式以後にみられ、弥生式の太形蛤刃石斧の祖型と考えられている。10は、定角式磨製石斧で、横断面は隅丸長方形で、刃部は片刃で定形化している。広い分布圏と、出土量の多いのは、縄文中期終末の頃とされている。前者は伐採具、後者は、加工具としての手斧に当る。

太形蛤刃石斧（第４図６）　清水篤氏蔵

自宅土蔵の基礎工事中発見されたもので、閃緑岩製で弥生中期に伴う磨製石斧で、伐採具・割斧として使用され、単独に山中などに発見される例が多い。

甕形土器（第４図１）　倭小学校蔵

３の台付甕と同じく市村近義氏が寄贈されたもので、昭和48年３月１日、耕地整理の水路改修中に発見されたもので、長胴形を呈し頸部下に簾状文を１周させ胴上半から口縁部まで櫛描波状文で埋めている。田草川尻遺跡の編年案から、弥生後期箱清水式の前葉の所産と考えられる。

壷形土器（第４図２）　同　上

やゝ堅緻な焼成で、朝顔形口縁形で、胴下腹部下に稜を有し外面は、下腹部稜上まで赤彩し内面は、収約部まで赤彩されている。箱清水式の後葉の所産と考えられる。

台付甕（第４図３）　同　上

台付の下部が僅かに欠失しているが、きわめて堅緻な焼成の土器で、頸部に簾状文が１周する。赤彩が外面と内面収約部上まで施され、器面に光沢があり、塗彩されている如くである。田草川尻遺跡、Ｙ２号住から同形のものが検出され、１と同所で伴出したとすれば、時期は同一と考えられる。

小形甕（第４図４）　同　上

田上出土の箱清水式に伴う小形甕形土器である。

小形皿形土器（第20図－２・11）　清水篤氏蔵

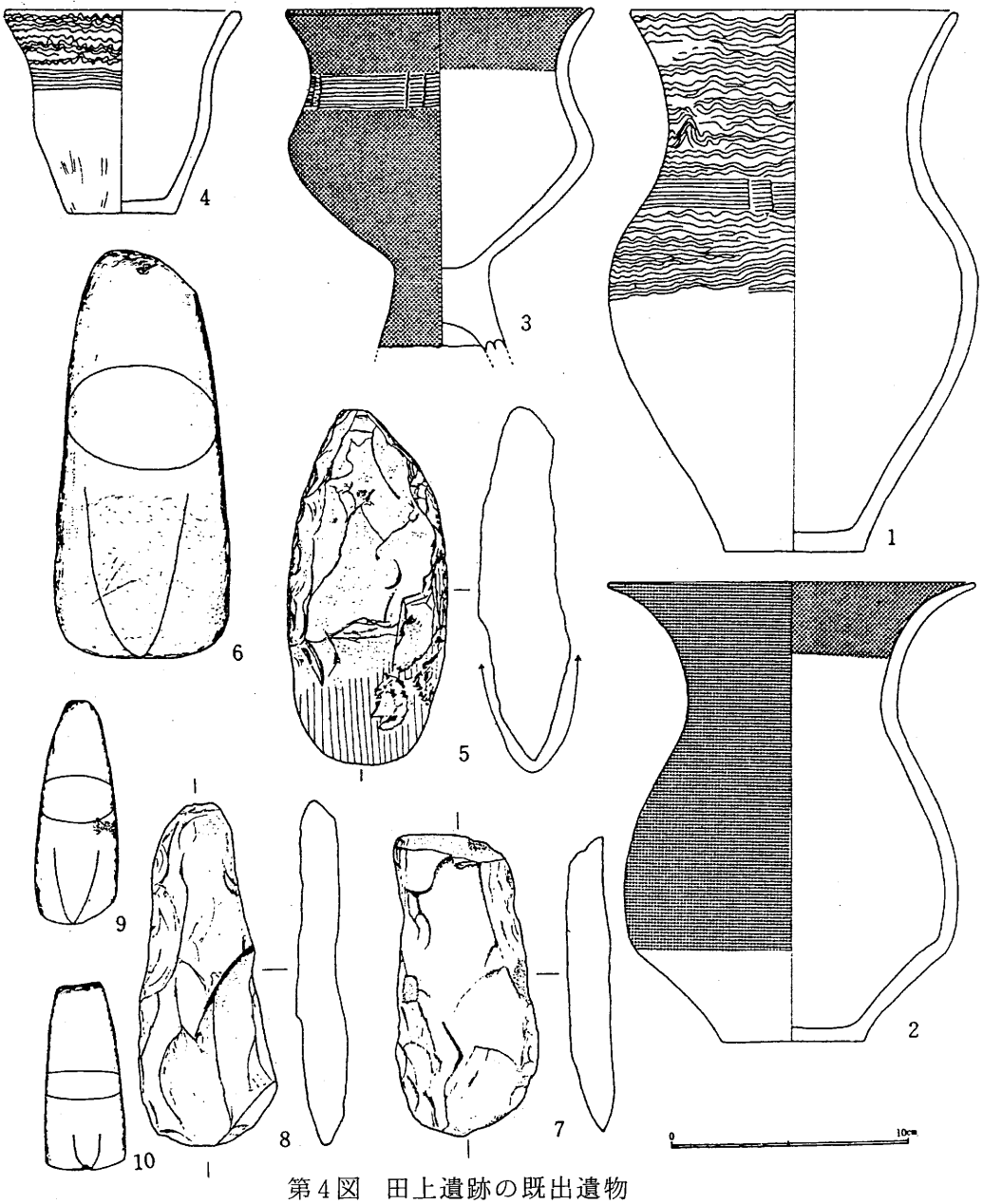
大洞地籍の畑より昭和50年頃、自家水道パイプ敷設工事の際、出土したもので、明黄褐色の「かわらけ」と呼ばれる、低火度酸化焔焼成の土師質土器である。11には煤状の附着物が僅かにみられる。ロクロ整形ののち切り離しは、篦状工具を使用しているのではないかと考えられ、12は底部が楕円形を呈する。出土地点は、田上集落の上段に当り灯明皿の使用例からすれば、中世の堂址関係の遺物と考えられる。中野市では、間山建応寺跡の発掘調査で、出土したが、まだ未開拓の分野で、今後の資料集積が望まれる。中世の一時期、政治の中枢

の地であった鎌倉市に於ける中世土器の研究をされた服部実喜氏の編年案によれば、[2]第Ⅰ群第Ⅴ期、14～15世紀初頭（南北朝～足利時代初期）の年代が与えられている。（檀原長則）

文　献

(1) 杉原荘介『長野県上ノ平の尖頭器文化』1973

(2) 服部実喜「鎌倉旧市域出土の中世土師質土器」『中近世土器の基礎研究』(1) 1985



第4図　田上遺跡の既出遺物

第II章　発　掘　調　査

1　発掘調査に至るまでの経過

田上地区の飲料水は、東部の高社山麓から湧き出る水を利用しているが、永年の願いがかない農村総合整備モデル事業により、倭北部営農飲雑用水施設整備事業として新たに水道が入ることになり、この浄水場建設が田上寺の前遺跡の範囲内で行われることになった。

田上寺の前遺跡は、縄文時代から中世に至る複合遺跡で、以前倭小学校プール建設の際かなりの量の土器片が出ており、表採でも磨耗した土器片がいつでも拾える場所である。

昭和59年7月23日事業主体（担当市経済部農政課）から浄水場建設に伴うこの遺跡保護について協議書が提出された。

現地の状況から 9月29日に試掘調査を実施した結果、ほぼ全面からかなり濃密に土器片を検出したため、工事前に発掘調査をして記録保存措置をはかることになった。

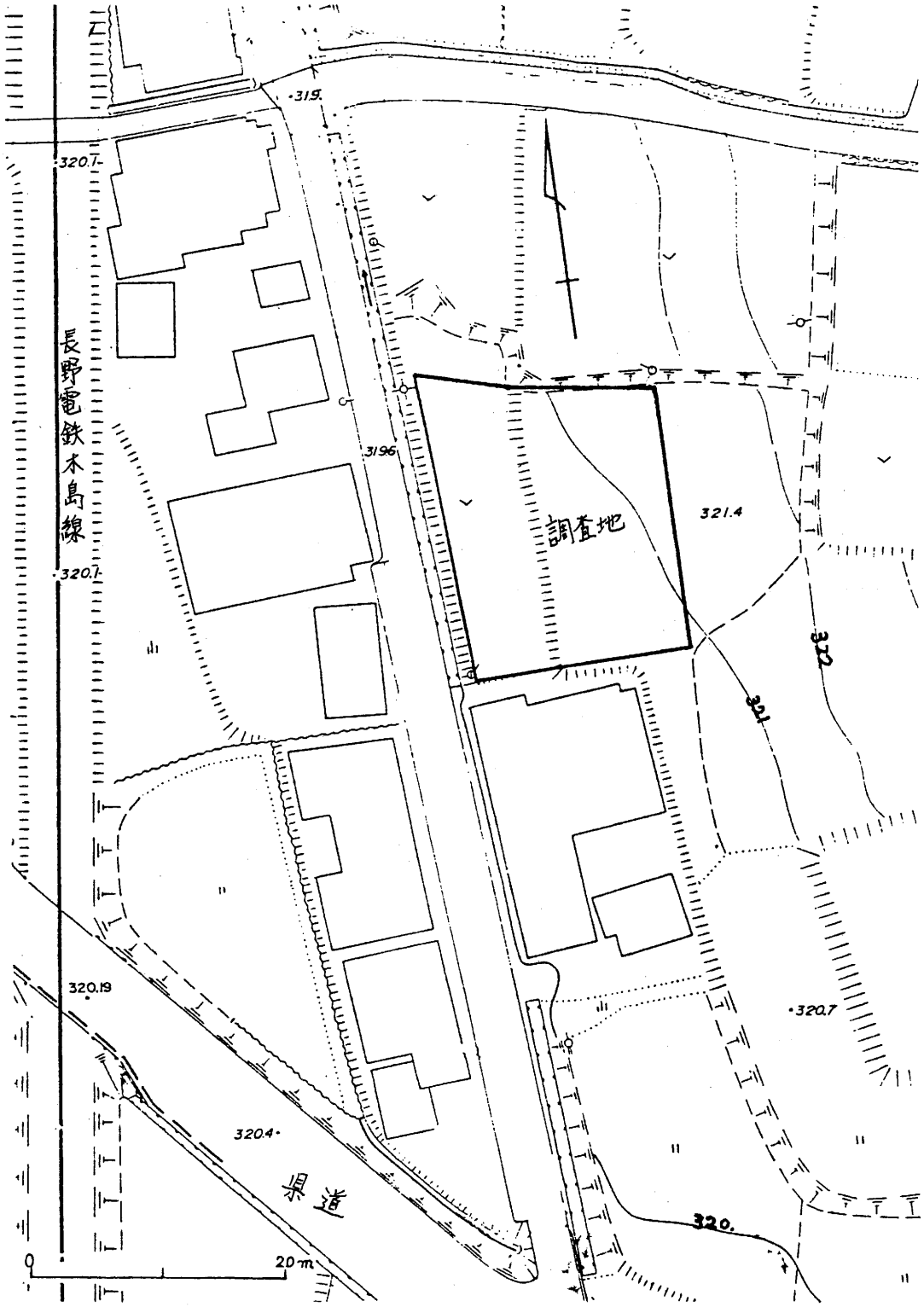
位置は、大字田上字宮の前863－1ほか2筆で、面積467 ㎡である。

発掘調査は、60年度事業とし、工事日程の都合から現地の調査期間を4月15日から6月15日までとし、発掘通知等必要な手続きを済ませた。

4月2日発掘調査団を編成するとともに、地元田上区長・高井地方史研究会の倭地区委員に発掘作業の協力を要請し、調査開始の体制が整った。

2　調査団の編成

調査責任者	嶋　田　春　三	中野市教育委員会教育長
調査団長	金　井　汲　次	日本考古学協会員　中野市文化財保護審議会会長
調査主任	檀　原　長　則	日本考古学協会員
調　査　員	池　田　実　男	中野市文化財保護協力員
事　務　局	町　田　佳　久	社会教育課長
	小野沢　　捷	同　歴史民俗資料館管理係長　県考古学会員
	徳　竹　雅　之	同　学芸員　県考古学会員
協力団体	田　上　区	
参　加　者	市村健八．大原　勇．古田　茂．田川照生。山上嘉一．藤沢英夫。 金井英男．阿藤英奈．馬場恒夫．酒井袈裟信．市村精子．小林高夫． 市村駒治．町田繁秋．小林繁樹。上野直吉．滝沢一治郎．浅野正之、 小島喜平．小島金治郎．小林律子．高木成美。小林　等．関　純子． 藤沢高広．山岸重春。酒井健次　　（小野沢　捷）	

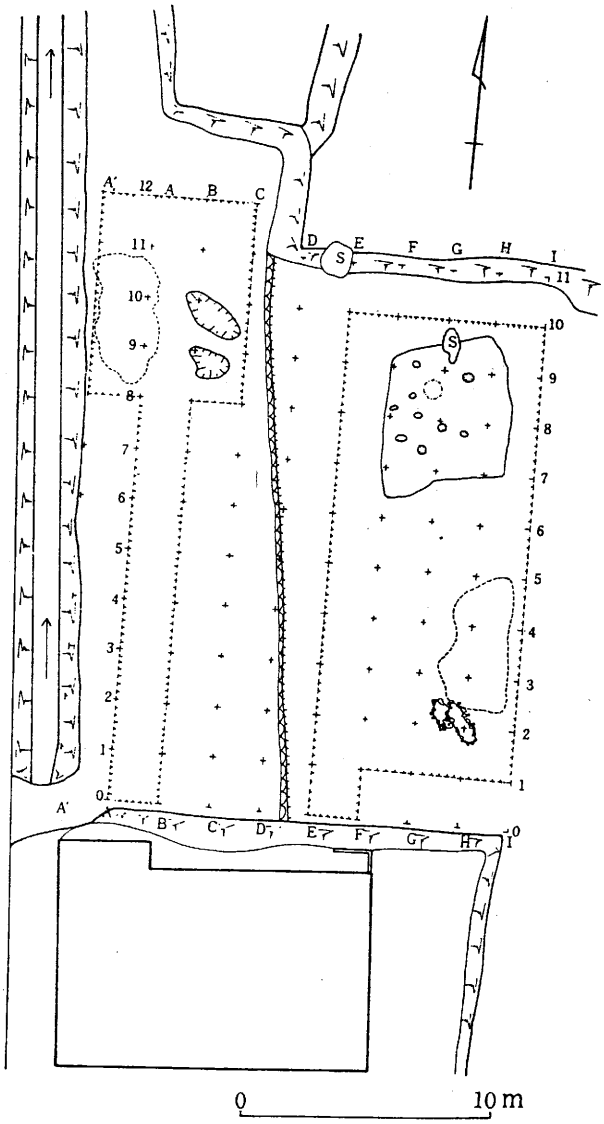

長野電鉄木島線
調査地
県道
320.7
319.
319.6
321.4
322
321
320.19
320.4
320.7
320.
20m

第5図　遺跡位置図

3　調査経過

発掘調査は、昭和60年4月18日の朝、調査の成功と作業の安全無事を祈願して、事業主体、調査員並びに作業員等関係者すべて参加のもと結団式、そして鎮魂祭を行った後、機材の搬入を終え調査区内(約400㎡)に2m×2mのグリットを全域に設定した。午後からバックフォーを使ってA列より表土を除去し、作業員により掘り下げを開始し、本格的な発掘調査に入った。まずA－8～9グリットより弥生後期の高坏脚部をはじめ土器の出土がある。

同様に遺構・遺物の検出を目的としてE列及びG列の掘り下げを行う。またA－8～9グリットについては拡張して精査を続ける。この結果、25日までにA－10，G－4グリット一帯より集石遺構が、G－9グリット付近より落ち込みを確認し、更に周囲を拡張し精査した。同時にA列のセクション測量を開始する。



第6図　グリット設定図

G－9グリット検出の落ち込みを精査し、4月30日までに東西約5.5m、南北約6mの隅丸方形の平面プランを確認し、住居址遺構と判断する。継続して西壁より住居址内の掘下げを行う。またA–10グリット検出の遺構確認のため、初日に設営したテントを移動しテント下の掘り下げを行う。

5月8日から住居址周囲に測量のために、やりかたを組む。G・H－3～6グリット検出

の土器及び礫の集積地点の拡張を行う。

H－3グリット付近より楕円形に2基の集石状遺構を検出し精査する。住居址のタタキ床を確認し、中央部やゝ北西寄りから地床炉と思われる焼土と9個の柱穴を検出、11日までに掘り下げを完了、測量を開始する。

H－3グリット精査の結果、楕円状に礫を配した土壙墓であると判断し、土壙部分の掘り下げを開始し、21日までに完了し、平面図及び断面図の測量を始める。

A・B－9～10グリットより検出された集石遺構の平面測量を完了し、集石を除去した後下層の遺構確認を行い、2基の楕円形を呈する落ち込みを確認し、掘り下げを行う。同様にG・H－4～6グリットから検出された土器及び礫の集積遺構上層の平面実測を開始する。5月30日A・B－9～10グリットからの検出遺構の掘り下げを完了し、30日から5月31日にかけて平面図並びに断面図の測量を終え、下部に土壙を有し、上部に礫を集石した土壙墓であろうと判断した。同じく下層を精査したG・H－4～6グリットについては、31日までに掘り下げ、清掃を完了し、写真撮影を行った後、平面図の測量を6月1日まで行なう。

6月4日図面・写真等の最終チェックを行い、機材等の搬出を行い、発掘調査の現地作業をすべて完了した。

12月～3月にかけて、整理作業を行ない、3月末日報告書を発刊した。　（徳竹雅之）

4　土層堆積状況　（第7図）

本発掘調査地の層序は、第Ⅰ層表土、第Ⅱ層耕作土、第Ⅲ層床土と漸移層、第Ⅳ層黒色土（包含層）第Ⅴ層黄褐色土、黄色土（地山）で、火山灰が風化して粘土化した（ローム）層で、中小礫（安山岩）が混っており以下は虚空蔵山溶岩層である。Ⅰ3－Ⅰ6は、第Ⅰ層耕作土20㎝～25㎝、第Ⅱ層床土3㎝～13㎝、第Ⅲ層黒褐色土12㎝～20㎝、第Ⅳ層床土5㎝～10㎝、第Ⅴ層遺物包含層30㎝～90㎝を測る。

F1－F9では、第1層表土5㎝～27㎝、第Ⅱ層20㎝～30㎝、第Ⅲ層床土と漸移層6㎝～30㎝、第Ⅳ層包含層30㎝～90㎝を測る。以下は黄褐色土、黄色土である。

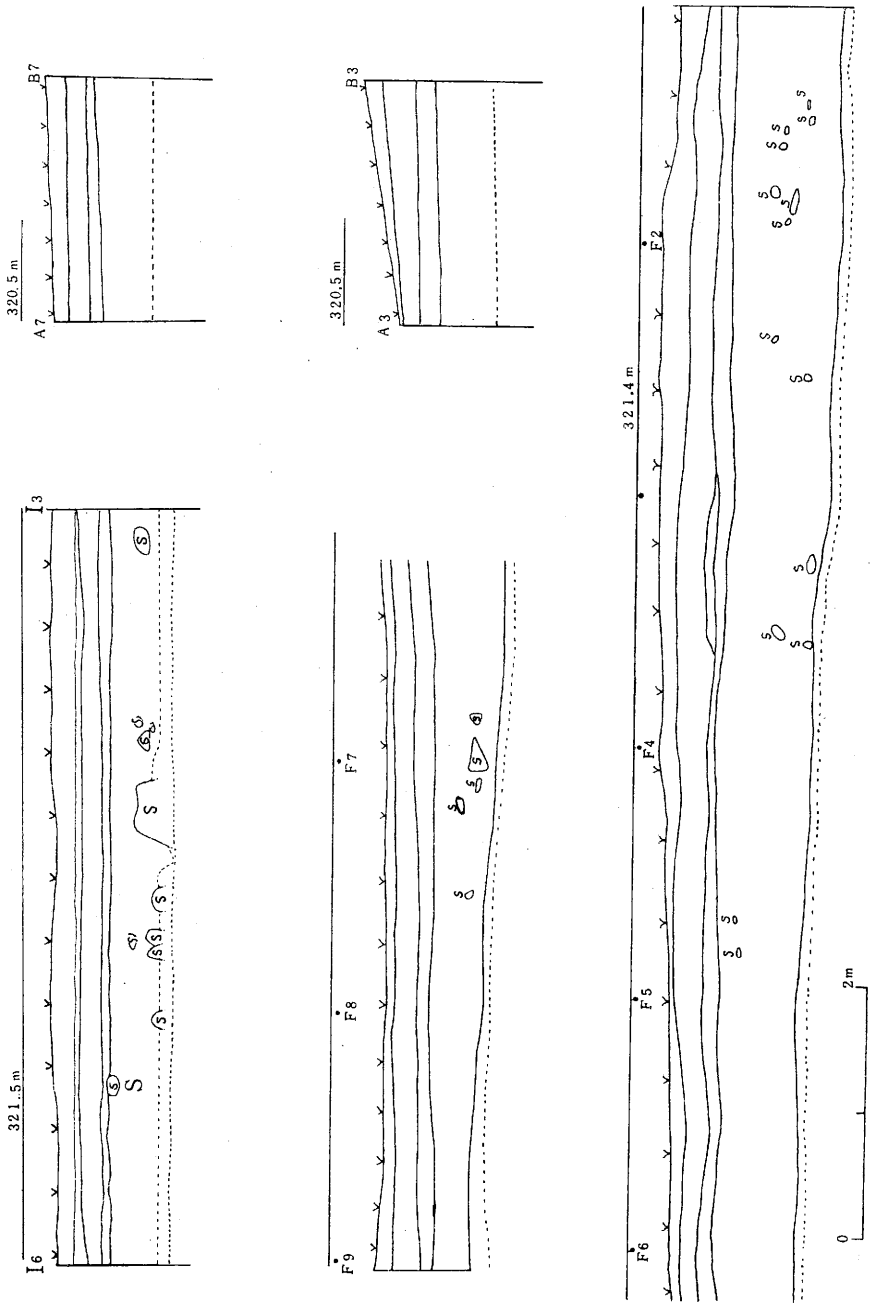
A7－B7は、第Ⅰ層表土13㎝～18㎝、第Ⅱ層17㎝～20㎝、ⅠⅡ層ともに耕作土、第Ⅲ層床土と漸移層6㎝～10㎝、第Ⅳ層黒色土層40㎝～50㎝以上である。

A3－B3第Ⅰ層表土4㎝～15㎝、第Ⅱ層13㎝～27㎝、第ⅠⅡ層ともに耕作土、第Ⅲ層床土と漸移層15㎝～20㎝、第Ⅳ層黒色土包含層38㎝～47㎝以上である。

以上みてきた如く黒色堆積土が割に深く遺跡を覆い、俗説に高社山滝の沢の爆裂によるものと記されたものもあるが、これは遠古の年代のことであり、この現象は、弥生時代より現在まで、如何に地形が変化したかを現わしており、山崩れによる土石流の発生も考慮に入れなくてはならない。　（池田実男）

文　献

『中野市誌』自然編　1981



第7図　土層堆積状況

第Ⅲ章　遺構及び遺物

1　縄文時代

土　器

今回の調査で縄文時代の土器の破片が、118個検出された。これらは、調査区内に小破片となって、全面に散在して検出されたもので、層位的には、遺物包含層の最下層から検出されたものが多かったが、遺構面から把握される傾向は見出せなかった。これは、後章の弥生時代箱清水期の住居址の存在と合わせて、弥生時代以降、特に顕著になった土地の改変による処が多いと思われる。次に検出された該期の土器を摘出編年して、概要を報告し、今後の田上の遺跡調査の足跡としたい。

第Ⅰ期　早期の土器

第Ⅰ群土器（第8図－1、1）

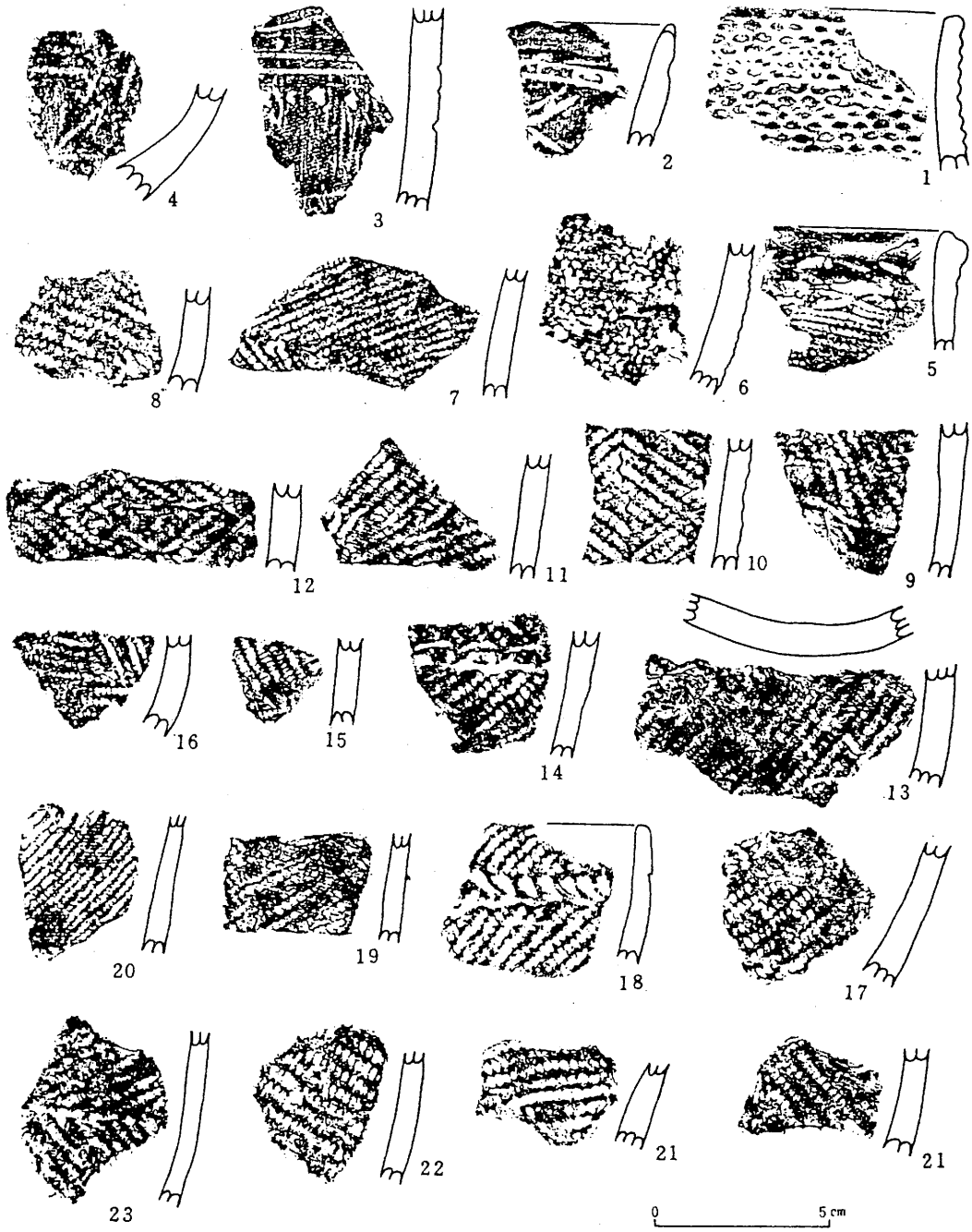
今回の調査地の南側の新田造成の畦面より関　武君が採集した資料で、胎土に繊維痕少量認められ、焼成は比較的堅緻である。尖底深鉢の直立の部分の平口縁の破片で、早期中葉終わり頃に位置づけられる。信濃町塞の神遺跡出土土器を標式とする。塞の神式の楕円押形文土器片で、山ノ内町前坂・須賀川などから検出されており、北信地方に比較的多く分布を示す、押形文土器群の末葉に位置づけられている。

第Ⅱ群土器（第8図－1、3）

器壁やゝ厚手の土器で、胎土に石英粒や繊維痕が認められ、焼成はやゝ堅緻の程度である。平行篦がき沈線文と、断面三角形状の棒状工具で連続刺突文が描かれている。これらは「田戸系土器群」と呼ばれるもので第Ⅰ群土器と組成すると考えられるが、このような標高の低い遺跡（標高320 m）から検出されることや、西日本に主体性を示す押形文土器群、東日本に主体性を示す、平行沈線文、貝殻沈線文土器群の両文化の中間地帯の様相の一端を示現していると思われる。

第Ⅱ期　前期前半の土器（第8図－1、4～23）

関東の関山式土器に併行する土器で、胎土に繊維痕が顕著にみられ、提示した土器のほとんどは、内外面とも表面より1㎜程度、赤褐色を呈し、中心部が黒色を呈する、焼成温度の低い土器である。この土器群は、この地方の遺跡から多く発見され、中野市間山遺跡(1)山ノ内町伊勢宮遺跡(2)対岸の飯山市田草川尻遺跡(3)などから検出されている。但し田草川尻遺跡の如く内容が豊富でないのは調査面積に比例しているとも思われる。なお検出例は、細片のため、器の全容が知られる資料は皆無である。従って、土器の一部分の文様であることも、この際おことわりしておく。



第８図－１　縄文土器拓影図

a種（8，9，11，22）単節斜縄文の土器である。

b種（5，6）　縄文原体を編み合わせた組み紐の文様で、5は口縁部の破片で、補修孔がみられる。口縁部を凸帯状に肥厚させ、隆帯上と下に結節の回転の文様がみられる。

c種（4，7，10，12～17，19，21，23）羽状縄文の類を集大成した。本遺跡で比較的多量に検出された文様で、10，12の如く施文が菱形状を呈するものは、該期の特長と思われ、14には結節の廻転文がみられ、これらは深鉢の胴部の破片と思われる。また4は、底部の破片で、縄を粗に巻きつけた長さ約2㎝の原体を放射状に施文している。

d種（18，20）　18は口縁部の破片で、右傾の単節縄文の下に棒状工具で、斜状に連続刺突をめぐらせ、下の縄文上端には結節文がみられる。20は細かい右傾縄文の上に細い棒状工具の連続刺突文がみられるが、小破片のため、全容は不明である。

以上該期の土器は、中期後葉から後期前葉の土器とともに比較的多量に検出された。

第Ⅲ期　前期中葉の土器で（第8図－1，2、第8図－2，36）

諸磯B式に併行する土器で、2は口縁を箆または指により小波状につくり、下の文様は半截竹管により粗のC字文を格子状に施文している。胎土に白色の粉末がみられ、焼成は、やゝ堅緻である。36は同じくC字文と左傾の単節縄文のみられる土器である。

第Ⅳ期　前期末葉の土器

a種（第8図－2，24）　平行条線文に半截竹管の小形文（C字文）の黒色の焼成堅緻の土器の口縁部の破片で、口縁は波状を呈するらしく、内傾した円口唇である。平行条線文の間に、同じ工具によるC字文を3条平行させている、条線文の手法により、該期に分類した。

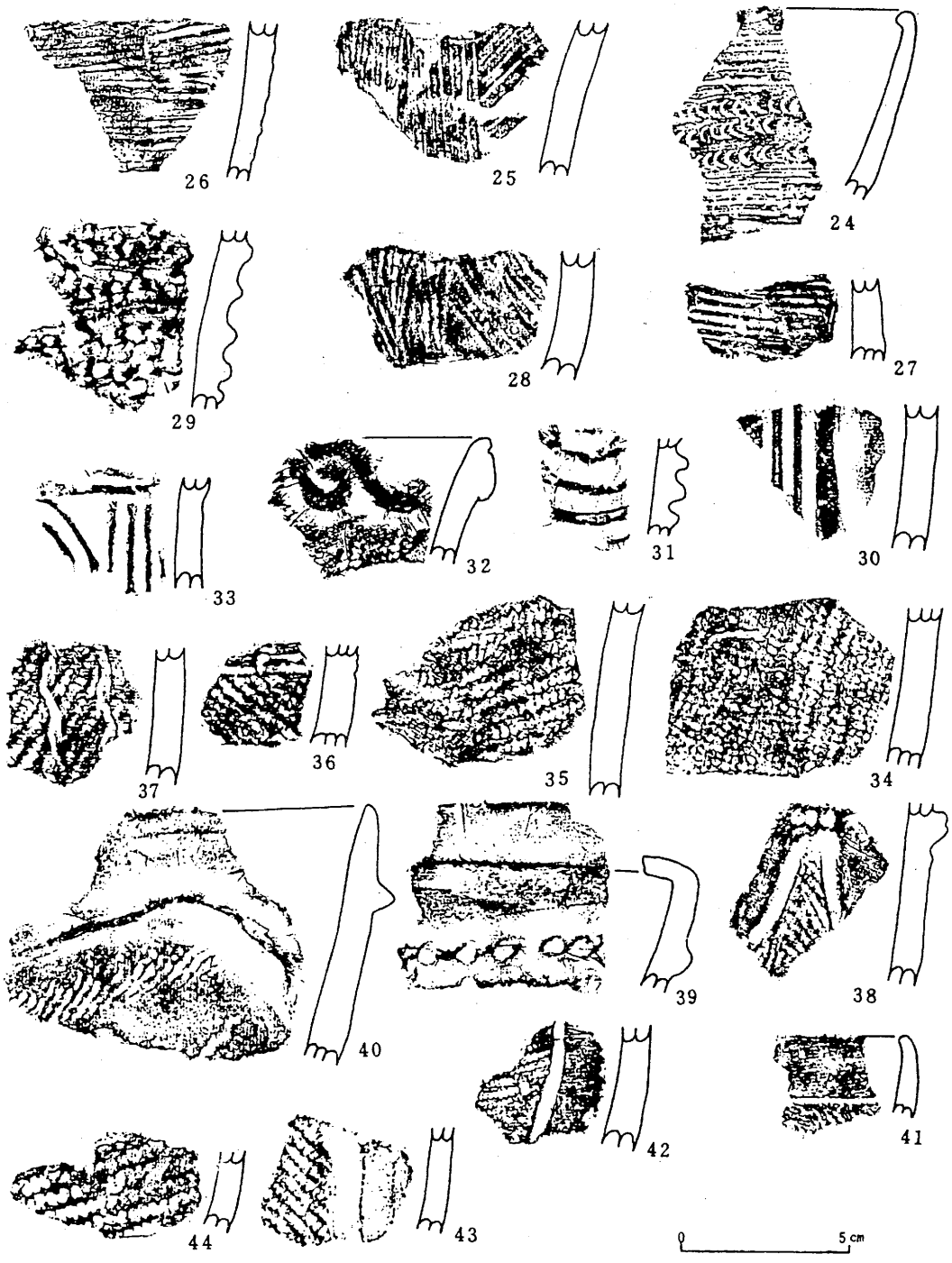
b種（第8図－2，25～28）　条線文の集成で、26，27は横走の平行条線文は、半截竹管によるもので、縦の断絶痕がみられる。25，28は集合条線文の土器である。

c種（第8図－2，29）　結節状浮線文の土器で、チョコレート色の色調で、胎土に白色粉末が含まれている。地文に縦と横の条線がみられ、上にクリーム状の粘土紐を塗付して、曲線状、平行状に施文し、上に結節状に押し引きした文様で、茅野市下島遺跡出土土器に特徴的施文で、b種は、同遺跡1類土器、C種は、3類土器に分類されている。(4)この様式の土器は、千曲川流域の遺跡に、断片的に採集されており、中野市で報告されているだけでも立ケ花遺跡、(5)姥ケ沢遺跡などがあり、新潟県の鍋屋町遺跡(6)（中頸城郡柿崎町）にもみられるから、前期末葉に北陸北東部から、中部山地に広く分布する土器群と考えられる。

第Ⅴ期　中期前葉～中葉

a類（第8図－2，30）　赤褐色の堅緻な焼成の深鉢の胴部の小破片で、カマボコ形の太い基隆線に、細い半截竹管の条線を平行させた文様で中期前葉の北陸文化圏に属する該期の特徴的な施文法であり、飯山市深沢遺跡、中野市姥ケ沢遺跡の主体をなす文様である。

b種（第8図－2，31）　赤褐色の焼成の渦巻文のみられる小破片で、時期の確定は、困難な面があるが、30と同じ時期と文化圏に属する土器と思われる。



第8図－2　縄文土器拓影図

c種（第8図－2，33）　黒褐色の堅緻な焼成の土器で、これも小破片のため、不明確の点が多いが、深鉢の胴部破片で、半截竹管による条線文の曲線間を削去の手法がみられ、これも前述の該期の土器群にみられる手法である。

第Ⅵ期　中期後葉～後期前葉

a種（第8図－2，32）　口縁の小波状の部分に蕨手状に粘土紐を加飾し、下に単節の右傾縄文を施文した小形の深鉢形土器の破片。

b種（第8図－2，37）　これも深鉢形胴部破片で右傾の単節縄文に2条の結節縄文が、みられるもの。

c種（第8図－2，34・35）　縄文のみの土器破片で、時期の確定が困難だが、この期に属すると思われる。

d種－1（第8図－2，44，－3，49・50）　40は大形の深鉢形土器の破片で焼成は、やゝ堅緻の程度で櫛歯状工具（幅2.4㎝11列）で縦に帯状に施文し、49・50の如く曲線を描くものもある。この条線文の土器は、この地方では中期末葉の加曽利E式併行（大木9〈古〉対比）にみられる施文法だが、この土器は後期の三十稲場式に伴う可能性が大きいと思われる。

d種－2（第8図－3，48）　同じく条線文の土器だが、施文は密で、櫛歯状工具で施文後、上面を平滑に磨りみがいている。

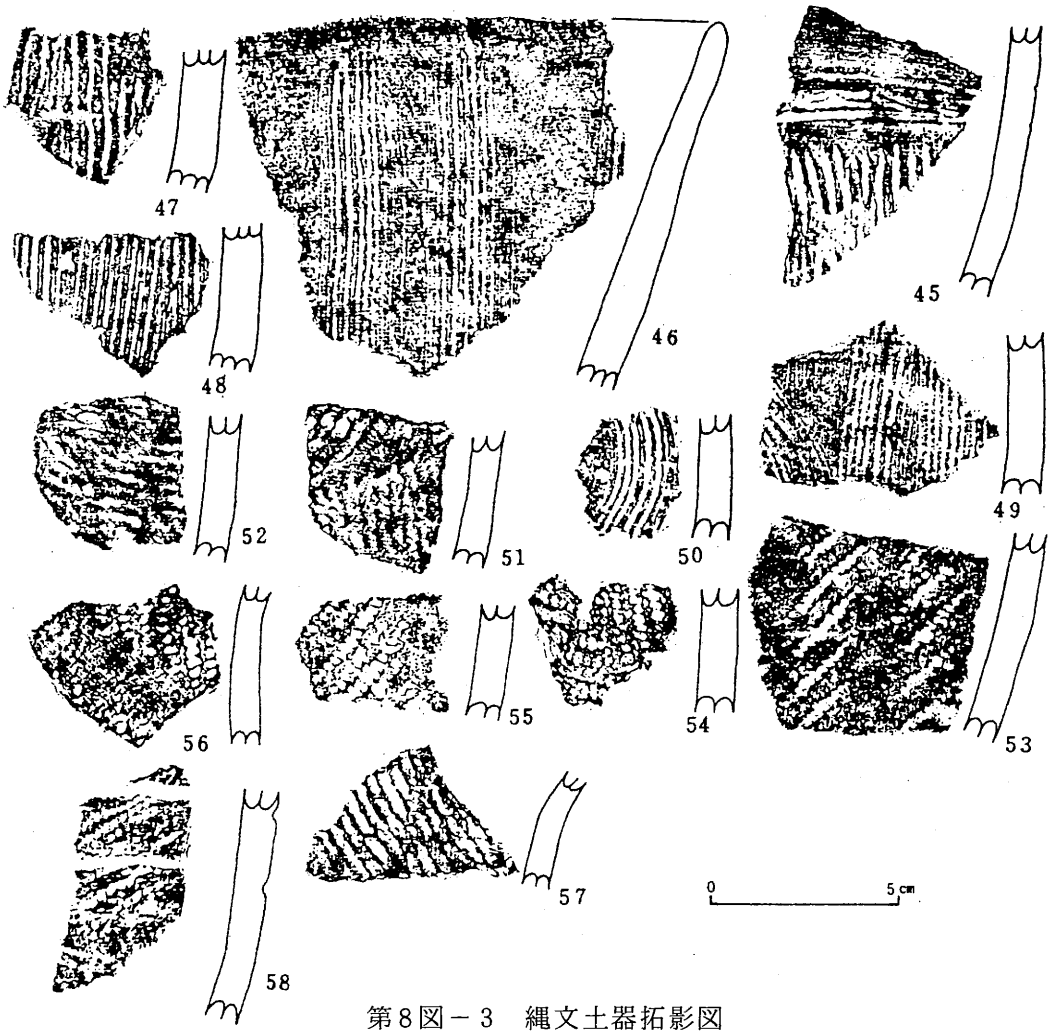
e種（第8図－3，45・47）　白黄褐色の堅緻な焼成の土器で、45は箆みがきの平行線間に列点状に同じ工具で施文している。後期前葉に属する東北日本海方面にみられる土器である。

f種（第8図－2，39）　口縁に縁帯（幅1.8㎝）を巡らせた、在地色の強い小形土器である。口縁下の隆帯上を棒上工具で、列点状におさえて加飾している。この地方の堀の内式併行土器の縁帯文土器の前駆をなす土器と思われる。

g種（第8図－2，40）　石英など砂粒の含有の多い堅緻な焼成な土器で、隆帯に囲まれた中に粗い繊維の単節縄文が横帯状に施文されている。これは中期後葉に位置づけられる可能性がある。

h種（第8図－2，38・41～43，－3，58）　磨消縄文のみられる土器で、41・58の如く棒状工具で区画された土器も含めた、38は台形状に低い隆起をつくり、その上を半截竹管状工具（竹または骨）で、3点を作り、同じ工具で縄文を磨消している。

i種（第8図－2，44，－3，51～55・57）　縄文の土器片で小破片で、全容の文様は不明だが、縄文の繊維が荒い原体を使用されているのが目につく（44・51・52・57）また53の如く縄を棒に粗に巻きつけて施文した手法もみられる。これらは、中期後葉を主とした在地の土器の文様と考えられる。



第8図－3　縄文土器拓影図

総　括

縄文時代全般を通じて、今回の調査では、晩期に属する土器が検出されなかったが、各期に亘る土器が発見され、早期に属する土器が2片検出し、前掲の如く旧石器から草創期までの石器が発見されているから、更に古い早期の土器が検出される可能性があり、開地の標高320 *m* 地点で発見された押形文土器も留意されよう。

前期の関山式に併行する土器群は、対岸の田草川尻遺跡例よりも乏しい内容だが、千曲川添いの共通した立地にあり、中期後半の土器とともに出土が頻度となっており、今後の調査に期待され、資料の蓄積をまって、南信の神ノ木式に対する北信の様相を把握し今後の編年資料の一助にと考えられる。前期末葉の下島式土器は長野県に広く分布を示すが、前述の如く新潟県の鍋屋町式土器とも、北信地方は、地理的に近接し、今後の資料の増加によって、両

者の検討も可能となろう。

中期前葉から中葉の土器は、僅かな検出にとどまり、次の主体となる土器群は、中期後葉から後期初頭の土器群で、信越国境北より地帯の該期の遺跡に共通する加曽利E式や大木式に影響をうけた、新潟県境と共通する在地の土器と続いて後期に入って、新潟県の三十稲場式に属すると思われる、条線文の土器などがみられるが、伴出の資料が少ないため断定はできない。

ともあれ、今回の調査での縄文土器は、後世の人為による変異をうけており、今後の調査が、大きく期待されるところである。（檀原長則）

2 弥生時代

（A） Y住居址

遺　構

調査地の北東に位置して弥生後期に属する住居址が検出された。西側部分は、傾斜面の下で、E列のトレンチ発掘の際、生活面が不明確で一部破壊してしまった。

プランは、東西約5.9 m，南北5.2 mの隅丸方形で主軸方向は、ほぼ磁北と一致している。南西部角部分に東西約2.5 m，幅約2.5 m，奥行南北0.7 mの出入口が設けられ、この部分は勿論、他の住居面も地山層の黄色土で、厚さ約10 cm程度叩きしめられ、覆土と剥離される状態で検出された。

P_1 ～ P_4 が主柱穴で、入口部分は比較的大きな庇（廂）状の構造を有していたのは、豪雪地帯の住居の特異性を反映している。P_3 の柱穴よりは、底の欠けた煤けた甕（第26図33）が、埋設された状態で検出された。

地床炉は P_2 ～ P_3 の主柱間の直線下でなく、中心部やや南よりに設けられ、直径約80 cm、最深部約15 cmは北側部分に偏在する。

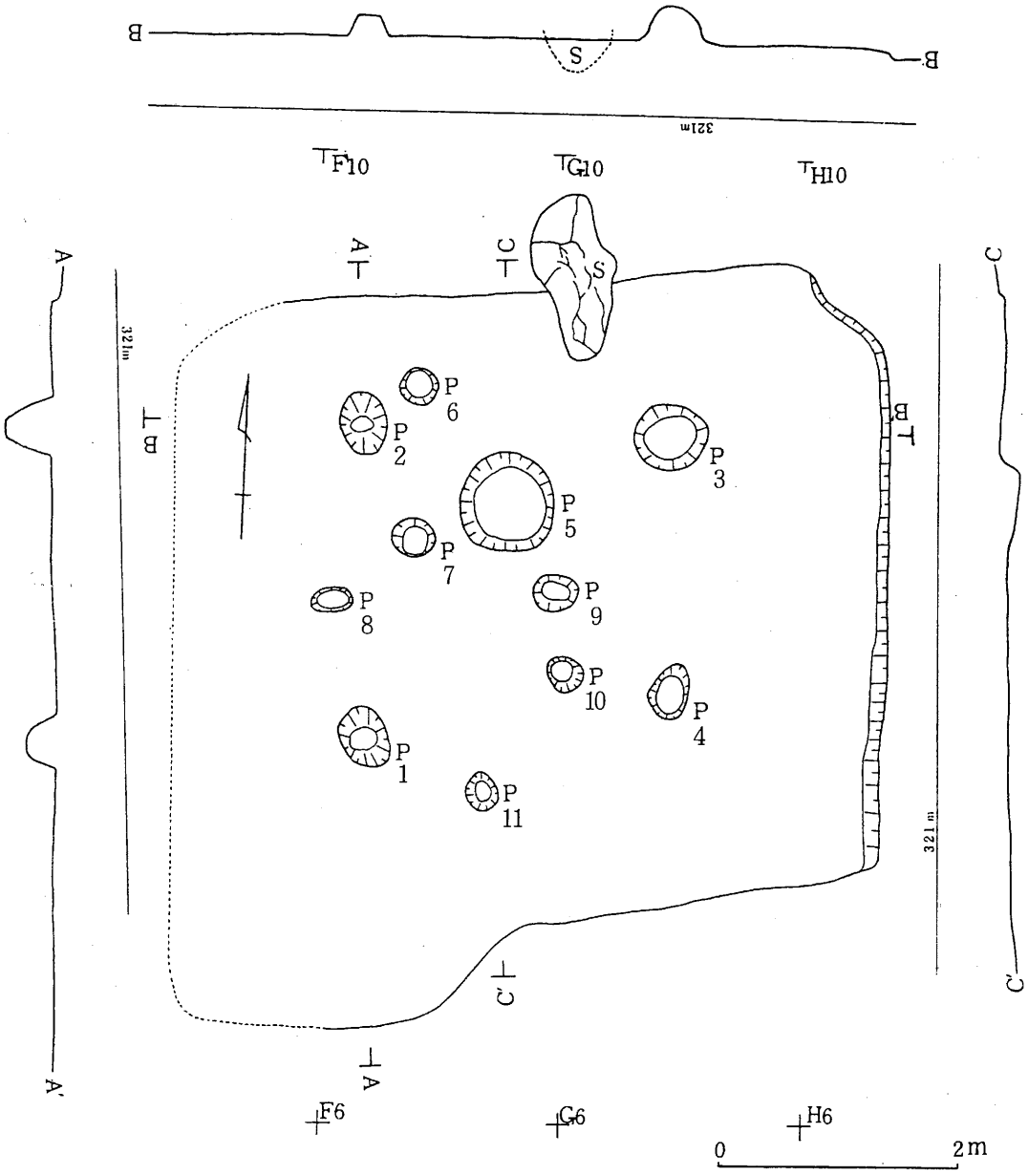
住居址の北側に地山層の輝石安山岩が、屋内に露出し、工作台として利用されていたと思われる。住居址の堆積面は2回の水田造成面（調査時はアスパラ畑）がみられ、黒色土層が厚く、これらの人為的な堆積面の下、東側部分で深さ80 cmに住居址の床面が存在していた。

遺　物

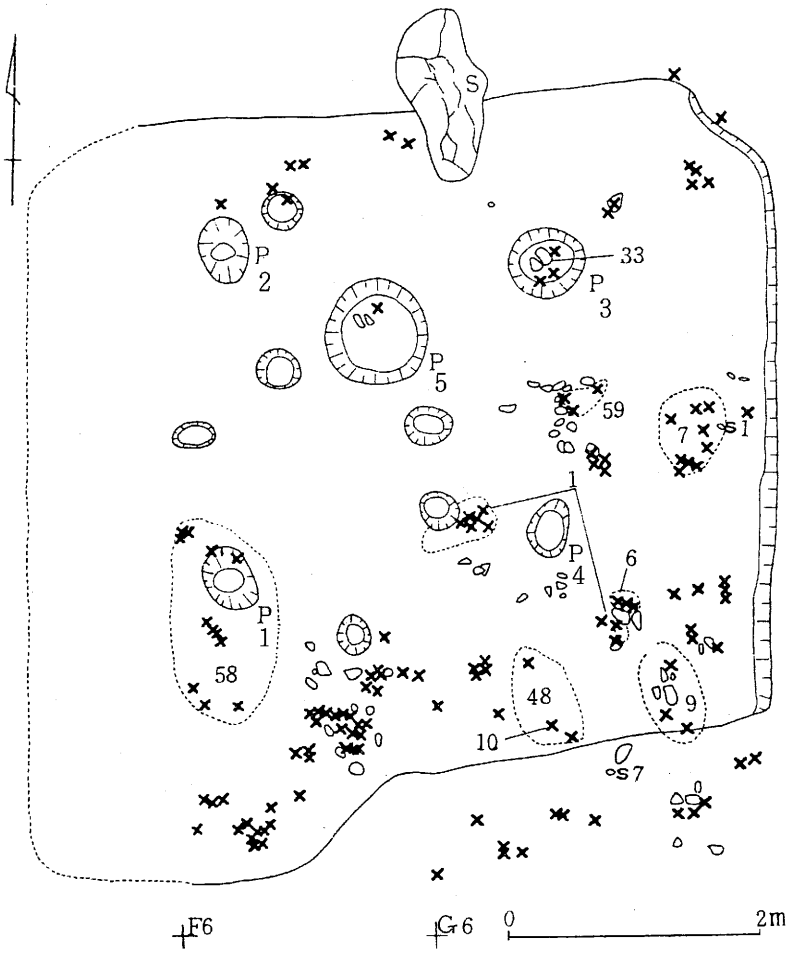
住居址の覆土中からは、縄文前期から、中期後半、後期の土器片、弥生中期後半の土器片が混在し、該期の遺構の存在を予測させるとともに人為的に撹乱されたと思われる。

弥生後期では、箆がき沈線文に塗彩された土器片（第22図－1，7）がみられ、吉田式の影響下の土器と思われるが、大部分の床面近くから検出された土器は、前述の P_3 の甕形土器も含めて、完形品はなく、図上復原されたものばかりである。これらの土器を概観すると、後期後葉の箱清水式の爛熟期の様相のもので、検出時の所見では、破損部の廃棄された状態

で、後述のＨ４～Ｈ６地点の土器のあり方と対照的であり、今後、廃屋時の復原の検討課題である。磨石、小形磨石は住居址内から検出されたが、石錘は住居址南側に接して検出され、中野地方では、栗林式土器に伴出する例が多い。　　（檀原長則）



第９図　Ｙ住居址実測図



第10図　Y住居址遺物位置図

第2表　Y住居址出土遺物表

縄文時代　土器				
時　期	図番号	図版番号	器　種	備　考
前期前葉		第8図6	鉢	覆土中
〃		〃 23	〃	〃
中期未葉		〃 34	〃	〃
後期前葉		〃 46	〃	〃
〃		〃 49	〃	〃
〃		〃 58	〃	〃
弥生時代　土器				
栗林Ⅱ式		第21図17	甕	覆土中
〃		〃 21	壷	〃
〃		〃 24	〃	〃
〃		〃 25	〃	〃
〃		〃 31	〃	〃

時　期	図番号	図版番号	器　種	備　考
箱清水式	6	第22図6	壷	床面
〃	10	〃 7	〃	〃
〃	10	〃 10	〃	〃
〃	33	〃 33	甕	P_3柱穴
〃		〃 44	鉢	床面
〃	48	〃 48	甕	〃
〃	58	〃 58	高　坏	〃
〃	59	〃 59	〃	〃
石器				
箱清水式	1	第29図1	磨　石	床面
〃	7	〃 7	石　錘	〃
〃		〃 16	小形磨石	〃

（B） A地点の調査

A地点は、長野電鉄中野－木島線の東側で、線路より約30 m離れている。また県道414号中野－飯山線より直進して46.5 m北に入った、田上岩井揚水路の東側に位置し、水田転作によりアスパラガスが栽培されていた。グリットA－A′，C－C′の範囲である。

この揚水路建設の掘削中に、土器片が多量に出土したという話が残っている。揚水路に面した位置より第21図－3に示した弥生中期後半の栗林Ⅱ式に属する壷口縁部4個体分と甕1個体分が検出され、これらの土器群とこの東側に接して検出された2基の集石土壙との関連が注目される。

A1号集石土壙

当遺構はグリットB 10～11の地表下30 cmのところから検出された。中小礫210個の集石で大きさは南北－北西に長径2.2 m、短径1 mの楕円形を呈している。また集石の南西部には長さ72 cm、幅40 cmの大きな石を検出した。（第12図）

この集石を取り除き精査したところ、長径1.8 m、短径0.65 mの土壙が検出された。深さは最深部で42 cmであった。（第13図）

上層の集石からは弥生の土器片を数点検出したが、土壙内から遺物は検出されなかった。

A2号集石土壙

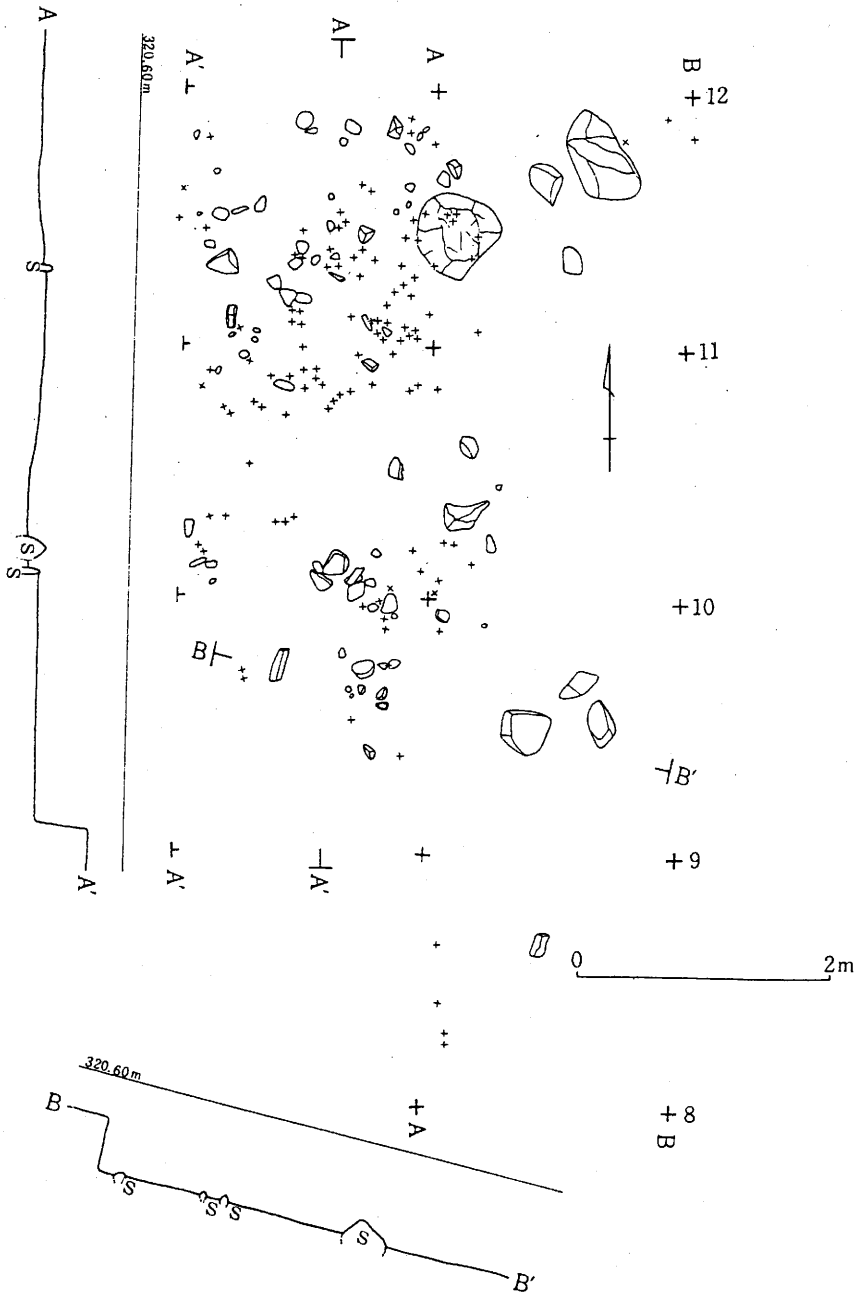
本遺構はグリットB 9～10の地表下30 cmより検出された。前述の1号集石土壙より南東へ最短距離で60 cmほど離れている。中小礫100個余りの集石で、大きさは東－西長径1.7 m，短径0.65 mの楕円形を呈している。1号集石土壙よりも小さく、南側の人頭大の石列と北側の握り拳大の集石とに分けられる。この集石の南西側にも長さ85 cm、幅60 cmの大きな石が検出された。さらに、このすぐ西側にも長さ60 cm、幅30 cmの石があった。（第14図）

この集石を取り除いて精査したところ、長径1.7 m，短径0.65 mの土壙が検出された。深さは最深部で40 cmである。（第15図）

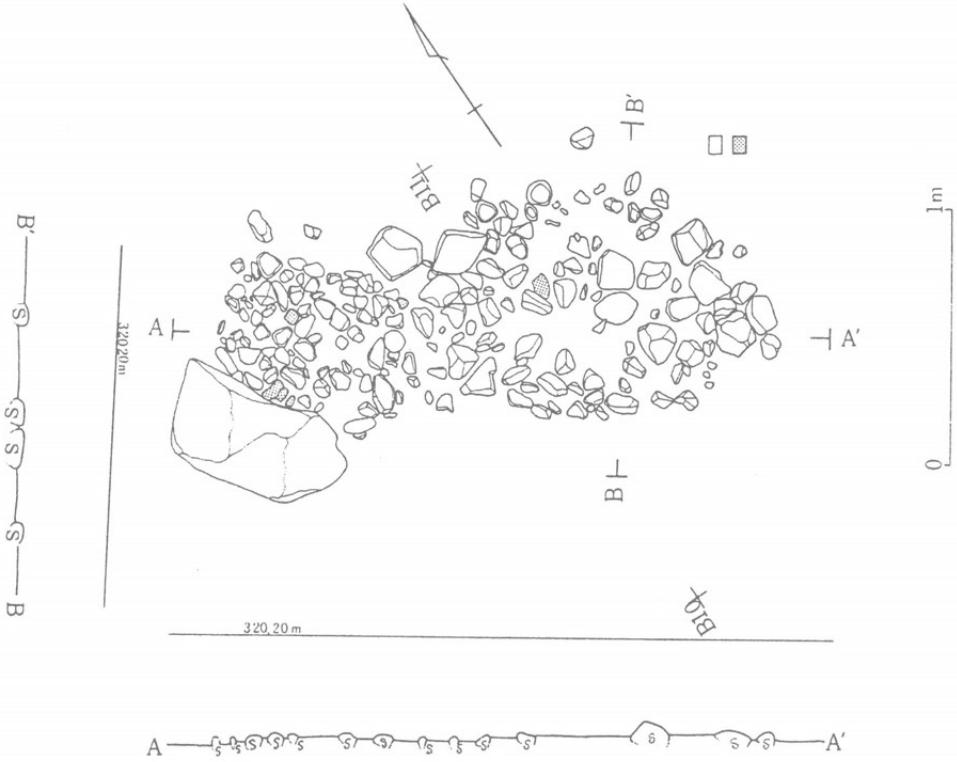
1号集石土壙と同じく、集石から弥生の土器数点を検出したが、土壙内から遺物は検出されなかった。

1・2号集石土壙とも南西側に大きな石が置かれていた。これらの石は当初から、意識的に置かれたものかどうか判然としない。しかし、1・2号ともに共通して集石の南西から検出されたことは、祭祀儀礼と何らかの関連があるものと推定されるが、今後の課題としたい。

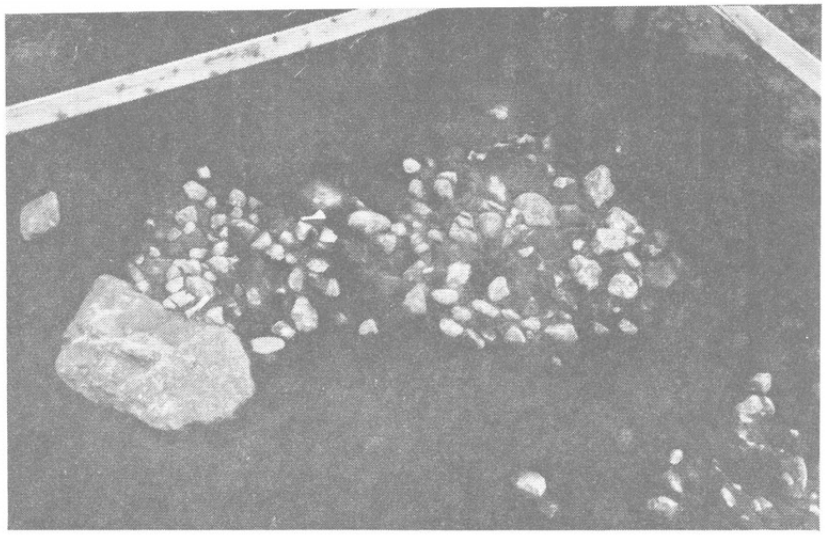
時期は出土遺物が極めて少なく、また細片ばかりで確定は困難である。栗林遺跡からも同様の集石土壙が検出された例があり、揚水路建設の際に出土した土器群とセットであるとすれば、弥生中期後半の栗林Ⅱ式に比定される。（池田実男）



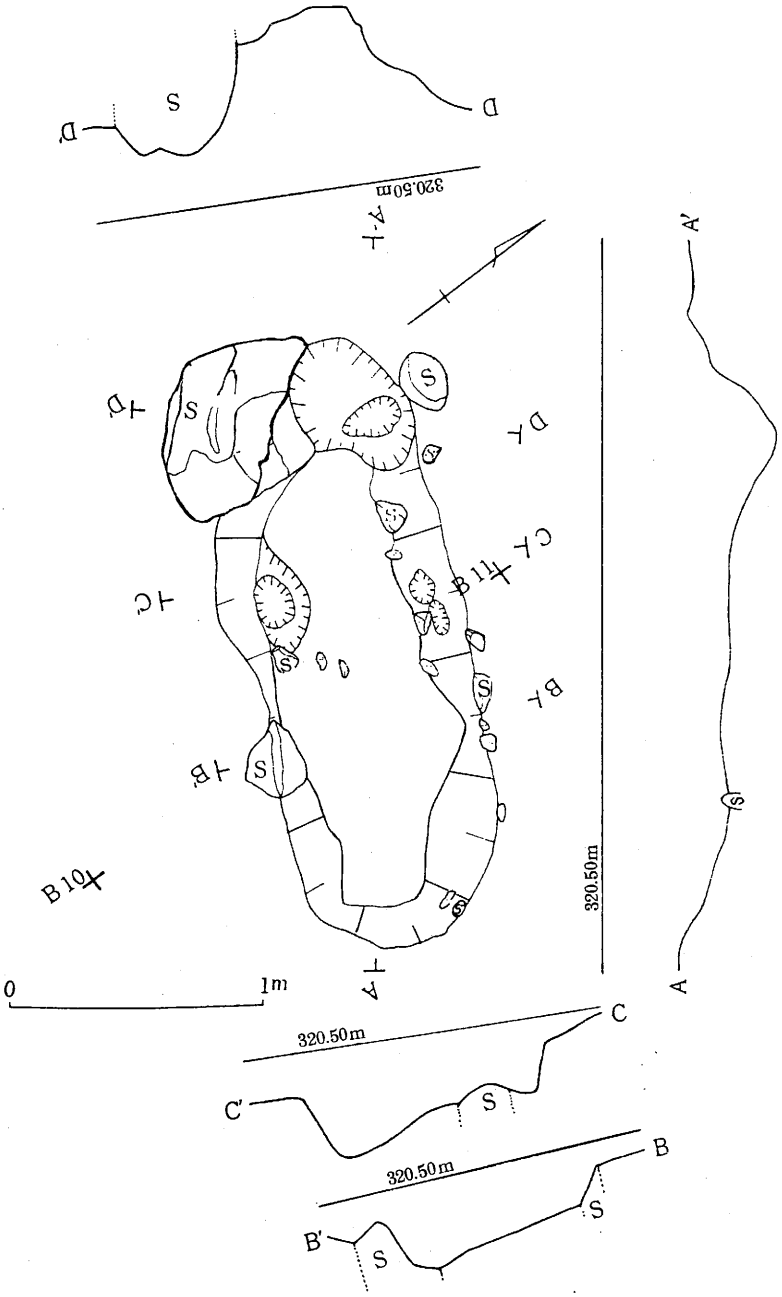
第11図　A地点遺構全体図



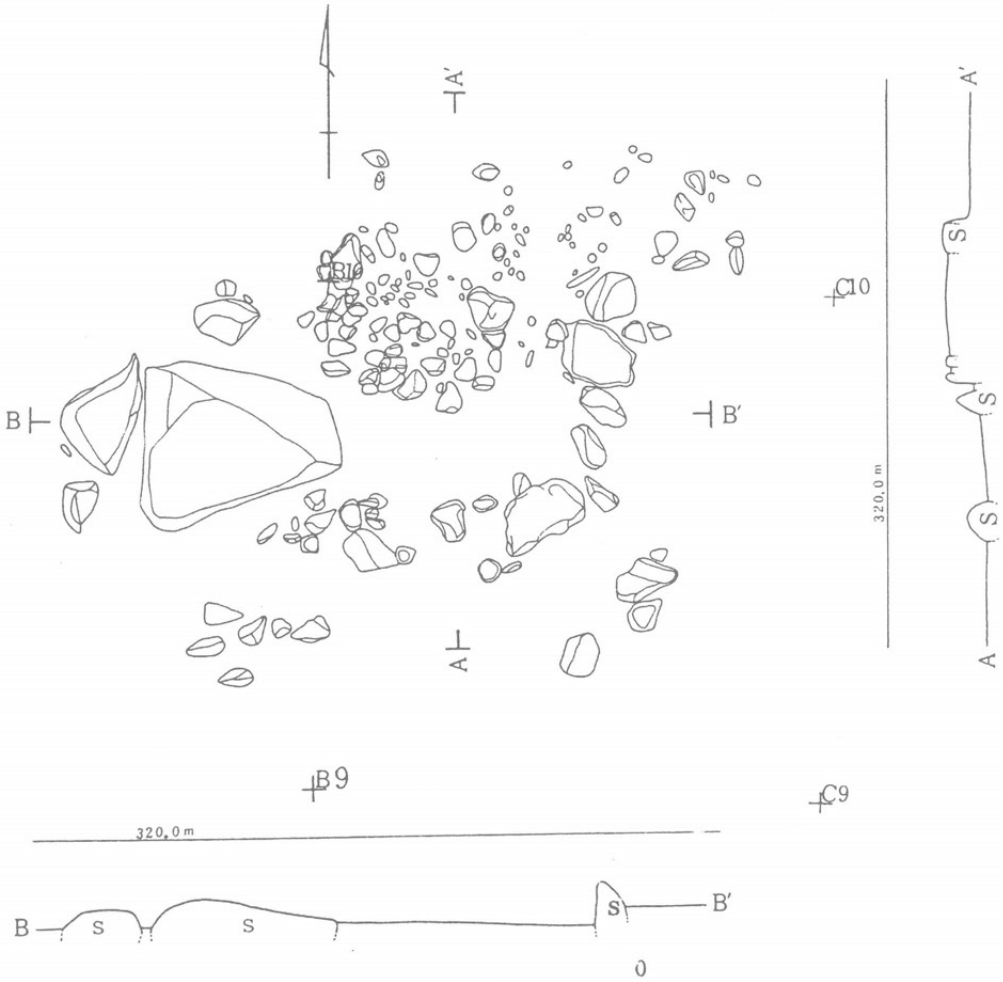
第12図－1　A1号集石土壙上層実測図



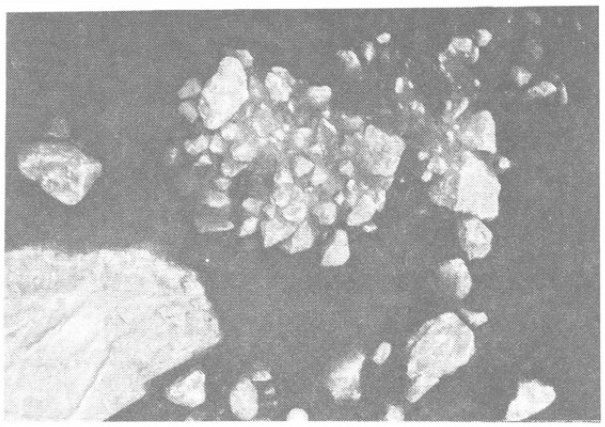
第12図－2　同 上 写 真



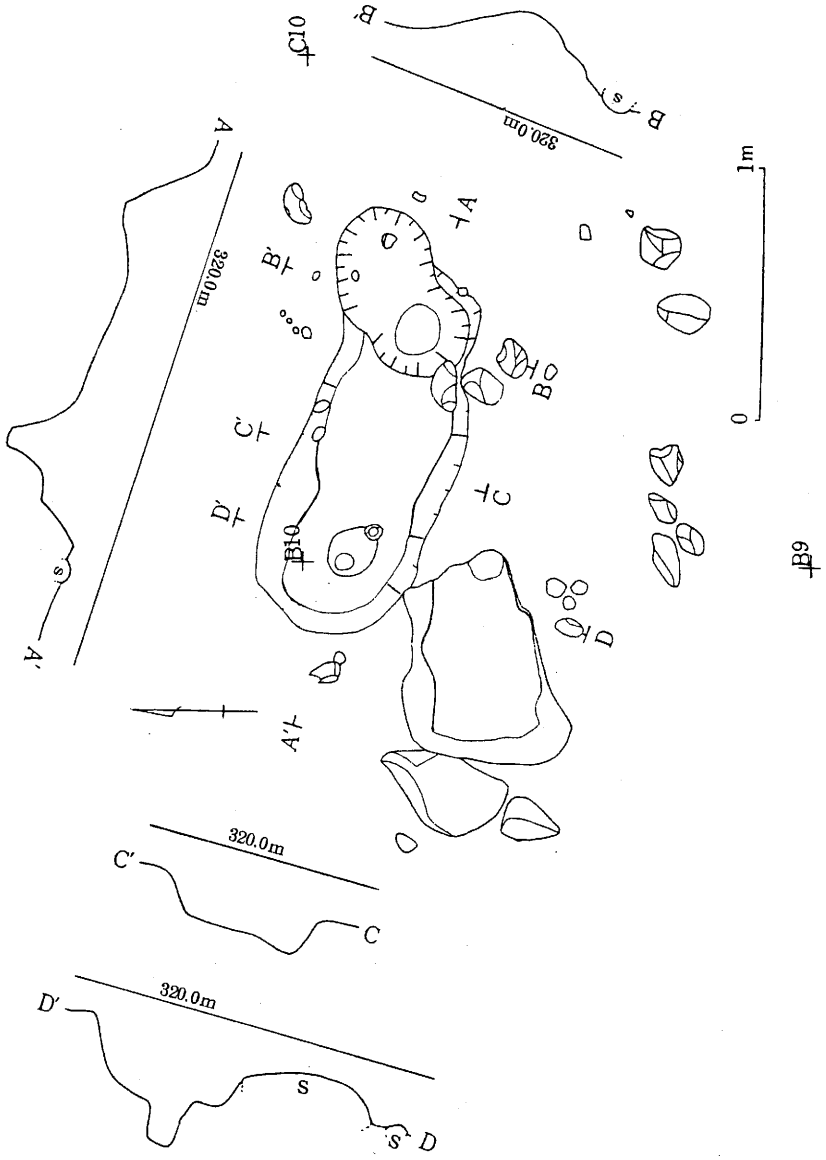
第13図　A１号集石土壙下層実測図



第14図－1　A２号集石土壙上層実測図



第14図－2　同 上 写 真



第15図　A２号集石土壙下層実測図

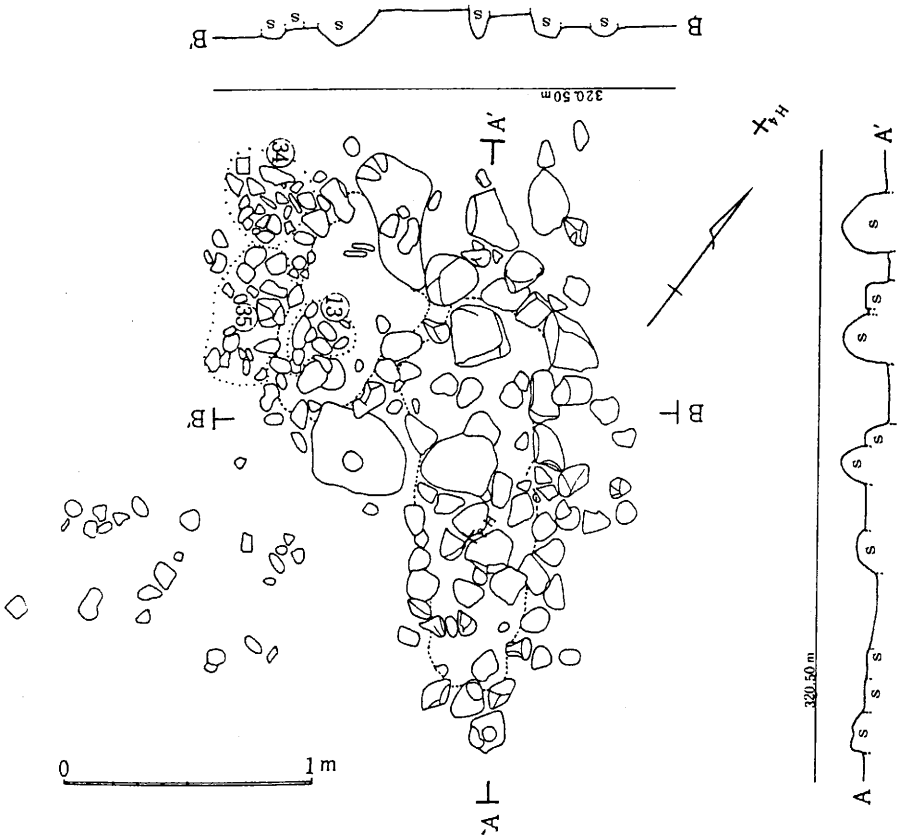
（C）　G３地点集石土壙墓

Ｈ４～Ｈ６地点の土器集中区の南縁、Ｇ３～Ｈ２地点に輝石安山岩の石臼状凹石（30×40㎝）とともに、20～30㎝大の石から、握り拳大の石で構成される集石がみられた。(第16図)

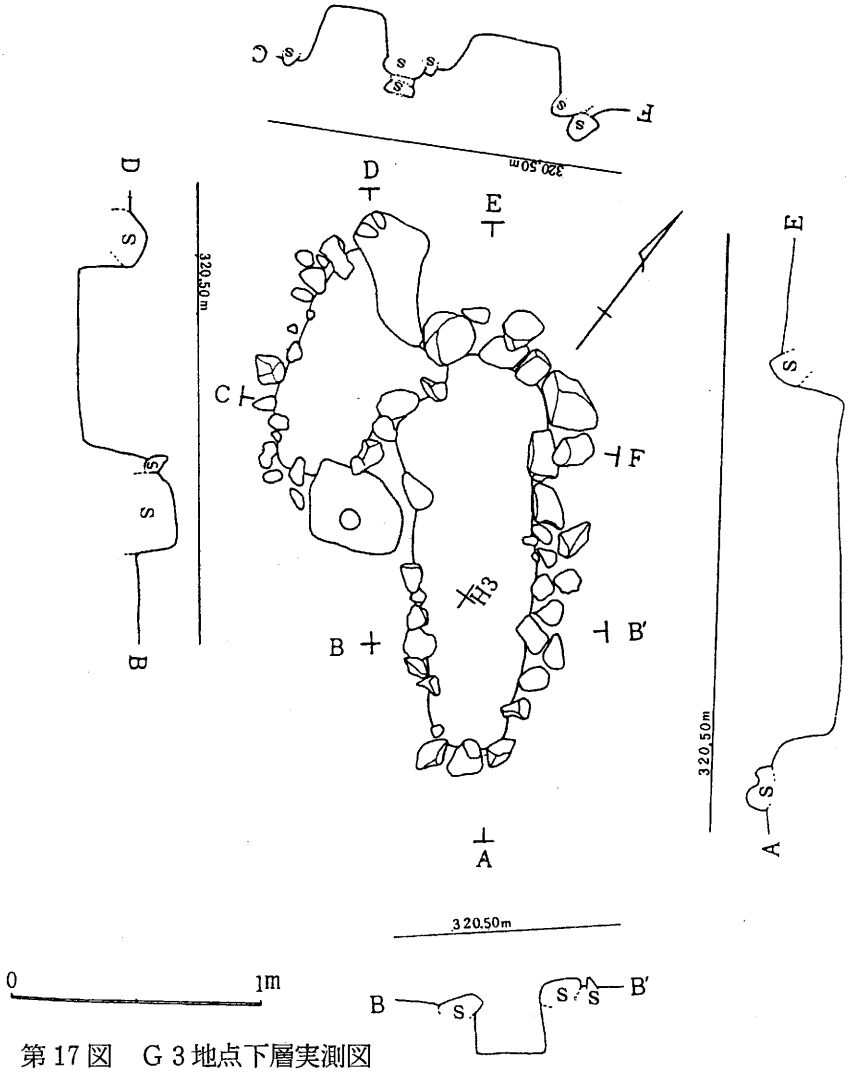
上面に広口壷（第22図－２，13）が圧砕し、これは塗彩された堅緻な焼成の土器で、煤状の炭化物が付着し火熱をうけていた。また、大形の甕破片２個体分（第21図－３，33、第22図－４，37）がその他の土器片と展開していた。また上部より、滑石製の管玉（臼玉？）（第19図15）が検出され、模造品であると、結論づけるには躊躇を感じている。

また、前述の石臼状凹石は、中央部西側部分に位置し、東南縁には、多孔の輝石安山岩の小形臼状凹石（第19図11）が検出され、これらは、第１章で前述した田上の共同石臼群の学術発掘で得られた、傍証資料で、初資料である。また、集石の南側、上層からは、須恵器破片が検出されている。

これらを掘り下げた結果（第17図）で、石に混在して箱清水式土器片が検出され、土器の埋納は認められなかった。



第16図　Ｇ３地点上層実測図



第17図　G3地点下層実測図

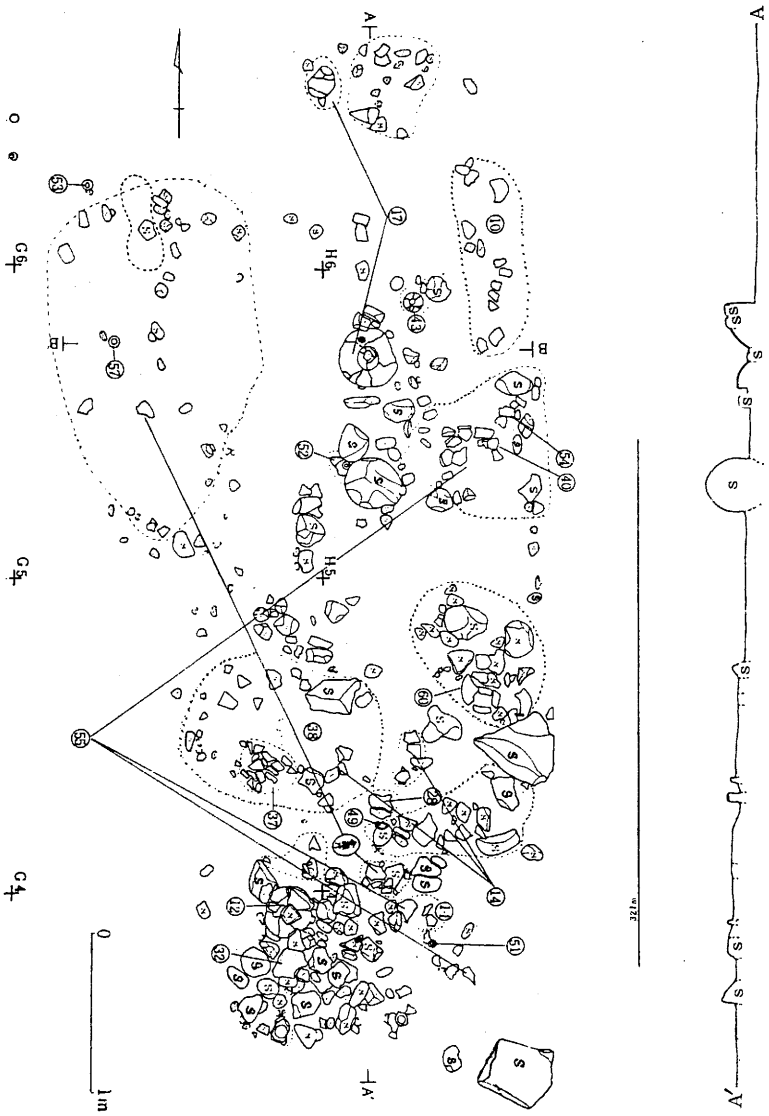
これと類似した集石状の遺構は、昭和58年間山遺跡の発掘で、E地区で確認している。(1) 今回も墓壙であるとの確証は、滑石製管玉の存在を考慮に入れても、不十分である。ただ、長野市塩崎遺跡群の昭和60年の緊急発掘で、弥生中期の墓20数基と木棺葬された人骨が発掘され、土器や、玉製品などが副葬されていたが、墓壙に集石を伴う例も報告されている。また、群馬県渋川市、有馬遺跡では、礫床周囲をドーナツ状に大きめの石で囲む、礫床墓が80基も検出されており、(2) これらの多様性は、被葬者の出自の違いか、階層の差を示すものかは、この地方の弥生社会の構造を知る手がかりとなる。弥生後期末と考えられる2基の周溝墓が、飯山市須多峯で、長野県で初めて検出され、外様平南部の族長墓と考えられ、農耕社会に階層の出現を予見させるものであり、田上の日向山1号墳が築造されるまでの約2世紀近くの弥生後期の動乱の時代とされる弥生社会の解明は、機会あるごとに深化させなければならない。

（檀原長則）

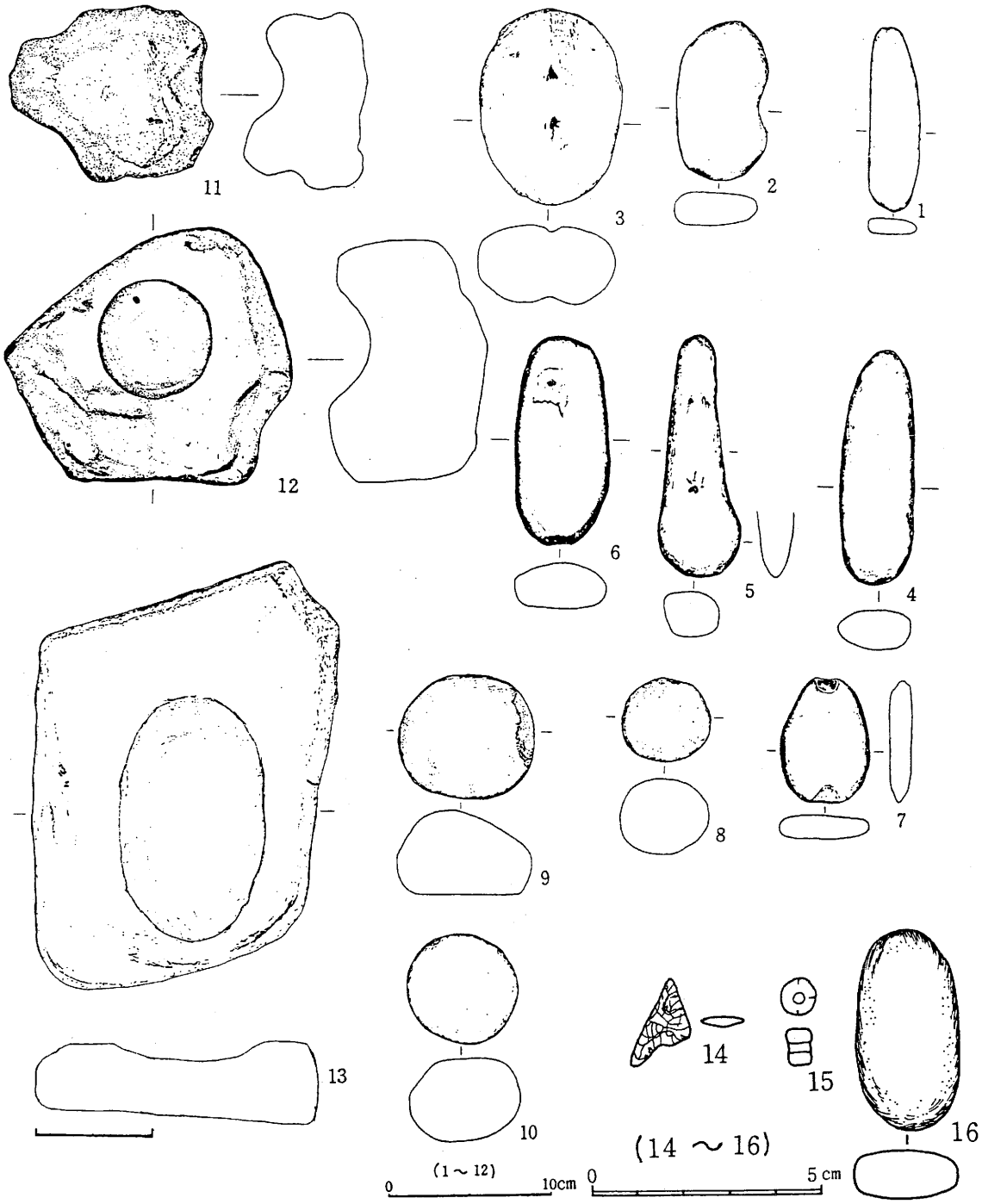
（D）　H4～H6地点（第18図）

Y住居址の南方約4 mから、土器の集中地点が検出された。僅かの縄文土器片、栗林式土器片が、混在していたが、主に弥生後期箱清水式の土器で、人頭大の石から握り拳大の石数十個と混在して、厚さ約40 cm、10 m²程の部分に集積していたが、東側部分は調査区外のため、全容は把握できなかった。

この中には、壷形土器の下半部を炉体土器としたものや（第22図－2，17）上部から加圧して破砕した高坏（第22図－6，56）が、破片を散在して発見され小形甕形土器は、完形品



第18図　H4～H6地点実測図



第19図　石器実測図

・圧砕されたものなどが、図上復原可能のものが9個に及び、台付甕も1個含まれる。中形の甕は6個、塗彩された鉢の完形品、片口鉢1個ずつ、甑は大形と小形品1個ずつ、高坏の個体数は10個、復元できたものは3個である。小形高坏（第22図－3，19）の如く塗彩されないものもあり、高坏状土器（第22図－3，23）は、中野市では類例のない初見のものである。また小形手捏ね土器（第22図－3，20）は、表採された1個と合わせて同時期のものと推定される。その他掲出できなかった土器片が多数集積していた。遺物層の下部からは特に遺構と思われるものは検出されず、このように、屋外と思われる場所での土器の集中はまず廃棄の場が考えられるが、この場合は完形土器が含まれているので、可能性が少なくY住居址と含めて考えると、住居内には、破片ばかりで、屋外に完形品が沢山あることになる特異点を指摘しておく。

またG3地点の集石土壙墓の存在から葬儀も祭儀も未分化の状態での屋外祭祀の場として推論するにとどめたい。これは眼前にせまって望見される高社山の支峯、笠原岳の威容とも関係する古代祭祀の場であったかも知れない。（檀原長則）

3　古代から近世の遺物

この地域一帯は、複合遺跡として古くから表面採集によって遺物を保管している人が多い。昭和59年の緊急分布調査の折も、小片であるが相当量の遺物を採集した。今回の発掘調査によって検出した資料とあわせて、第3表、第3・4図に呈示した。

山懐から西へ緩傾斜地の末端に位置する調査地は、西へ4度の傾斜地を開田しているが、その折の削平によって、古代から近世までの遺構は消滅し、遺物のみが残存したものと推定される。

奈良時代、須恵の甕の破片2点を得たが、器面は畳目文、内側は青海波の施文を付し、奈良時代のトンネル式登窯の所産である。（第20図－2，27・28第3表）

平安時代、土師器は坏・壷・甕があり底部には糸切痕を残す坏片（第20図－1，7・12・14・15）が多く、国分期のものである。坏の口径は12～14㎝、底径は6㎝がほとんどであるが、8㎝のやゝ大ぶりのものもある。壷の破片は2点（第20図－1，16・17）甕片の口縁部5点は、いわゆる烏帽子形の形態をとるものと思われ、大形は口径30㎝、中形24㎝、小形は20㎝の三種類である。竈の構造を考察するうえでの好資料である。

須恵器は坏の細片4点を得たが、ここでは1点（9）のみ図示した。壷片（24）は、肩部（26）は、長頸壷の頸部で、胎土焼成が良好で器面に自然釉をにじませ光沢がある。（25）は甕の口縁片で施文は見あたらない。甕片は12点を図示したが、いずれも器面に畳目の調整痕を有し、器肉の厚薄から大中小の甕片である。（29～41）

第3表にみるごとく出土地点はG2に集中的に多く、かつてはこの付近に平安時代の遺構が存在したのではあるまいか。

中世　珠洲焼の擂鉢片（43）は、G2からの出土で、内側に9条の櫛歯状工具による条痕が付され、胎土焼成はあまり良好でない。市内における珠洲焼擂鉢の出土例は、安源寺、吉田、下小田中遺跡および建応寺跡がある。古銭は天聖元宝（44）1枚があり、北宋（仁宗）天聖元年（1023年）に鋳造されたもので、我が国の平安時代中期に該当するが、G2の出土であることから擂鉢片とセットするものと考えると、中世も室町時代と推定したい。

江戸時代　寛永通宝2枚（46・45）の検出で、前者は分布調査の折りのもので、後者はA2から得た。（45）の背文は、「文」とあって江戸亀戸の銅座で鋳造されたものである。

（金井汲次）

第3表　古代～近世の遺物表

番号	種別	器形	法量 口径	法量 器高	法量 底径	胎土焼成	色調 内側	色調 外側	出土地点	時代	摘要
1	土師	坏	12	3		良好	黄褐	褐	G−2	平安	
2	〃	〃	12	2.5		〃	〃	黄褐	〃	〃	
3	〃	〃	13	2.5		良	黒	褐	G−1	〃	
4	〃	〃	13	2.5		〃	〃	暗褐	G−2	〃	
5	〃	〃	14	3.5		〃	〃	〃	E−7	〃	
6	〃	〃	14	2.5		〃	暗褐	〃	〃	〃	
7	〃	〃		1.3	6	良好	黒	〃	〃	〃	糸切底
8	〃	〃		1.5	6	〃	〃	〃	〃	〃	〃
9	須恵	〃		1.8	6	〃	灰青	灰青	F−2	〃	〃
10	土師	〃		1.5	6	良	黒	暗褐	G−6	〃	〃
11	〃	〃		1.1	6	〃	〃	〃	G−2	〃	〃
12	〃	〃		1	6	良好	黄褐	黄褐	〃	〃	〃
13	〃	壷甕		1.7	6	〃	褐	暗褐	〃	〃	内側底に放射状糸痕
14	〃	坏		1.2	6	良	黒	黒褐	〃	〃	糸切底
15	〃	〃		1.5	6	〃	〃	黄褐	G−1	〃	〃
16	〃	壷		3.5	8	良好	暗褐	暗褐	〃	〃	水びきの痕よく残る
17	〃	〃		3	8	〃	〃	〃	〃	〃	内側に煤付着
18	〃	甕	16	5		良好	赤褐	赤褐	G−2	平安	
19	土師	〃	20	4		良	暗褐	暗褐	〃	〃	
20	〃	〃		9		〃	褐	〃	〃	〃	外側に煤付着
21	〃	〃	24	4		〃	黄褐	黄褐	G−6	〃	
22	〃	〃	30	6		良好	褐	褐	表採	〃	
23	〃	〃	30	8		〃	黄褐	黄褐	G−2	〃	
24	須恵	壷		6		〃	青灰	青黒	A−7	〃	
25	〃	甕	22	4		〃	〃	青灰	表採	〃	
26	〃	壷		5.5		〃	〃	〃	G−2	〃	長頸壷の頸部内外に自然釉
27 28	〃	甕				〃	〃	〃	H−4 A−5	奈良	内側青海波文
29〜41	〃	〃				〃	〃	〃	表採	平安	31.36の外側自然釉
42	〃	壷				〃	〃	〃	G−2	〃	
43	珠洲	擂鉢				良	〃	〃	〃	中世	内側に条痕（9条）
44	古銭		径 2.5			重さ 2.5g			〃	〃	天聖元宝
45	〃		径 2.5			重さ 2.5g			A−2	近世	寛永通宝・背文「文」
46	〃		径 2.4			重さ 2.1g			B−2	〃	〃（59年出土）

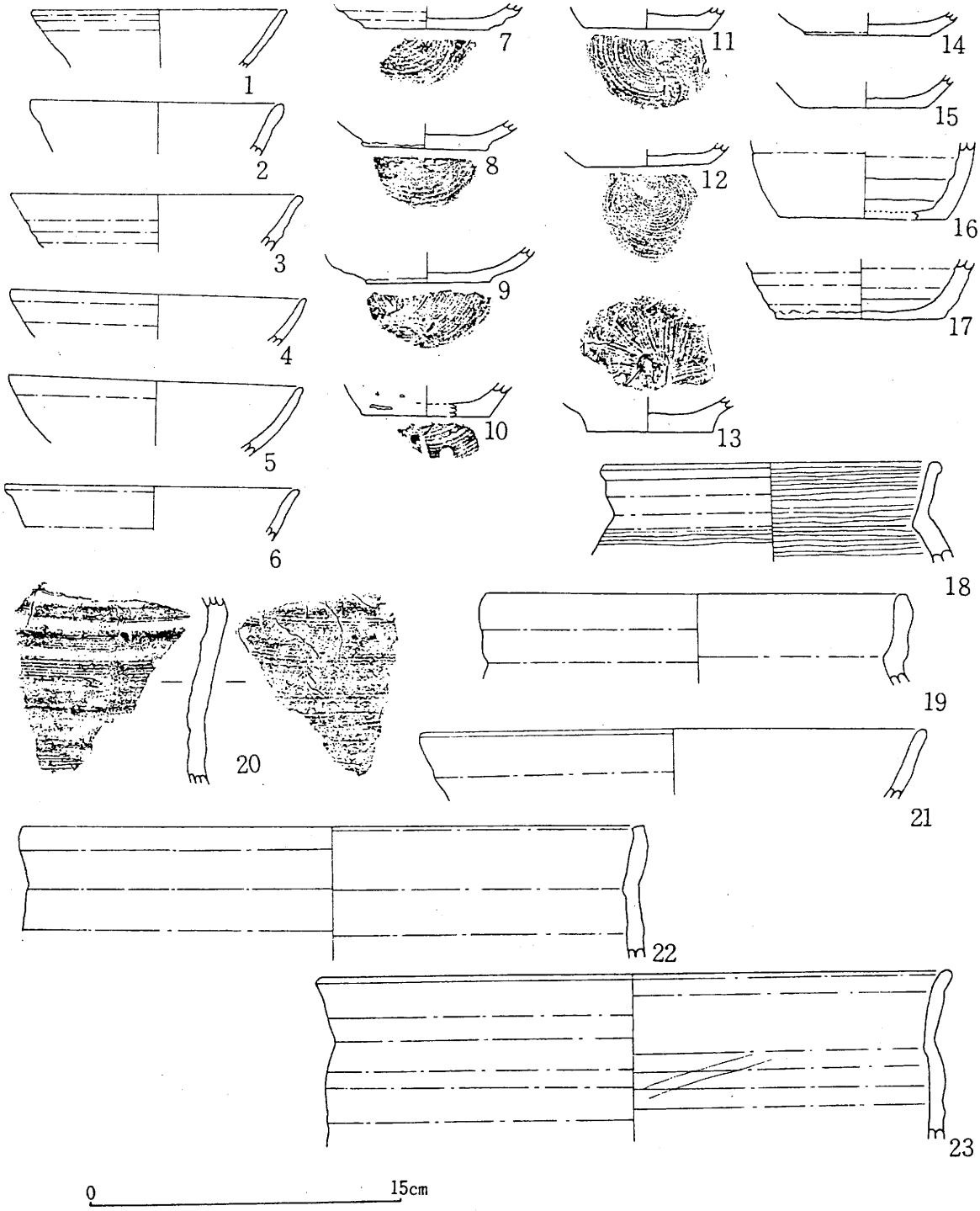
註　1. 口径は図上復元で計測
　　2. 器高は残存部の計測

註　1. 口径は図上復元で計測
　　2. 器高は残存部の計測

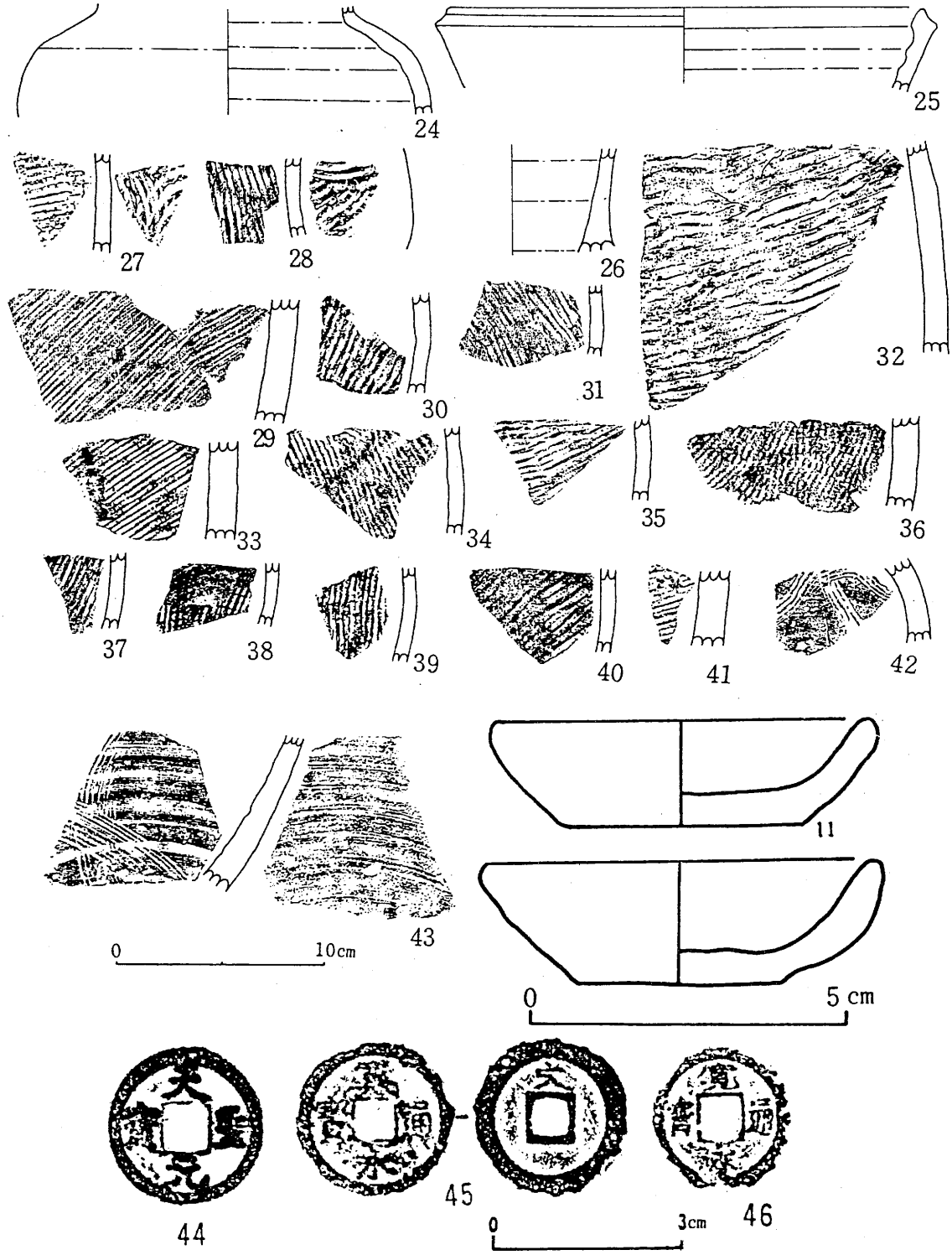
文　献

(1)　中野市教育委員会『間山』　1984

(2)　大塚昌彦「渋川市域における古墳出現の地域相」『三県シンポジウム』千曲水系古代文化研究所他　1984



第20図－1　古代～近世の遺物実測・拓影図



第20図－2　古代～近世の遺物実測・拓影図

第Ⅳ章　総　括

1　弥生時代の遺跡・遺物について

今回の発掘で検出された栗林式の遺物は、いずれも小破片で検出された。（第21図－1、1～8）これもⅠ式では新しい段階に属するもので、今回のような小発掘面積で、趨勢を速断できないが、この期に僅かに稲作を営んだ人々が定着したことが察知される。

栗林Ⅱ式期になると、善光寺平にはこの期の分布圏の拡大と濃密に遺跡が確認されており、これらの傾向は、中野市の北部地域とて同様で、61年にも壁田遺跡で該期の土器が発見された。

第21図－3、32～35は壷形土器の口頸部で、口唇に縄文押捺され、頸部の文様は簡略化の方向にある。第21図－4、39は甕形土器で、やはり口唇に縄文押捺され、頸部に条線の櫛描文が描かれている。これらの土器は、検出された位置から集石状の土壙と関係があると思われる。

善光寺平の弥生編年は、現在、栗林Ⅰ・Ⅱ－吉田式－箱清水式－御屋敷式（弥生最末）と編年されている。これらの形式の時間差は、未確定の面が多いが、弥生後期の千曲川水系には、箱清水式と呼ばれる中部高地型櫛描文の甕や、赤彩された壷、高坏など畿内から強い影響が認められる、極めて画一的な土器が成立する。この時期の細分案は、桐原健氏、[1] 笹沢浩氏[2]等で検討されてきたが、幸い対岸の飯山市田草川尻遺跡Ｙ１号住とＹ３号住の土器様相に変化が認められるとして、前者を箱清水式前葉に後者を箱清水式極盛期の姿相としてとらえた大田文雄氏の論考が発表されている。[3]それによると、前葉の壷形土器の口縁形態は、受口状で強く外反し、ゆるい段状の稜が認められるのに対し、後葉は、やや直立した形態を示し、頸部の文様も前葉はバラエティに富むのに対し、後葉は櫛描Ｔ字状で施文された壷が多くみられる。また、甕形土器の形態は、前葉の短胴形に対し、後葉は長胴形を示すものが多いとされており、高坏についても前葉は坏部の形態が、口縁部まで同じ曲線で内湾しながら外反し、口縁が水平か先端部が下降する形態を示すのに対し、後葉は坏部中央で内折する形態を示しているとされている。

これらの傾向は、同時に発表された臼田武正氏の佐久地方の弥生後期の編年案も似た傾向が認められるとしている。[4]さて、これらの観点から今回発掘の土器をまず住居址出土品から検討すると、P_3の柱穴から検出された甕（第22図－5，46）で、前述の大田編年案によれば、後期後葉の様相を呈しており、後述のＨ４～Ｈ６地点の土器の様相とあまり時間差がないと認められるが、住居址床面上や浮いた状態で検出された土器片には、やや時間差の認められるものもある。（例えば第22図－1，7など）

さて、住居址より南東4 mの位置に小石と土器の集積場が存在し（第18，22図） 復原できた土器が多数存在した。（第4表参照）これらの土器のうち、赤彩された高坏は箱清水期の爛熟期の姿相を現しており、安源寺遺跡第1次調査時出土[5]の高坏に類似しているが、第22図－6，56・60では、口縁形態と胎土焼成に相違がみられる。これが、時期差なのか原産地の手法上の相違なのか、今後の検討課題であろう。なお、この高坏や第22図－5，42・44の塗彩鉢形土器の口縁の小突起状の加飾は、栗林Ⅱ式の長野市平柴平遺跡ＳＢＹ04出土の鉢や、長野市徳間遺跡遺構外出土の鉢にもみられ、佐久市後沢遺跡などの後期の佐久地方全般の遺跡にも散見されるから、長期に亘って時続された様式と考えられ、いささか飛躍するが、これが佐野式土器の口縁の小突起加飾まで祖型がたどれるかどうか。栗林遺跡の未発表資料にも、これと関連したものが存在することを附記しておく。その他、小形の高坏（第22図－3，19）や、器面全体に赤彩された高坏（第22図－3，23）は、頸部に突帯状に肥厚しており、佐久市餅田遺跡出土品は、本例のような顕著な突帯は附加されていないが、安源寺遺跡にも同例が存在する。これらの3例とも脚部・坏部が欠損して発見されており、類品の少ないこととともに何か共通した儀礼などに使用されたのではないかと推測している。またＧ3集石土壙上層から検出された広口壷（第22図－2，13、図版5ノ2）第22図－1，1が同種のもので、この時期としては僅少な口縁形態を示しており、胎土焼成からも搬入品と認定される。また、第22図－2，11，12の壷は、頸部に櫛描Ｔ字文が施文されているが、無塗彩であり、同14の壷も塗彩されているが、ボタン状貼付の形状が簡略化の方向にあり、今までみてきたように多数派の土器と共通する。現在は酒造用の米の蒸し器（または濾器）と考えられている甑形土器も大小1個ずつ検出されたが、これは出現以来、古式土師器の時代まで塗彩されずに存在する。また、笹沢浩氏が「飯山形」[6]とされた折り返し口縁の甕も第22図－5、48、第22図－4、39と指摘することができる。手づくね土器（第22図－3、20）も中央に径1㎜程の孔が貫通した特異な形状をしている。

以上概説した通り今回の発掘によって、箱清水式文化の究明にいささかなりとも寄与する土器の発見されたことを喜びたい。（檀原長則）

文　献

(1) 中野市教育委員会『安源寺』中野市安源寺遺跡緊急発掘報告　1967

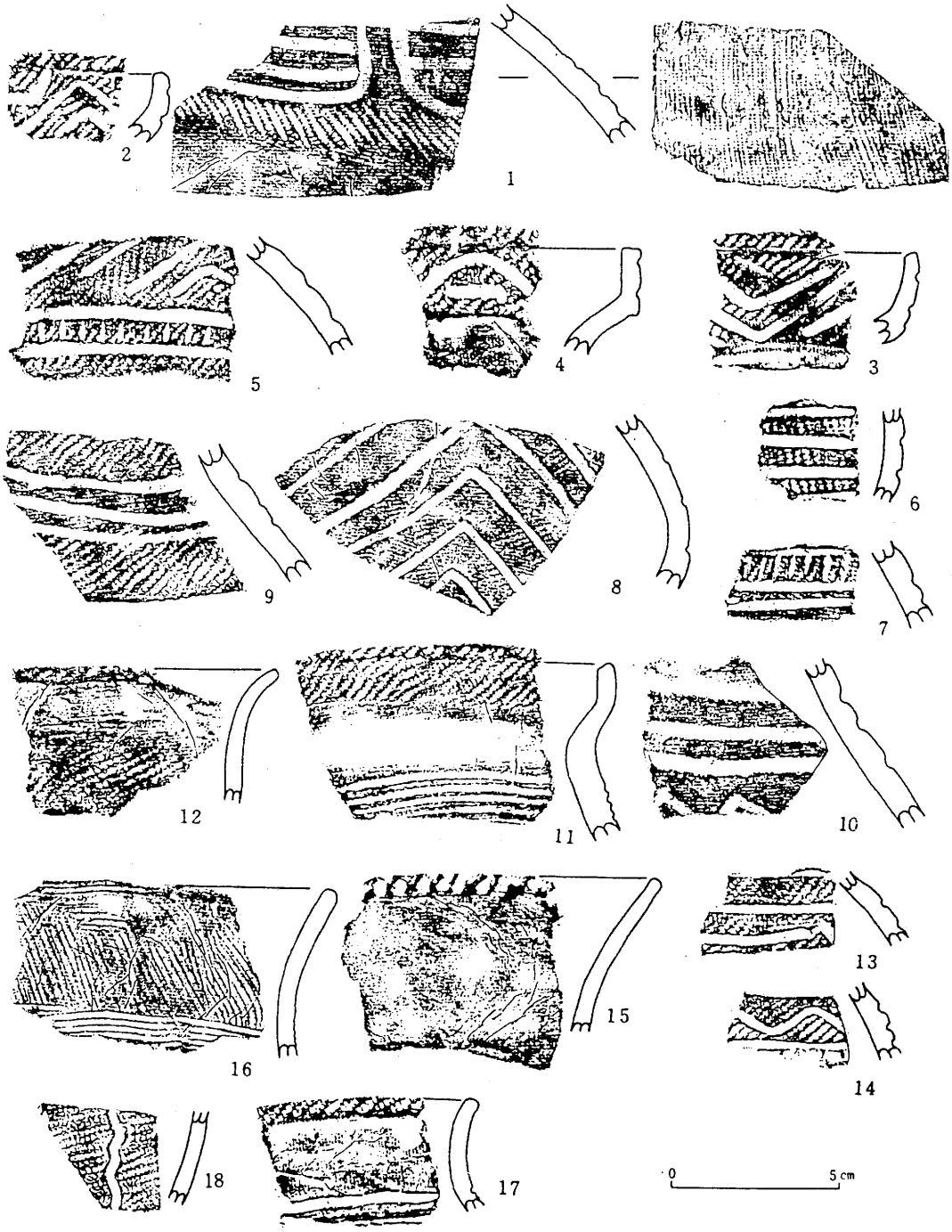
(2) 笹沢　浩　「箱清水土器の再検討」『信濃』Ⅲ 22－4　1970

(3) 大田文雄　「北信濃の弥生後期編年について　－田草川尻遺跡出土土器を中心として－」『信濃』Ⅲ 32－4　1980

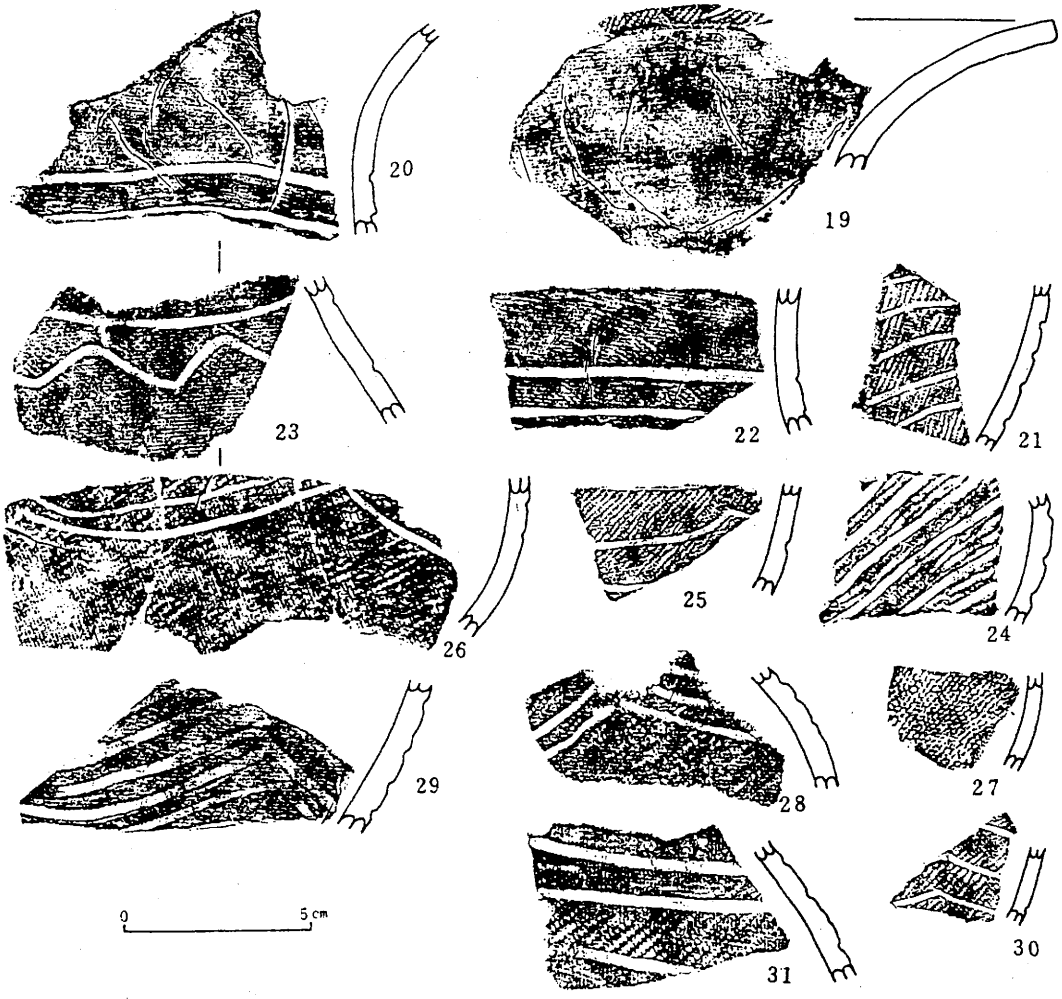
(4) 臼田武正　「佐久地方出土の後期弥生式土器について」　文献(3)と同じ

(5) 桐原　健・田川幸生　「長野県安源寺遺跡の弥生式土器」『信濃』Ⅲ 14－4　1962

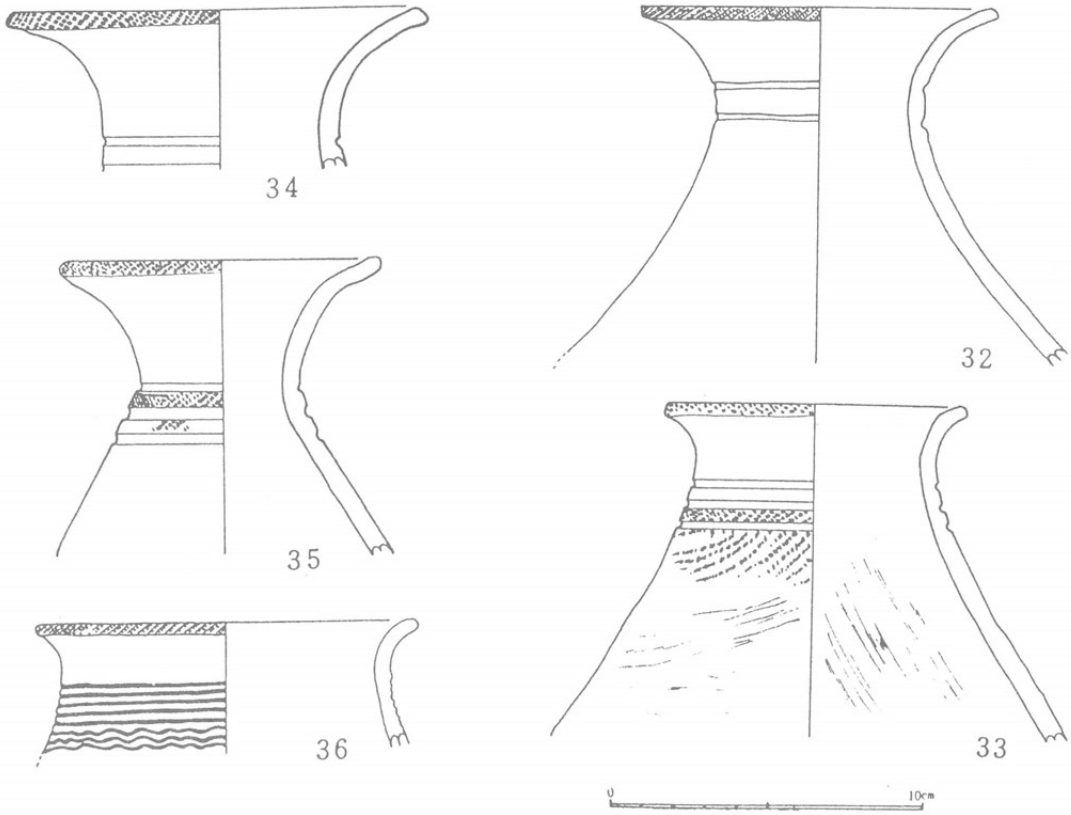
(6) 笹沢　浩　「箱清水式土器の文化圏と小地域」『歴史手帖』　1986



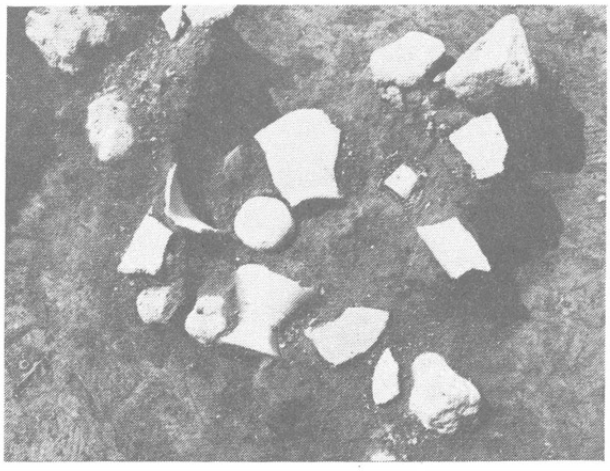
第21図－1　弥生中期後葉土器拓影図



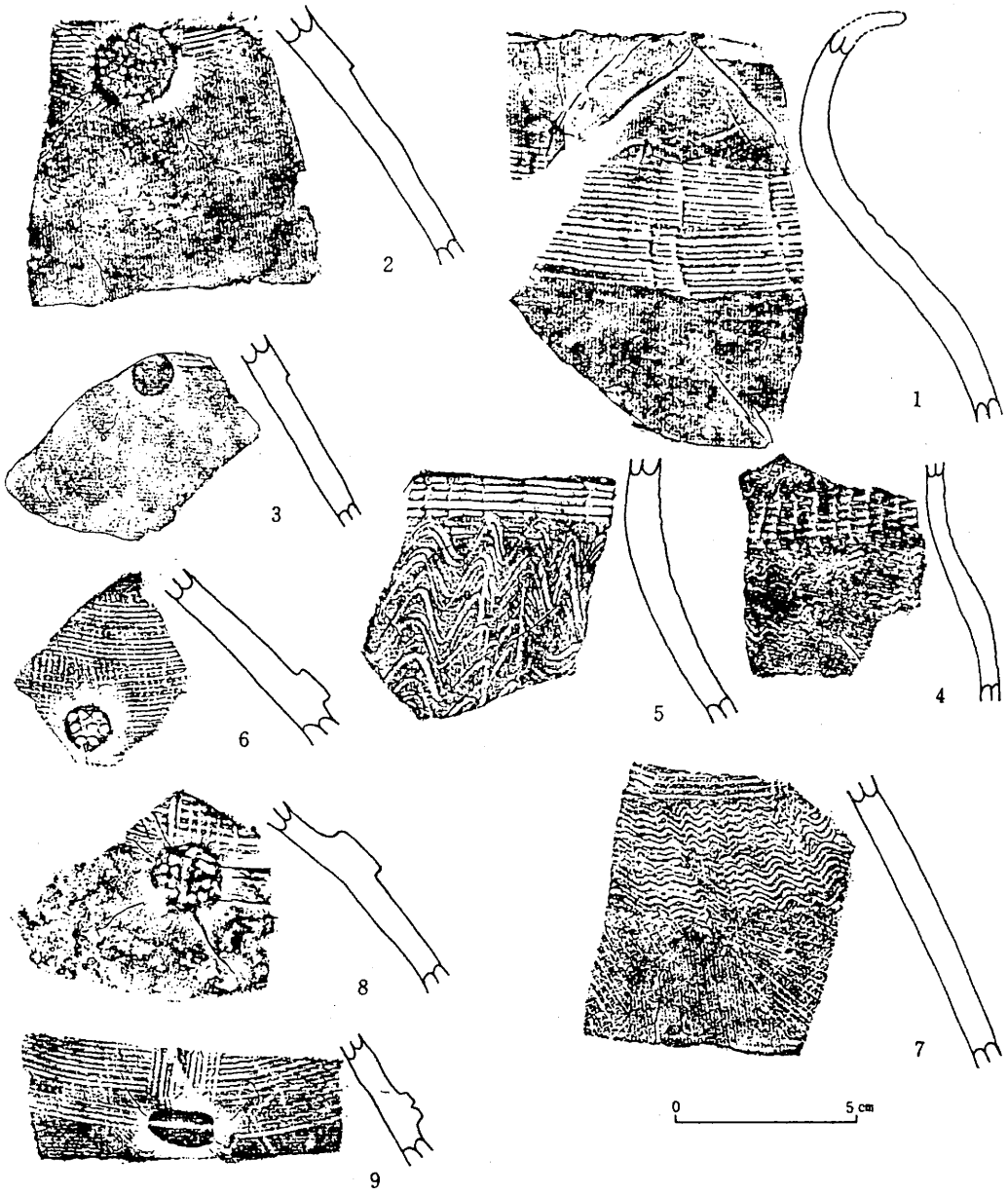
第21図－2　弥生中期後葉土器拓影図



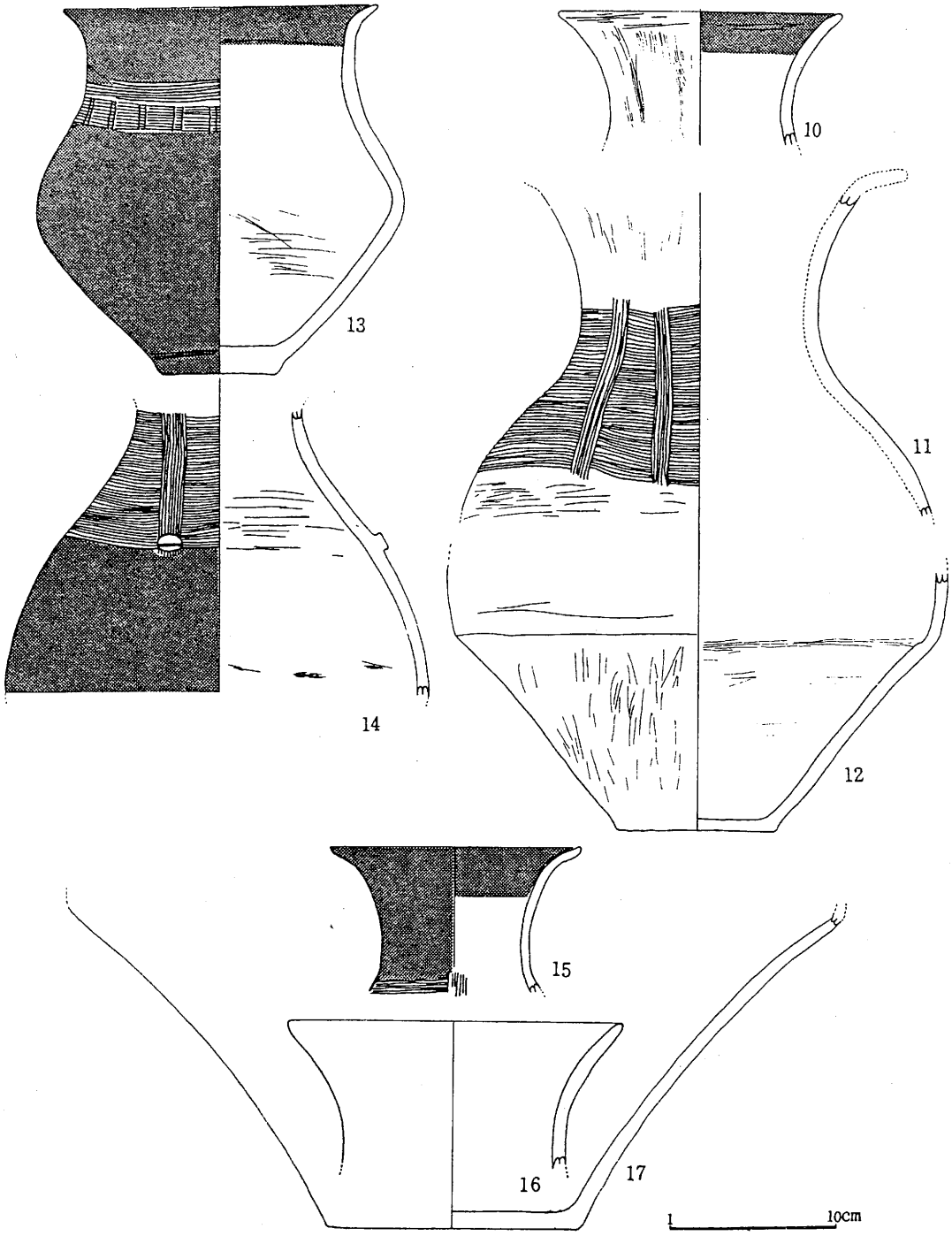
第21図－3　弥生中期後葉土器実測図



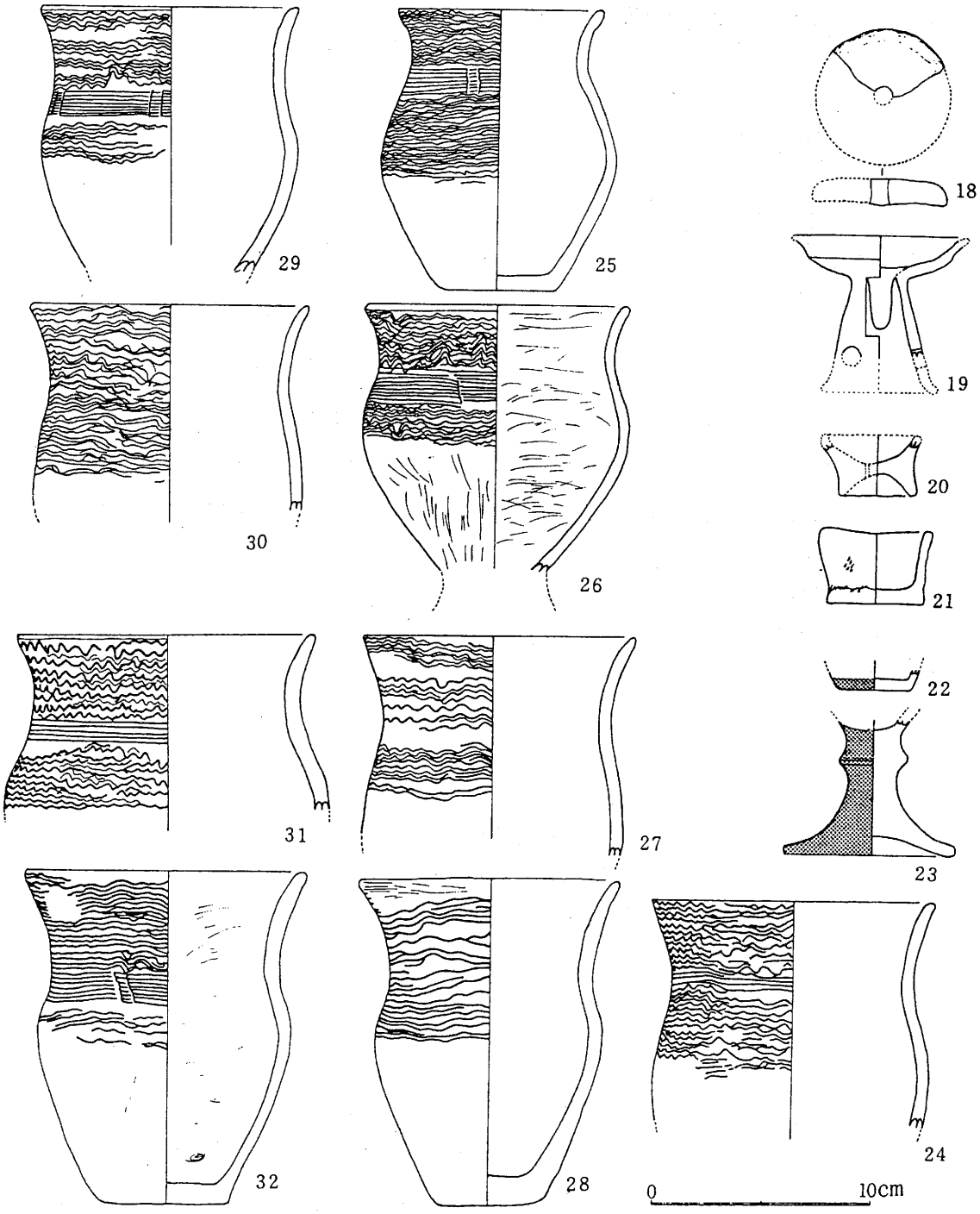
第21図－4　弥生中期後葉土器出土状況



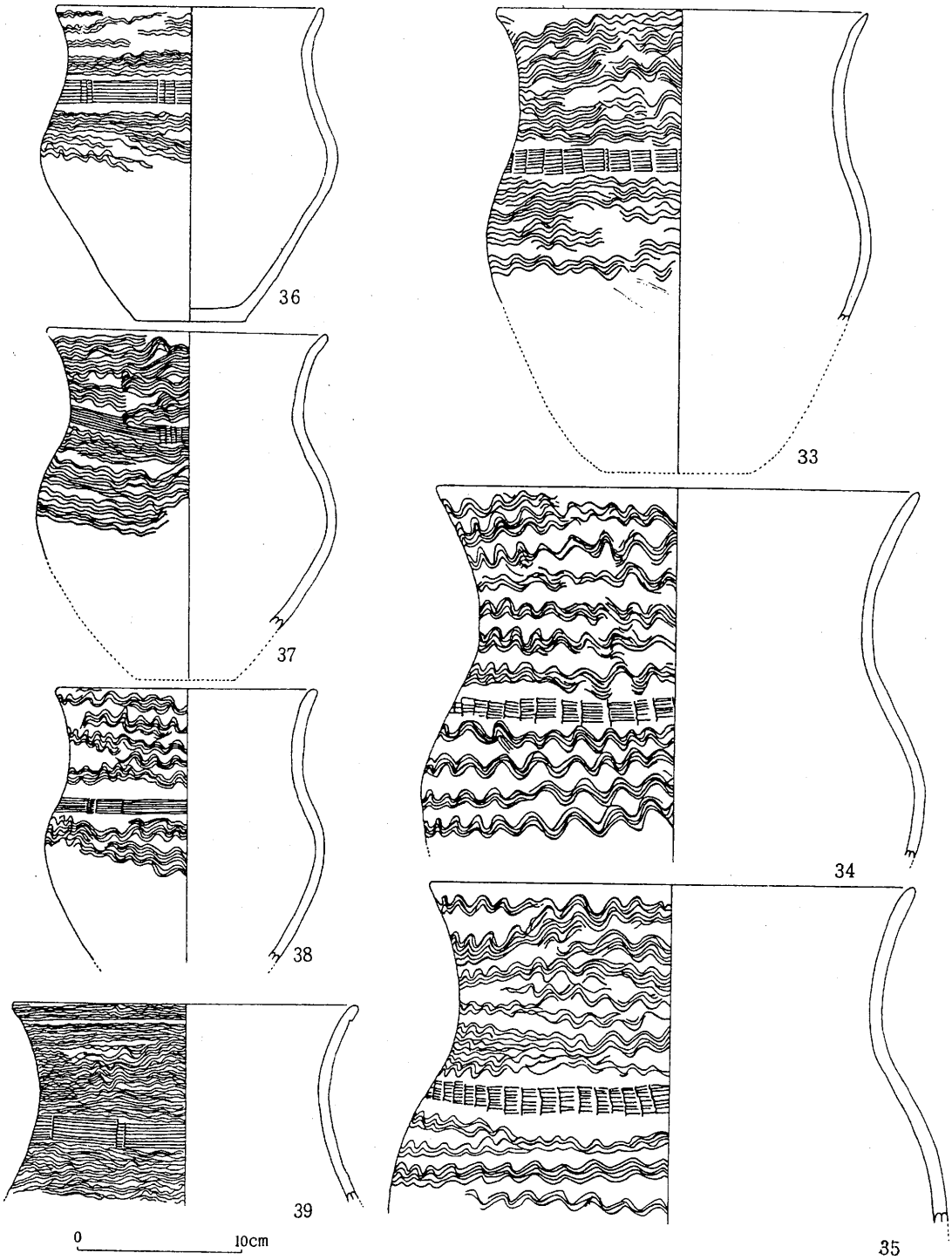
第22図－1　弥生後期土器拓影図



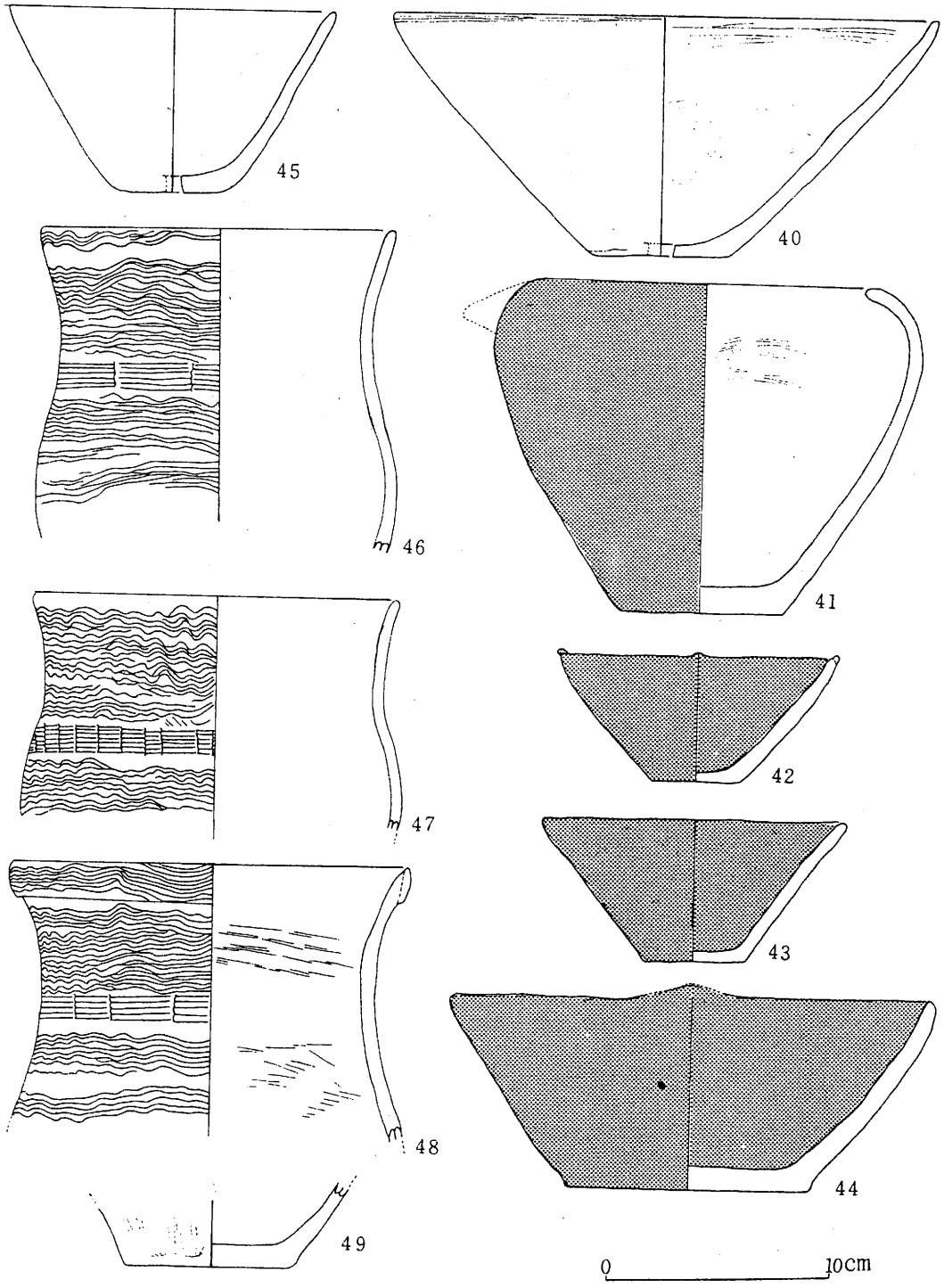
第22図－2　弥生後期土器実測図(1)



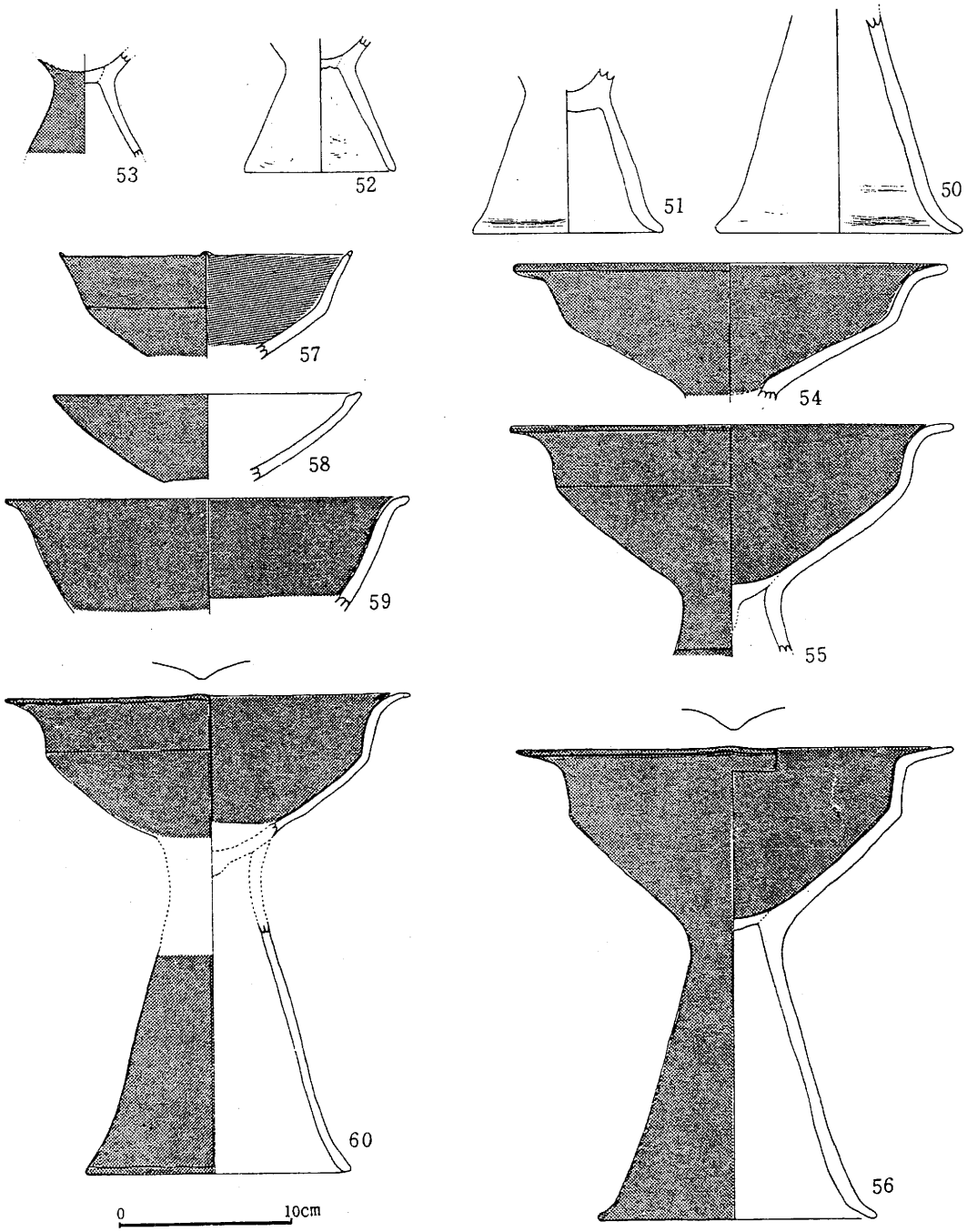
第22図－3　弥生後期土器実測図 (2)



第22図－4　弥生後期土器実測図(3)



第22図－5　弥生後期土器実測図(4)



第22図－6　弥生後期土器実測図(5)

2 むすび

田上の地域は、線と光と水にめぐまれた所で、原始時代の人々も山幸・海幸の恩恵によくしていたことであろう。この集落には5個の七ツ鉢（共同石臼）が現存していることからもこのことが理解できよう。谷状地形の低湿地で、沢の水を利用した弥生中期の稲作が開始されているが、これが市内最北端にあたり、栗林式土器や石器が出土している。それ以降、現代に至る稲作農耕の歴史のあとをたどることができる。

北部農業用水浄化場建設予定地の緊急分布調査を昭和59年9月29日に実施し、柱穴址や弥生・土師器片・寛永通宝等を得た。本格的な調査は60年4月18日に鍬入れを実施し、6月4日に終了した。検出した遺構や遺物は前述したとおりである。

また、周辺調査によって、新資料として縄文草創期の土器片・石器を発見した。県史や市誌には縄文中期までを載せているが、田上の歴史は5千年以上さかのぼることになった。

弥生後期の竪穴住居址1戸は豪雪地域のためか、隅丸方形プランの南西側の入口に雪よけの庇をつけていた。市内では、はじめての例である。住居址内や、集石址・土壙内からは多量の箱清水式土器を得、石器類も検出した。

奈良時代の須恵器片、平安時代の土師器（糸切底）、中世の擂鉢・古銭（天聖元宝）、近世の陶磁器片・古銭（寛永通宝）等の検出をみたが、各時代の複合遺跡であることが判明した。

発掘調査は農繁期にもかかわらず調査団員をはじめ地域の方々の御協力を得て、記録保存事業が成功裡に終了したことを心から感謝いたす次第である。　（金井汲次）

第4表　H4～H6地点遺物表（第19図）

縄文時代

時　期	図版番号	器　種	備　考
早期未葉	第8図　2	深　鉢	
前期前葉	〃　11	〃	羽状文
〃	〃　17	〃	〃
〃	〃　22	〃	〃
〃	〃　27	〃	条線文
〃	〃　29	〃	浄隆文
中期未葉	〃　32	〃	ワラビ状貼付
〃	〃　51	〃	縄　文

弥生時代

時　期	図版番号	器　種	備　考
百瀬式併行	第21図29	壷	
〃	〃　30	〃	
箱清水式	第22図10	〃	
〃	〃　11	〃	
〃	〃　12	〃	
〃	〃　14	〃	
〃	〃　16	〃	
〃	〃　17	〃	炉体に使用
〃	〃　18	紡　錘　車	
〃	〃　19	小形高坏	塗彩なし
〃	〃　20	手づくね土器	
〃	〃　22	小　形　甕	
〃	〃　23	高坏状土器	塗　彩
〃	〃　24	小　形　甕	
〃	〃　25	〃	
〃	〃　26	小形甕台付	
箱清水式	第22図27	小　形　甕	
〃	〃　28	〃	
〃	〃　29	〃	
〃	〃　31	〃	
〃	〃　32	〃	
〃	〃　36	甕	
〃	〃　37	〃	
〃	〃　38	〃	
〃	〃　39	〃	
〃	〃　40	大　形　甑	
〃	〃　41	片　口　鉢	塗　彩
〃	〃　43	鉢	〃
〃	〃　45	甑	
〃	〃　47	甕	
〃	〃　49	〃	底部籾痕
〃	〃　51	高　坏	塗採なし
〃	〃　52	〃	塗　彩
〃	〃　53	〃	〃
〃	〃　54	〃	〃
〃	〃　55	〃	〃
〃	〃　56	〃	〃 完形
〃	〃　57	〃	塗　彩
〃	〃　60	〃	〃ほぼ完形
〃	第18図　6	敲　打　石	

第5表　田上遺跡の既出遺物観察表（第4・5図）

（　）推定口径
〔　〕残存口径

番号	器種	法量 (cm) 器高	口径	底径	形態上の特徴（手法上）	胎土	焼成	色調 内	外	出土地点	時期	摘要
1	甕	22.5	13.9	5.9	長胴形 ナデミガキ	砂粒あり	堅緻	淡黒褐色	淡黒褐色	田上 新田	弥生後期	(蔵) 倭小学校 (寄) 市村近義氏
2	壷	16	15.6	6	口縁朝顔形 下腹部陵あり	砂粒少	やや堅緻	口縁赤彩 茶褐色	赤彩		〃	(蔵) 倭小学校
3	台付甕	約 (16)	12.8	約 (7)	塗彩の如く光沢あり	〃	極めて堅緻	〃	〃	田上 新田	〃	(蔵) 倭小学校 (寄) 市村近義氏
4	小形甕	8.4	10	4.5	外反の器形	〃	堅緻	茶褐色	茶褐色		〃	(蔵) 倭小学校
5	局部磨石斧	(長径) 14.8	(短径) 6.7	(厚) 3.5	刃部磨装 両刃	（石質） 蛇紋岩系			灰白色	田上 日向	先土器 Ⅰc期	(蔵) 倭小学校 (寄) 山田直正氏、
6	蛤刃石斧	17	74	4.3		閃緑岩			濃緑色	自宅地	弥生中期	(蔵) 清水篤氏
7	打石斧		6	1.8		安山岩			黒色	〃	縄文	(蔵) 倭小学校 (寄) 丸山宗治郎氏
8	〃	14.3	5.7	1.9		〃			〃	田上 岩木場	〃	(蔵) 倭小学校
9	磨石斧	9.3	3.6	2	両刃	蛇紋岩系			濃緑色	田上 薬師木場	〃	(蔵) 山田幸三氏
10	〃	7.8	3.2	1.1	片刃	〃			〃		〃	同上

（第4図）

1	尖頭器				木葉形（片面）						先土器 Ⅱb期	(蔵) 常田勇氏
2	〃				槍先形（両面）						〃	(蔵) 三井秀次氏

縄文時代土器観察表（第8図－1）

1					楕円押型文	砂粒多	やや堅緻	淡茶褐色	黒褐色	表採	早期	
2					竹管文	白色粒	脆弱	淡黄褐色	淡黄褐色	GH4	前期	
3					条線文刺突文	繊維痕	〃	〃	淡灰褐色	表採	早期末	
4					縄文	〃	〃	〃	淡赤褐色	A2	〃	
5					丸組縄文	〃	〃	赤褐色	淡黄褐色	表採	〃	
6					〃	〃	〃	淡黄褐色	茶褐色	住居址	〃	
7					羽状文	〃	〃	濃茶褐色	黒褐色 茶褐色	E	〃	
8					〃	〃	〃	〃	濃赤褐色	A	〃	
9					〃	〃	〃	黄褐色	黒褐色	表採	〃	
10					〃	〃	〃	濃茶褐色	黄褐色	E	〃	
11					〃	〃	〃	淡黒褐色	赤褐色	A	〃	
12					〃	〃	〃	淡黄褐色	淡黄褐色	H4～6	〃	
13					〃	〃 多	〃	濃茶褐色	赤褐色	E	〃	
14					羽状文環付縄	〃	〃	濃黄褐色	黒褐色	G3	〃	
15					〃	〃	〃	茶褐色	〃	表採	〃	
16					〃	〃	〃	淡黒黄色	赤褐色	E	〃	
17					〃	〃	〃	赤褐色	〃	H4～6	〃	

第6表　縄文時代土器観察表（第8図－2・3図）

番号	品種	法量(cm) 器高	口径	底径	形態上の特徴（手法上）	胎土	焼成	色調 内	外	出土地点	時期	摘要
18					縄文・羽状文 刺突文	繊維痕	脆弱	黄黒褐色	黒褐色	表採	前期	
19					縄文・羽状文	〃	〃	茶褐色	黄褐色	G2	〃	
20					〃・刺突文	〃	〃	灰褐色	赤褐色		〃	
21					〃・羽状文	〃	〃	赤褐色	黒褐色		〃	
22					〃	〃	〃	黄褐色	淡黄褐色	H4～6	〃	
23					〃・羽状文	〃	〃	赤黄褐色	黄褐色	住居址	〃	
24					条線文 竹管C字文	砂粒少	堅緻	黒褐色	黒褐色	A7	前期末	
25					集合条線文	〃	やゝ堅緻	黒赤褐色	赤褐色	F3～4	〃	
26					条線文	石英粒	〃	灰褐色	灰褐色	表採	〃	
27					〃	白色粒	〃	赤褐色	〃	H4～6	〃	
28					集合条線文	〃	〃	黄褐色	淡黒褐色	E	〃	
29					条線文 浮隆文	〃	〃	茶褐色	濃茶褐色	H4～6	〃	
30					基隆線文	〃	〃	赤褐色	赤褐色	表採	中期	
31					渦巻文	砂粒大	〃	〃	〃	A	〃	
32					厥状文	長石粒	堅緻	黒褐色	茶褐色	H4～6	〃	
33					隆線分	白色粒	〃	〃	黒褐色	E	中期末	
34					縄文	〃	〃	灰茶褐色	淡黒褐色	住居址	中期	
35					〃	〃	〃	〃	〃	表採	中期末	34と同体
36					縄文・竹管文	〃	〃	淡茶褐色	〃	A	〃	
37					縄文・結節文	長石粒	〃	灰褐色	淡茶褐色	A	〃	
38					沈線文	石英粒	やゝ堅緻	淡茶褐色	〃	H3～4	〃	
39					隆帯文	白色粒	〃	灰褐色	〃 黒褐色	表採	中期末 ～後期	口縁帯あり
40					縄文・隆帯文	石英粒	〃	〃	淡茶褐色	G2	〃	
41					〃・沈線文	白色粒	〃	〃	黒褐色	〃	〃	
42					〃	〃	やゝ脆弱	淡黄褐色	茶褐色	E	〃	
43					縄文・磨消	〃	〃	濃茶褐色	濃茶褐色	A8	〃	磨消縄文帯
44					縄文	〃	〃	灰白色	濃灰白色	A	〃	
45					撚糸文 沈線文	石英粒	堅緻	淡黄褐色	淡黄褐色	表採	後期	
46					平行沈線文		やゝ堅緻	赤褐色	濃赤褐色	住居址	〃	

第7表　縄文時代土器観察表（第8図－3）

番号	器種	法量(cm) 器高	口径	底径	形態上の特徴（手法上）	胎土	焼成	色調 内	外	出土地点	時期	摘要
47					撚糸文	石英粒	堅緻	濃灰褐色	淡黄白色	E、表採	後期	
48					条線文	〃	〃	赤褐色	淡茶褐色	A 8	〃	
49					〃	〃	やや堅緻	〃	濃茶褐色	住居址	〃	
50					〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	49と同体
51					縄文	白色粒	堅緻	茶褐色	黒褐色	H 4	〃	
52					〃	〃	やや堅緻	暗茶褐色	〃	A 8	〃	
53					〃	石英粒	〃	暗黄褐色	明茶褐色 黒褐色	〃	〃	
54					羽状文	白色粒	〃	〃	赤褐色	E	〃	
55					〃	石英粒	〃	黄褐色	淡黒褐色	A 6	〃	
56					〃	〃	〃	淡黒褐色	白黄褐色	A 8	〃	
57					〃	石英粒 鉄分粒	〃	黄褐色	〃	E	〃	
58					〃、沈線文	白色粒		灰褐色	〃	住居址	〃	

弥生時代土器観察表（第21図）栗林式　　中期中半～後葉

1	壷				擬工字文	白色粒 鉄分粒	極めて堅緻	黄褐色	黒褐色 黄褐色	表採	栗林式	内側 縦に八ケ目
2	〃				山形山形文	石英粒	やや堅緻	〃	〃	A 9	栗林Ⅱ式	口縁部
3	〃				〃	〃	堅緻	明黒褐色	明黒褐色	表採	〃	〃
4	〃				〃	〃	やや堅緻	暗黄褐色	赤褐色	A 8	〃	
5	〃				山形沈線文 突刺文	〃	〃	灰黒褐色	灰黒褐色	〃	〃	
6	〃				平行沈線文	鉄分粒	脆弱	黄赤色	赤褐色	E	〃	
7	〃				平行沈線文 突刺文	石英粒	〃	暗灰色	明黄褐色	A 9	〃	
8	〃				山形文	〃	堅緻	黄褐色	黒色	A 8	〃	
9	〃				平行沈線文	〃	〃	黒褐色	黄赤色	A 9	〃	
10	〃				平行沈線文 山形文	〃	やや堅緻	黄褐色	赤褐色	〃	〃	
11	〃				磨消縄文 沈線文	〃	堅緻	黒褐色	灰黒色	〃	〃	
12	甕				磨消縄文	〃	脆弱	暗白黄色	〃	〃	〃	
13	壷				〃	〃	やや脆弱	〃	茶褐色	A 3	〃	
14	〃				山形沈線文 突刺文	〃	〃	淡赤褐色	黄褐色	A 9	〃	
15	〃				刻目文	〃	〃	淡黄褐色	淡黄褐色	G 2	〃	
16	〃				八ケ目文	〃	〃	黒褐色	淡黒褐色		〃	
17	〃				沈線文	〃	堅緻	灰褐色	黒灰褐色	住居址	〃	
18	〃				蛇行沈線文	砂粒少	〃	明茶褐色	明茶褐色	表採		

第８表　弥生時代土器観察表（第21図）中期中半～後葉

番号	器種	法量(cm) 器高	口径	底径	形態上の特徴（手法上）	胎土	焼成	色調 内	外	出土地点	時期	摘要
19	壷				朝顔状口縁 口唇縄文	石英粒	堅緻	淡赤褐色	淡茶褐色	H9	栗林式	
20	〃				平行沈線文	〃 少	〃	淡茶褐色	〃	A8	〃	
21	〃				磨消縄文 沈線文	〃	〃	黒色	暗茶褐色	住居址	〃	
22	〃				平行沈線文	〃	〃	淡茶褐色	淡茶褐色	A8	〃	
23	〃				〃 山形沈線文	〃	〃	暗灰褐色	〃	〃	〃	22と同体
24	〃				磨消縄文 沈線文	〃	〃	明茶褐色	明茶褐色	住居址	〃	
25	〃				〃	〃	〃	黒褐色	黒色	〃 覆土	〃	
26	〃				磨消縄文 山形沈線文	〃	〃	白褐色	明茶褐色	A8	〃	22,23,26同体
27	〃				縄文	〃	〃	明茶褐色	黒褐色	〃	〃	
28	〃				山形沈線文	石英粒	やゝ堅緻	白褐色	赤褐色	A9	〃	
29	〃				〃	〃	堅緻	灰白色	淡黄褐色	H4～6	〃	
30	〃				磨消縄文 沈線文	〃	〃	黒色	暗茶褐色	〃	〃	21と同体
31	〃				磨消縄文 平行沈線文	〃 少	〃	灰白色	暗灰褐色	住居址	〃	

弥生時代土器観察表（第21図－３）　中期後葉

32	壷		(11.5)		長頸	砂粒少	堅緻	黒褐色	黒褐色	A9	栗林式 後続形式	
33	〃		(9.6)		〃	〃	〃	黄褐色	黄褐色	〃	〃	
34	〃		13.5)		〃	〃	〃	黒褐色	黒褐色	〃	〃	
35	〃		(10.5)		〃 うすく塗彩	〃	やゝ堅緻	明黄褐色	黒褐色 赤褐色	〃	〃	黒斑あり
36	甕		(12.5)		櫛描文Ａ	〃	堅緻	明黒褐色	黒褐色	〃	〃	

弥生時代土器観察表（第22図－１）後期

1	壷				広口壺 簾状文	石英粒	堅緻	赤彩 明黒褐色	赤彩	住居址	箱清水式	
2	〃				Ｔ字文交点下 ボタン貼付	鉄分粒	やゝ堅緻	灰白色	〃	H3	〃	
3	甕				〃	石英粒少	〃	明黒褐色	暗灰褐色	F6	〃	後期中葉
4	〃				簾状文密 波状文	〃	〃	明茶褐色	黒褐出 赤褐色	G4	〃	
5	〃				〃	〃	〃	〃	〃	A8	〃	
6	壷				櫛描平行文 簾状文 ボタン貼付	〃	〃	黒色 明黄白色	明黄褐色	住居址	〃	
7	〃				波状文赤彩 ヘラがき文	〃	〃	暗灰褐色	暗灰褐色	〃	〃	ベニガラがたれる
8	〃				Ｔ字文赤彩 ボタン貼付	〃	〃	暗赤褐色	赤彩 暗赤褐色	表彩	〃	
9	〃				Ｔ字文赤彩 ボタン貼付	〃	堅緻	灰白色	赤彩 赤褐色	A8	〃	

第9表　弥生時代土器観察表（第22図）後期

番号	器種	法量			形態上の特徴（手法上）	胎土	焼成	色調		出土地点	時期	摘要
		器高	口径	底径				内	外			
10	壷	(8)	(17)			石英粒	やゝ脆弱	暗赤彩	黒褐色 黄褐色	H4～6	箱清水G式	ヘラ磨き
11	〃	(20)			櫛描T字文	〃	〃	黄褐色	黄褐色	〃	〃	〃
12	〃	(15)		9.7	下腹部陵あり	鉄分粒	〃	〃	明黄褐色	〃	〃	
13	〃	21.8	19	7	簾状文赤彩	石英粒	堅緻	暗赤彩	暗灰褐色	G2	〃	
14	〃	(16.5)			T字文 ボタン・赤彩	〃	やゝ堅緻	〃	明黄褐色	H4～6	〃	
15	〃	(8.8)	15.3		T字文　赤彩	石英粒少	〃	赤彩	赤彩	G2	〃	
16	〃	(8.5)	20		無塗彩	鉄分粒	やゝ脆弱	明黄褐色	黒褐色 明黄褐色	H4～6	〃	内・外、ヘラ磨きだけ
17	〃	(19)		15.5	下腹部陵あり	〃	〃	黒褐色 暗褐色	灰褐色	〃	〃	炉体土器
18	紡錘車	1.2	(6.2)	(0.9)	土製・塗彩	石英粒少	堅緻		黄赤色	〃	〃	1／3残存
19	小形高坏	(6)	(8)		坏部陵あり 窓3ケ	〃	〃	明黄赤色	明黄赤色	〃	〃	
20	手づくね	(2.3)			ヘラ跡顕著 貫通孔	〃	〃	暗灰褐色	暗灰褐色 黒褐色	〃	〃	
21	〃	3.5	5	4.5	手づくね痕	〃	やゝ堅緻	〃	〃	表採	〃	
22	小形甕	(1)		3.4	小形土器	〃	〃	黒褐色	暗赤彩	H4～6	〃	
23	小形高坏	(6.2)		7.9	カップ形高坏	〃	〃	暗赤彩	〃	〃	〃	底部まで赤彩
24	小形甕	(10.2)	13		波状文 平行文	〃	堅緻	黒褐色	黒褐色	〃	〃	
25	〃	12.8	9.5	5.3	波状文密	石英粒	やゝ堅緻	〃	〃	〃	〃	
26	台付小形甕	(12)	12		簾状文 波状文	石英粒少	堅緻	黒褐色 茶褐色	〃	〃	〃	
27	小形甕	(9.2)	12.5		波状文	鉄分粒	やゝ堅緻	〃	〃	〃	〃	
28	〃	15	12	4.5	波状文のみ	石英粒	堅緻	黒褐色	黒褐色 茶褐色	〃	〃	
29	〃	(12)	(12)		波状文 簾状文	〃	やゝ堅緻	〃	〃	〃	〃	
30	〃	(9.2)	(13)		波状文のみ 剥落	〃	〃	〃	暗茶褐色 黒褐色	A	〃	
31	〃	(10.7)	(13.8)		波状文 平行文	石英粒少	堅緻	暗茶褐色	黒褐色			
32	〃	15.3	13	6	波状文 簾状文	石英粒	〃	暗赤褐色	黒褐色 赤褐色	H4～6	箱清水G式	
33	甕	(13)	(22.2)		〃	〃	〃	暗灰褐色	黒褐色	住居址	〃	柱穴
34	〃	(21.8)	(29)		〃	〃	やゝ堅緻	暗黄褐色	〃	FG6	〃	
35	〃	(20)	(29.2)		〃	〃	堅緻	暗灰褐色	〃	G2	〃	
36	〃	19	16.3	6.7	〃	〃	〃	〃	黒褐色 黄褐色	H4～6	〃	
37	〃	(14)	(17)		〃	〃	〃	明茶褐色	黒褐色 暗灰褐色	H3	〃	
38	〃	(16.5)	(15.5)		〃	〃	〃	黒褐色	〃	H4～6	〃	

第10表　弥生時代土器観察表（第22図）後期

番号	器種	法量 (cm) 器高	口径	底径	形態上の特徴（手法上）	胎土	焼成	色調 内	外	出土地点	時期	摘要
39	甕	(12)	(11)		折りかえし口縁 波状文、簾状文	鉄分粒	堅緻	明黄褐色	黒褐色	H 4～6	箱清水式	

（第27図）　弥生時代　後期

40	大形甑	(10.7)	(24.3)	(6)	ナデ ヘラ磨き	鉄分粒	やや堅緻	明茶褐色	明茶褐色	H 4～6	箱清水式	
41	片口鉢	14.6	14.5	7.3	小突起口縁 赤彩	〃	脆弱	暗茶褐色	暗赤彩	〃	〃	
42	鉢	(5.7)	(12.5)	(3.5)	赤彩	石英粒	〃	赤彩	赤彩	E	〃	
43	〃	6.8	13.6	4.5	〃	〃	堅緻	〃	〃	H 4～6	〃	
44	〃	(6.1)	(21.7)	(11)	小突起口縁 赤彩	〃	〃	〃	〃	住居址	〃	
45	甑	8.1	14.6	4.8	ヘラ磨き	〃	やや堅緻	黄褐色	黄褐色	H 4～6	〃	外面は粗雑な磨き
46	甕		(15.8)		長胴形	〃	〃	暗黄褐色	黒褐色	A 8	〃	
47	〃		(16.3)			〃	〃	暗褐色	黒褐色 赤褐色	H 4	〃	
48	〃		(18)		折りかえし口縁	〃	堅緻	黄褐色	赤褐色	住居址	〃	
49	〃			7.5	底部	鉄分粒	〃	〃	黒褐色	H 4～6	〃	籾痕長径 0.6 短径 0.35
50	高　坏	(12.3)		(14)	うすく塗彩 窓なし	石英粒	やや堅緻	〃	灰褐色	A 8	〃	脚部のみ
51	〃	(9.3)		(11)	ヘラ磨きのみ 窓なし	〃	〃	赤褐色	暗黄褐色	H 4～6	〃	〃
52	〃	(7.7)		(9)	ヘラ磨き粗雑 塗彩なし	〃	堅緻	〃	暗赤褐色	〃	〃	〃
53	〃	(5.8)			脚内無塗彩	石英粒多	〃	脚内暗黄褐色	赤彩	〃	〃	〃
54	〃	(7.5)	(25)		口縁小突起？	鉄分粒	〃		〃	〃	〃	坏部
55	〃	(13.4)	(25.5)		坏底部を後にふさぐ	〃	〃	脚内赤褐色	〃	〃	〃	坏部
56	〃	27.4	25.2	16	小突起4ケ所	〃	やや堅緻	脚内明黄褐色	〃	〃	〃	完形
57	〃	(6.3)	16.5		小突起	〃	〃		〃	〃	〃	坏部
58	〃	(5)	(18)			〃	〃		〃	住居址	〃	坏部 50と同体
59	〃	(6.4)	(23.5)		うすく塗彩	石英粒	堅緻		暗赤彩	〃	〃	
60	〃	(17.6)	23.5	15.5	小突起4ケ所	〃	〃	脚内明黄褐色	〃	H 4～6	〃	

石器観察表　（第18図）

1	磨　石	(長径) 11.4	(短径) 3	(厚) 1						住居址	弥生後期	
2	異形磨石	9.7	5.6	2						表採		
3	凹　石	12	8.7	4.7						〃	縄文	
4	敲打石	14.5	4.5	2.4						E	弥生	
5	〃	14.9	5.2	2.8						A 2	〃	
6	〃	12.7	5.7	2.8						H 4～6	〃	

第11表　石器観察表　（第18図）

番号	器種	法量			形態上手法上の特徴	石質	色調	出土地点	時期	摘要
		長径	短径	厚						
7	石錘	7.5	5.5	1.4	自然石の両端を欠く	砂岩	灰褐色	住居址	縄文～弥生	魚網用
8	磨石	5.5	5.2	4.6	自然石	安山岩	〃	表採	〃	食料加工用
9	敲打石	8.5	7.5	5.1	〃	〃	〃	〃	〃	〃
10	〃	6.8	6.8	5	〃	〃	〃	A 10	〃	〃
11	小形臼状石	11.8	10	7.4	多孔の安山岩	〃	〃	G 3	弥生	〃
12	〃	13.7	15.6	9	〃	〃	〃	表採	〃	〃
13	石皿	31.9	25.5	7	自然石を加工	〃	〃	A 12	〃	〃
14	石鏃	2.1	1	0.2		黒曜石	明黒褐色	G 2	縄文	狩猟
15	白玉	0.7	0.7	0.5		滑石	暗褐色	G 3	弥生	装飾、模造品？
16	小形磨石	4.3	2.2	0.6		硅石	暗赤褐色	住居址	縄文～弥生	土器面を磨く？

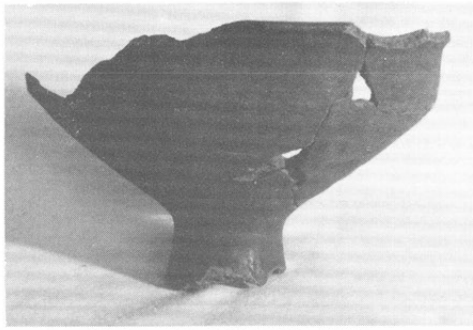
図　　版

1.　祈願祭

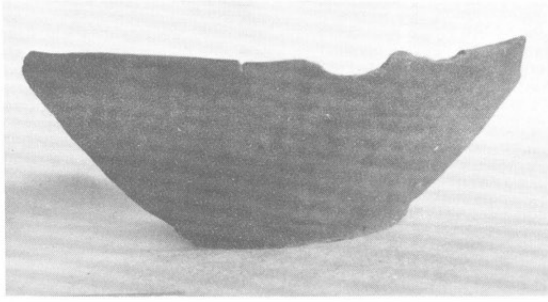
2.　調査団

3.　現地説明会

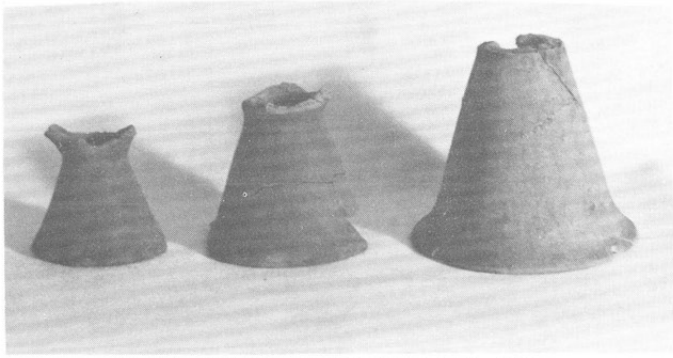
1. 弥生後期中形甕形土器



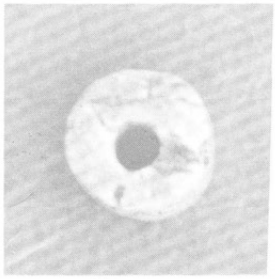
2. 同右 高坏形土器上半部



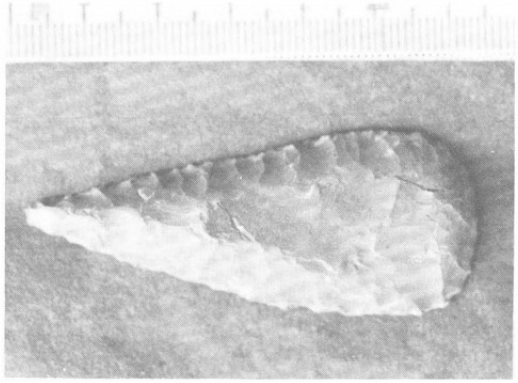
3. 同 鉢形土器



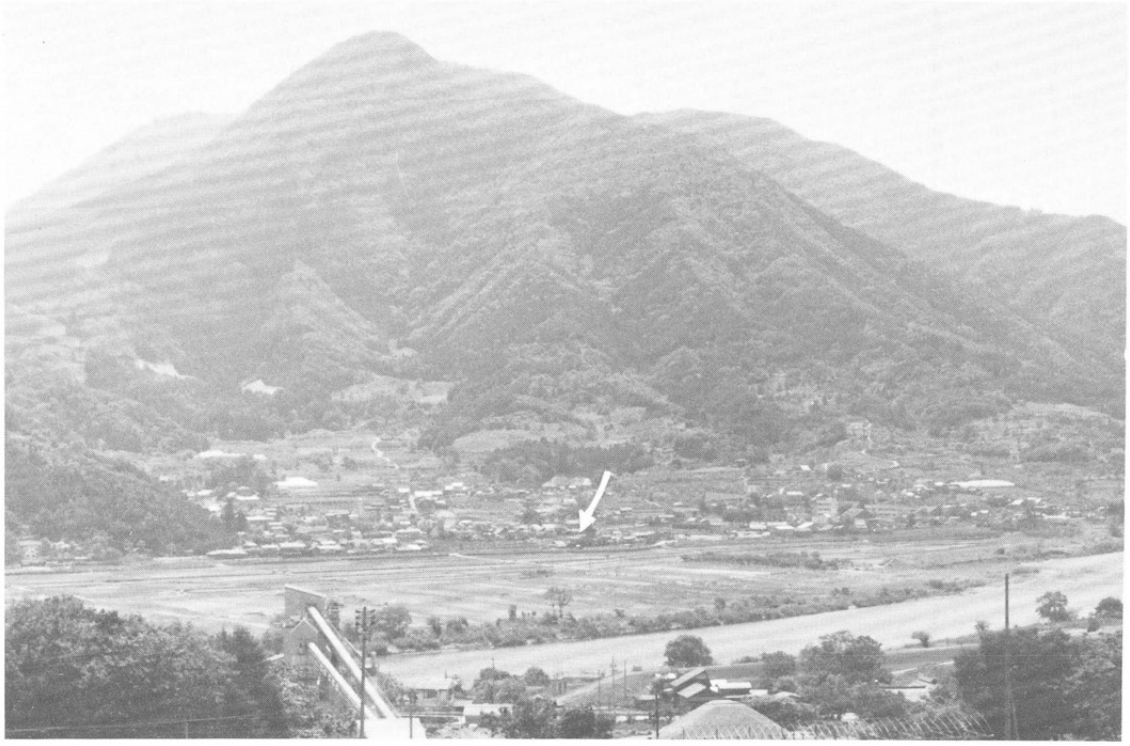
4. 弥生中期後葉・後期高坏形土器 脚部



5. 白玉

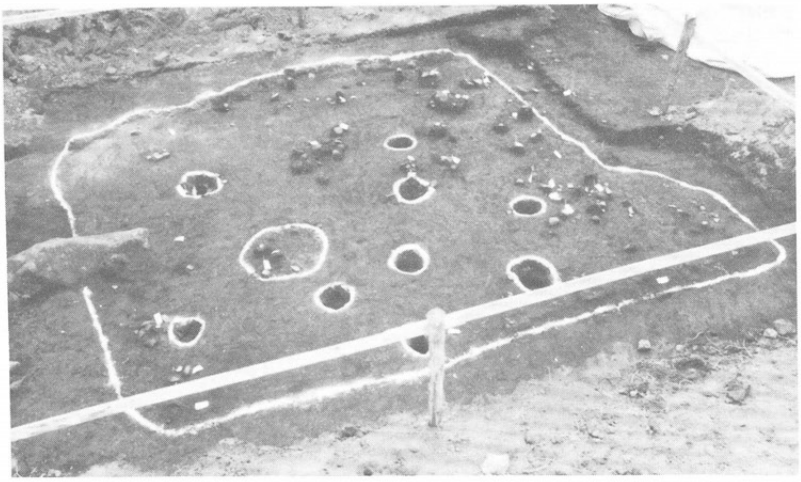


6. 田上 飯綱前出土尖頭器

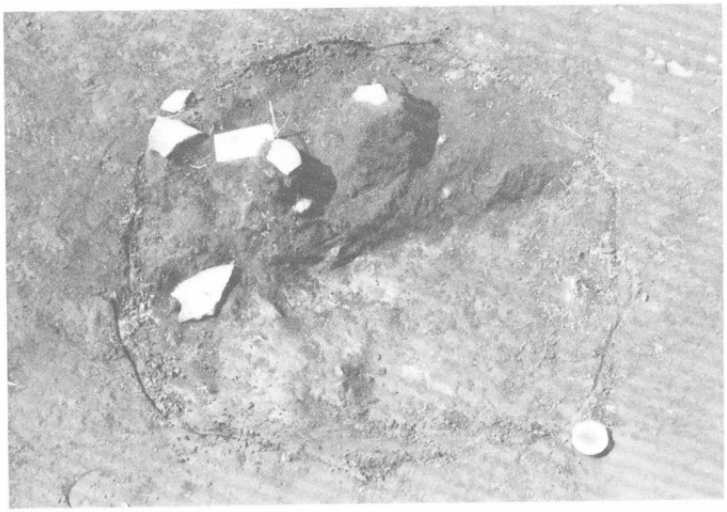


1.　飯山市秋津より遺跡を望む　手前左　田草川尻遺跡

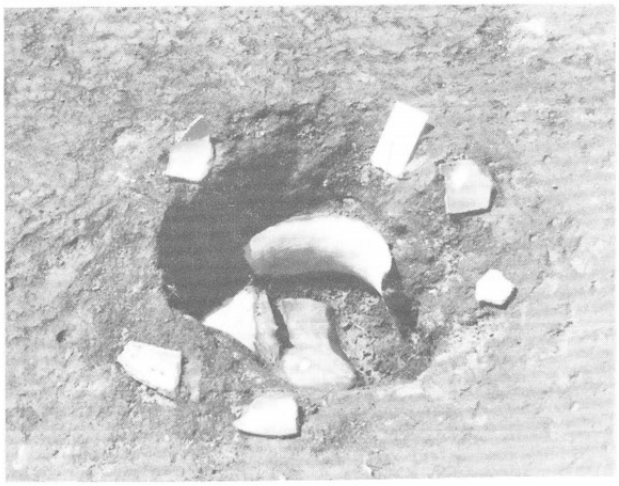
2.　Y住居址全景（北方より）



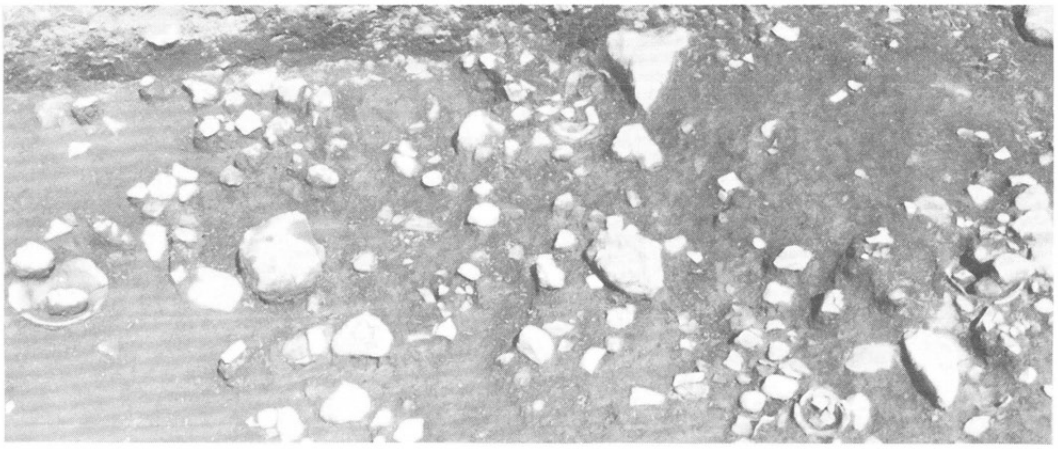
1.　Y住居址（西方より）



2.　炉 址



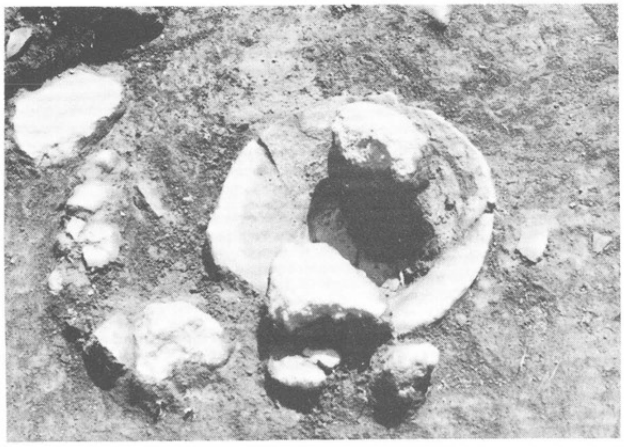
3.　柱穴と甕



1. H_4 ～ H_6 地点全景（西方より）

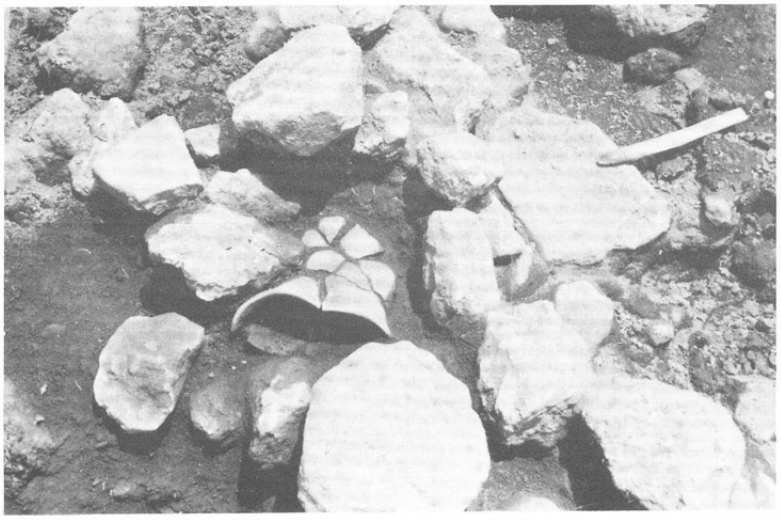
2. 壷出土状態

3. 高坏出土状態



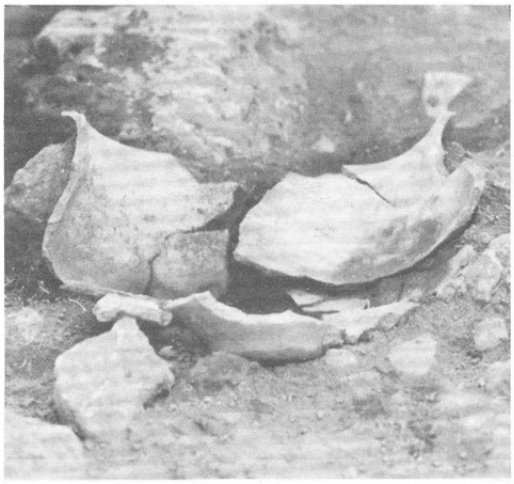
1.　H_4 ～ H_6 地点　壷下半部出土状態

2.　同　壷頸部出土状態

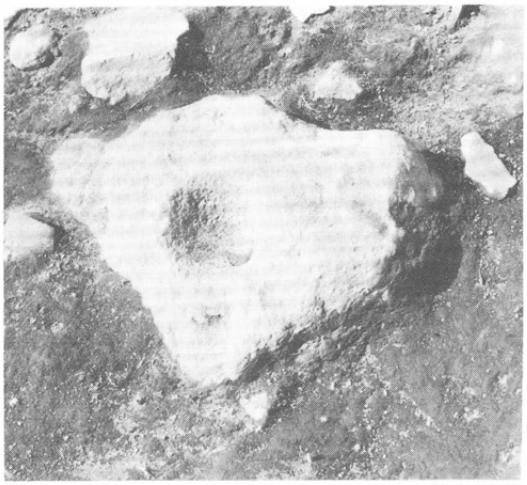


3.　同　小形甕出土状態

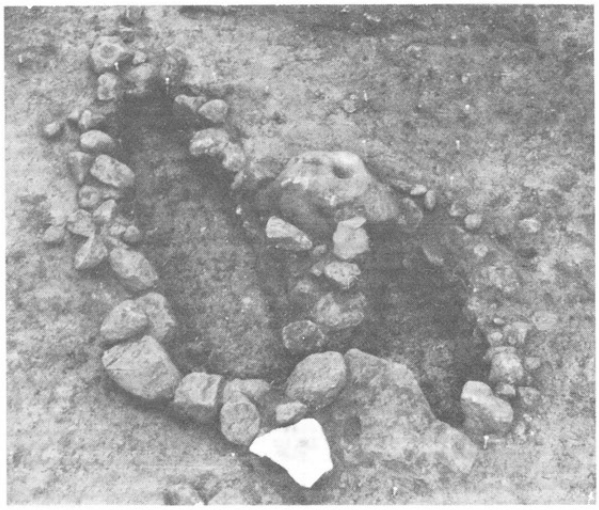
1. G_3地点 集石土壙上層



2. 同 壷出土状態

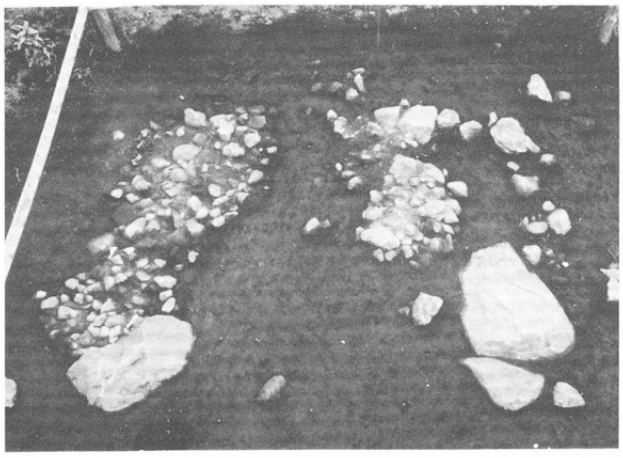


3. 同 小形臼形石出土出土状態



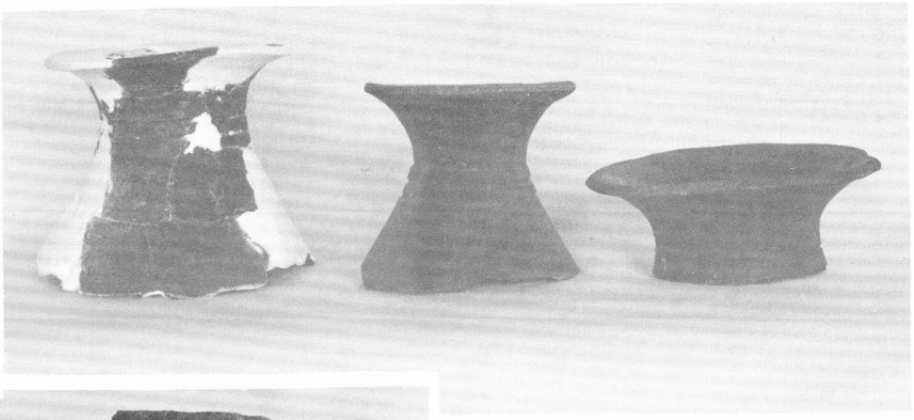
4. 同 集石土壙下層

1.　A地点B_9～B_{11} 全景（東より）

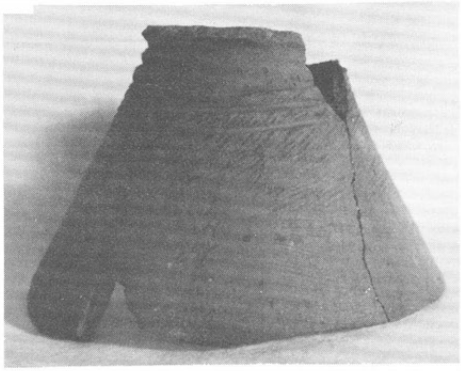


2.　A１号土壙上層　　A２号土壙（西方より）

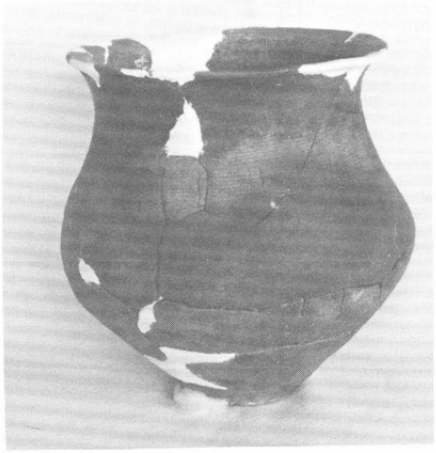
3.　同上　下層　　同上　下層



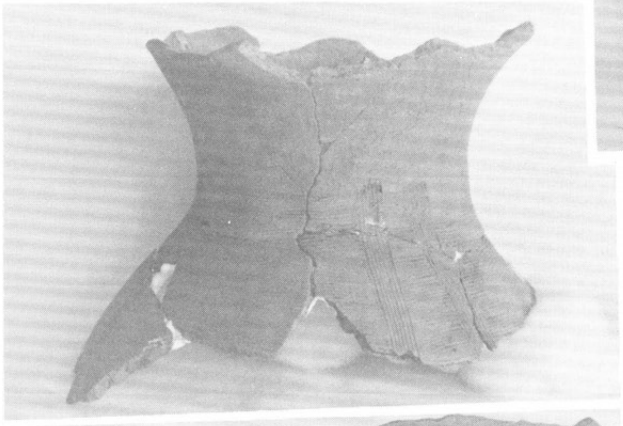
1. 弥生中期 後葉壷形土器頸部

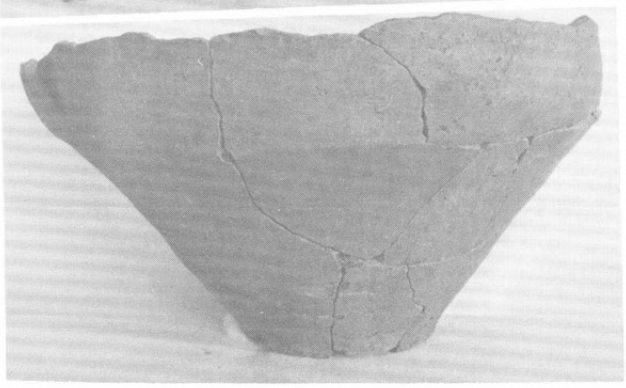


← 2. 同上

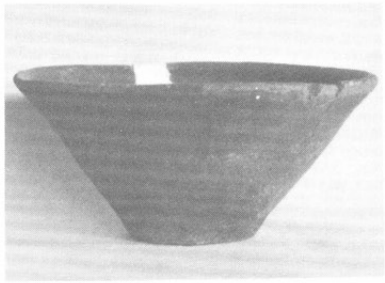


3. 弥生後期 壷形土器

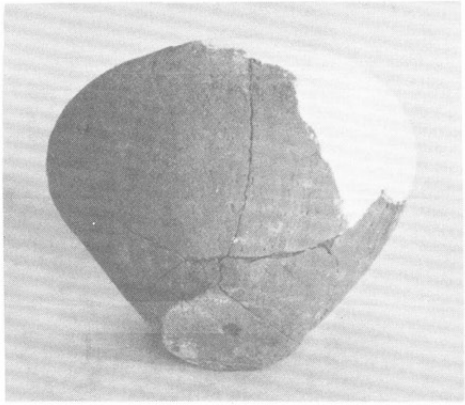




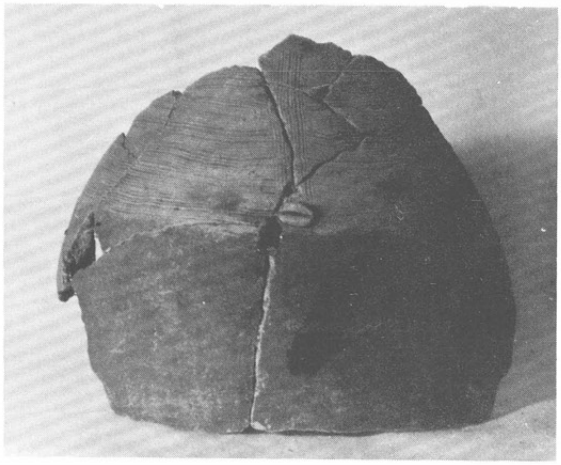
4. 弥生後期 壷形土器



5. 同 上 鉢形土器

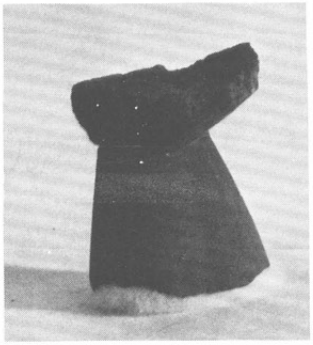


1. 弥生後期 甑形土器



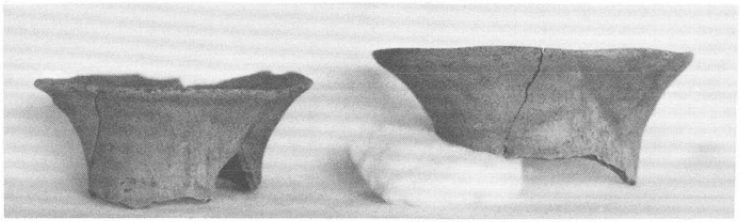
2. 弥生後期 壷形土器胴部

3. 同 壷形土器下半部



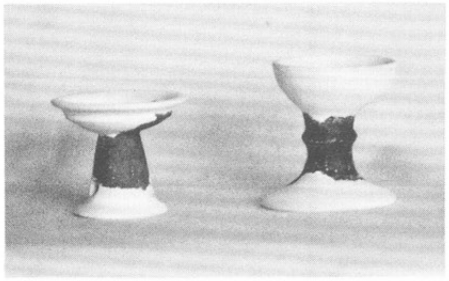
4. 同 器台形土器破片

5. 同 片口形土器



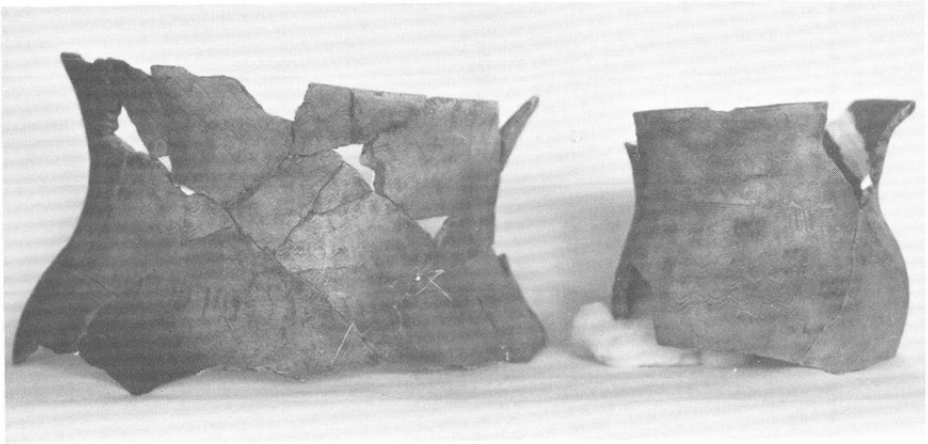
1.　弥生後期　壷形土器頸部

2.　同　高坏形土器



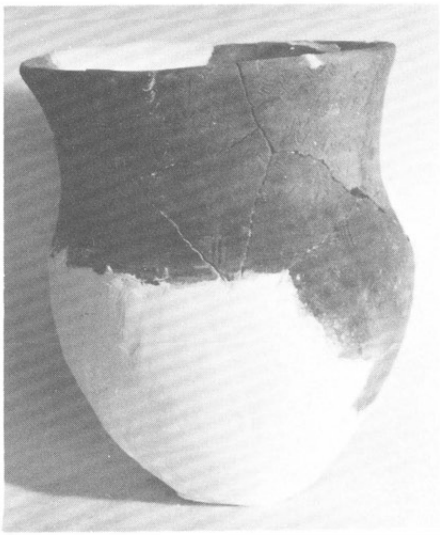
3.　同　小形高坏形土器

4.　同　小形甕形土器、台付甕形土器



1. 弥生後期 甕形土器

2. 同　小形甕形土器



3. 同　中形甕形土器

4. 同　Y住居址柱穴出土

中野市田上寺の前遺跡発掘調査報告書

田　上

昭和61年3月

編者
発行　中野市教育委員会
　　中野市三好町1－3－19

印刷　カナイ美術印刷
　　中野市中央2－2－2